

# 京都市内遺跡発掘調査概報

平成14年度

2003年3月

京 都 市 文 化 市 民 局

## ごあいさつ

京都は、山紫水明の恵まれた自然と、世界に誇る貴重な文化遺産に満ち、更には長い歴史と伝統に培われた文化がまちに息づく文化首都といわれる都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には、時代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在しております。

このような埋蔵文化財は、日本の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって我が国の文化発展の基礎をなすものであることが広く認識され、その保存と活用が図られなければなりません。

しかしながら、埋蔵文化財包蔵地内において土木工事等の開発行為が行われる場合などにそのままにしておくと埋蔵文化財に重大な影響を及ぼします。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私たちは、その保存と開発との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があります。

本市では、こうした考えの下、京都の貴重な埋蔵文化財の保護に努めており、この度、平成14年度に文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施したものです。

各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ、御指導、御助言を賜りました関係機関の皆様に深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役に立てば幸いに存じます。

平成15年3月

京都市文化市民局長

杉原和彦

# 例 言

- 1 本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成14年度の京都市内遺跡発掘調査概要報告である。
- 2 調査地は、下記のとおりである。
  - I 山科本願寺南殿跡 京都市山科区音羽伊勢宿町38-1・2、27-1
  - II 長岡京跡左京北一条三坊三町・東院推定地 京都市南区久世殿城町600-1
  - III 方広寺大仏殿跡 京都市東山区大和大路通正面茶屋町（豊国神社境内）
  - IV 平安宮西院跡・聚楽遺跡 京都市上京区下立売通千本東入下の中務町928他1筆
  - V 栢ノ杜遺跡 京都市伏見区醍醐柏森町29、醍醐南端山20-2
- 3 本書の執筆分担は以下のとおりである。
  - I 出口 勲、II 百瀬正恒、III 田中利津子、IV 上村和直、V 小森俊寛
- 4 整理作業および本書の作成には、上記執筆者の他に以下の者が参加した。

磯部 勝・上田栄治・近藤知子
- 5 本書に使用した写真の撮影は、遺構・遺物ともに主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。
- 6 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 7 測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位及び座標値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位mを省略）による。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 8 本書で使用した地図は、京都市発行の都市計画基本図（山科・小山・久世・五条大橋・聚楽廻・石田、縮尺1/2,500）を参考にし、作成したものである。
- 9 本書の編集は、上村和直・出口 勲が行った。

# 本文目次

I	山科本願寺南殿跡	
1	調査経過	1
2	遺跡の位置と環境	2
3	遺構	7
4	遺物	14
5	まとめ	16
II	長岡京跡左京北一条三坊三町・東院推定地	
1	調査経過	21
2	遺構	23
3	遺物	26
4	まとめ	29
III	方広寺大仏殿跡	
1	調査経過	33
2	遺跡の位置と環境	34
3	遺構	34
4	遺物	36
5	まとめ	38
IV	平安宮西院跡・聚楽遺跡	
1	調査経過	41
2	遺構	43
3	遺物	47
4	まとめ	53
V	栢ノ杜遺跡	
1	調査経過	59
2	地層と遺構	61
3	遺物	67
4	遺跡復元概念図について	72
5	遺跡の成立から終焉	75
6	まとめ	77
	報告書抄録	79

## 図 版 目 次

- 図版 1 山科本願寺南殿跡 遺跡
- 1 3トレンチ全景 (北から)
  - 2 5トレンチ全景 (西から)
- 図版 2 山科本願寺南殿跡 遺跡
- 1 1トレンチ全景 (北西から)
  - 2 2トレンチ全景 (西から)
- 図版 3 山科本願寺南殿跡 遺跡
- 1 5トレンチ 堀1完掘状況 (北から)
  - 2 5トレンチ 堀1断面の状況 (北壁 南西から)
- 図版 4 山科本願寺南殿跡 遺跡
- 1 3トレンチ 暗渠4・溝8 (南西から)
  - 2 3トレンチ 建物5・柵6 (西から)
- 図版 5 山科本願寺南殿跡 遺物
- 出土遺物
- 図版 6 長岡京跡左京北一条三坊三町・東院推定地 遺跡
- 1 西区 近世耕作溝群全景 (東から)
  - 2 東区 近世耕作溝群全景 (西から)
- 図版 7 長岡京跡左京北一条三坊三町・東院推定地 遺跡
- 1 西拡張区 長岡京期全景 1期 (東から)
  - 2 西拡張区 S D50全景 1期 (南から)
- 図版 8 長岡京跡左京北一条三坊三町・東院推定地 遺跡
- 1 西拡張区 長岡京期全景 2期 (東から)
  - 2 西拡張区 S D50全景 2期 (南から)
- 図版 9 方広寺大仏殿跡 遺跡
- 1 調査区全景 (東から)
  - 2 調査区全景 (西から)
- 図版10 方広寺大仏殿跡 遺跡
- 1 2000年度調査1区 石敷き (北から)
  - 2 2000年度調査1区 根固め検出状況 (東から)
- 図版11 方広寺大仏殿跡 遺跡
- 1 2000年度調査2区 大仏台座検出状況 (西から)
  - 2 2000年度調査4区 基壇南端部・地覆石検出状況 (南から)

- 図版12 平安宮西院跡 遺跡
- 1 第1面全景（北から）
  - 2 第2面全景（北から）
- 図版13 平安宮西院跡 遺跡
- 1 築地150（北東から）
  - 2 調査区北壁断面（南東から）
- 図版14 平安宮西院跡 遺物
- 出土軒瓦
- 図版15 平安宮西院跡 遺物
- 出土軒瓦
- 図版16 平安宮西院跡 遺物
- 1 溝70出土土師器
  - 2 溝70出土須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器
- 図版17 栢ノ杜遺跡 遺跡
- 1 NW区全景（東から）
  - 2 SE区全景（北から）
- 図版18 栢ノ杜遺跡 遺跡
- 1 NW区トレンチ1（東から）
  - 2 NW区トレンチ2（東から）
- 図版19 栢ノ杜遺跡 遺跡
- 1 SE区東西トレンチ1（西北西から）
  - 2 SE区南北トレンチ（北から）
- 図版20 栢ノ杜遺跡 遺物
- 1 NW区出土土器
  - 2 SE区出土土器
  - 3 SE区出土土器
- 図版21 栢ノ杜遺跡 遺物
- 出土軒瓦

## 挿 図 目 次

図 1	調査地位置図 (1 : 5,000).....	1
図 2	土塁の現存状況 (北西から) .....	3
図 3	周辺の調査 (1 : 10,000) .....	4
図 4	調査区配置図 (1 : 500).....	8
図 5	3・5トレンチ平面図 (1 : 200).....	9
図 6	1トレンチ平面図 (1 : 200).....	10
図 7	2トレンチ平面図 (1 : 200).....	10
図 8	堀 1・土塁 2 断面図 (1 : 80) .....	11
図 9	暗渠 4 実測図 (1 : 40) .....	12
図10	建物 5・柵 6 実測図 (1 : 100).....	13
図11	出土遺物実測図 (1 : 4) .....	15
図12	調査区と光照寺 (1 : 1,500).....	17
図13	御在世山水御亭図 (光照寺所蔵) .....	18
図14	南殿復元図 (1 : 2,500).....	19
図15	調査地位置図 (1 : 5,000).....	21
図16	調査予定地 背後は高層ビル (東から) .....	22
図17	西区トレンチ調査位置 (東から) .....	22
図18	西区トレンチ西部、北壁断面図 (1 : 50) .....	23
図19	I a・I b面遺構実測図 (近世から近代 1 : 200) .....	24
図20	II面遺構実測図 (長岡京期から中世 1 : 200).....	25
図21	SD50B遺物出土状況 (1 : 50) .....	26
図22	SD50断面 (北から).....	26
図23	P 64 (西から) .....	26
図24	軒瓦拓本・実測図 (1 : 4) .....	27
図25	SD50出土土器実測図 (1 : 4) .....	28
図26	築地SX55の変遷 .....	30
図27	長岡京東院と周辺の遺構 (1 : 2,000).....	31
図28	調査地位置図 (1 : 5,000).....	33
図29	調査区南壁断面図 (1 : 50) .....	35
図30	2000年度調査 4 区西壁断面図 (1 : 50) .....	35
図31	調査区遺構実測図 (1 : 150).....	36
図32	断割出土土器実測図 (1 : 4) .....	37

図33	参考資料 出土軒瓦拓本・実測図（1：6）	37
図34	大仏殿復元図（1：800）	38
図35	方広寺寺域復元図（1：2,000）	40
図36	調査地位置図（1：2,500）	42
図37	調査地基本土層図（北壁中央部 1：50）	43
図38	第1面遺構平面図（1：100）	45
図39	第2面遺構平面図（1：100）	46
図40	出土軒瓦拓本・実測図（1：4）	48
図41	出土軒平瓦拓本・実測図（1：4）	49
図42	出土土器実測図（1：4）	52
図43	西院・主水司・醬司遺構配置図（1：1,000）	57
図44	調査地位置図（1：5,000）	59
図45	調査区配置図（1：400）	60
図46	北西（NW）区平面図・断面図・遺構断面図（1：100）	62
図47	SE区東西トレンチ1（西から）	63
図48	南東（SE）区平面図（1：150）	64
図49	南東（SE）区断面図（1：100）	65
図50	SE区南北トレンチ北部落込2（北から）	66
図51	SE区南北トレンチ南部（北北西から）	66
図52	SE区・NW区出土土器・陶磁器実測図（1：4）	69
図53	SE区出土軒丸・軒平瓦拓本・実測図（1：4）	71
図54	栢ノ杜遺跡復元概念図（1：850）	73
図55	栢ノ杜遺跡出土遺物実測図（1：4）	76

## 表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	SD50瓦の出土量	27
表3	SD50出土土器の破片数	27



# I 山科本願寺南殿跡

## 1 調査経過

調査に至る経過 今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、京都市山科区音羽伊勢宿町38-1他に所在する、山科本願寺南殿の関連遺構を確認するために実施した発掘調査である。調査地は南殿内堀推定地の北東部に想定できるため、まず試掘調査を行い、その結果によって発掘調査の可否を決定することとなった。

試掘調査 試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターによって2001年9月17日に、調査対象地内に試掘トレンチを4箇所設定して、調査が行われた。その結果、2箇所の試掘トレンチで堀の肩部が検出され、堀・土塁が良好な状態で残っていることが推定されたことから、同センターは発掘調査の指導をした。

発掘調査 発掘調査は財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当することとなり、2001年11月12日から開始した。設定した調査区は、現存する堀・土塁の北側に3箇所、水ヨケノ土手の確認のために3箇所とし、調査中、東西方向の土塁の確認のために1回の拡張を行った。各調査区では、重機掘削後、調査・記録を進め、必要に応じて最後に地山を断割り、堆積状況を調べた。また、現存する堀・土塁の北側に設定した3箇所の調査区で検出した建物・柵は、現地で保存されることとなったため、土嚢で保護して埋め戻しを行い、2002年1月25日に調査を終了した。

なお、2002年1月12日に現地説明会（参加者400名）を開催した。

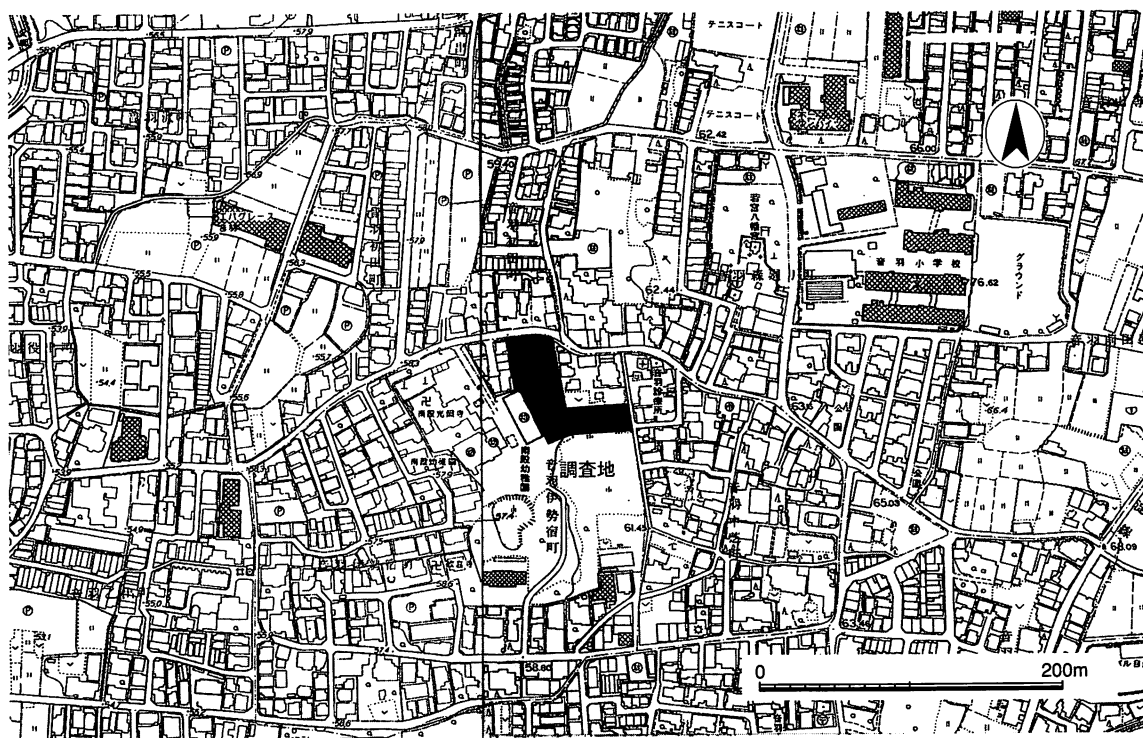


図1 調査地位置図（1：5,000）

## 2 遺跡の位置と環境

### (1) 位置と地理的環境

調査地は、山科盆地の中央やや北東寄りに位置し、北西に四ノ宮川、南に音羽川が流れ、両河川が形成する扇状地の先端部分に立地する。全体の地形は、北東から南西に緩やかに傾斜する地形を呈し、調査地周辺の標高は60m前後である。

また、山科は、山城国宇治郡山科郷に属し、東山を介した平安京の近郊と位置づけられ、道路・交通網の整備が行われた。このことにより、東へは逢坂山を経て近江・東海・北陸方面へ通じ、南へは六地藏を経て奈良・大阪・山陽方面へ通じ、西へは日ノ岡を経て京都・山陰方面へ通じる主要な街道（北は旧東海道と渋谷街道、南は奈良街道の分岐点「五条別れ」）が合流する交通の要所であった。また、山科川あるいは旧安祥寺川、四ノ宮川、音羽川を利用して淀川水系にも通じていた。

### (2) 歴史的環境

山科本願寺は、浄土真宗中興の祖、蓮如上人によって文明十年（1478）から同十五年（1483）にかけて造営された寺院都市である。山科盆地の中央やや西寄りに、四ノ宮川と山科川の合流点の西側一帯（現地名では山科区西野今屋敷町・様子見町・安芸沢町・広見町・山階町・大手先町・離宮町・左義長町・東野舞台町）に位置し、単郭の構造を持つ堀と土塁を二重三重にめぐらせた「御本寺」を中核とし、それを取り巻く「内寺内」「外寺内」とよばれる三つの郭によって構成されていた。このような寺院の諸堂のほか、一向宗門徒で構成される寺内町と称される町並みが周囲に形成され、「八町の町」とよばれた。この町には絵師をはじめ餅、塩、酒、魚などを商う町衆が住み、各種の商業活動や手工業生産が盛んに行われ、豊かな都市生活が展開されていた。

南殿は、延徳元年（1489）に、蓮如上人の隠居所として、御本寺の東約1kmの音羽の地（現地名では音羽伊勢宿町）に造られた。山科本願寺のことを御本寺北殿とし、これに対する南殿である。『光照寺記録』によると、「東五十二間五尺、西五十六間一尺、南三十間五尺、北二十九間半」と記され、規模を知ることができる。また、山科本願寺（寺内町）と同じように周囲に堀と土塁を巡らし三つの郭から構成され、持仏堂・山水亭と園池のある一郭と、その西側の台所や御指図の井戸のある第二郭がありこれらを第三郭が大きく囲い込んでいた。明応八年（1499）2月には蓮如上人は大坂から山科に戻り、同3月25日南殿で死去した〔『蓮如上人御往生記』、『山科連著記』等〕。

その後、山科本願寺（寺内町）及び南殿は、蓮如の二代後の証如の時に戦国の争乱に巻き込まれ、そしてついに天文元年（1532）8月、法華一揆との衝突に始まり、細川晴元率いる法華宗・延暦寺宗徒・近江守護職六角定頼の連合軍に攻められ、造営されてから53年で崩壊する。

天文五年（1536）には、泉水山光称寺（現光照寺）が南殿故地に建立されたが、本願寺と織田信長との抗争の中で再び荒廃する。近世の末には、光照寺が南殿旧地に戻り、現在にいたるため、光照寺境内の南側に堀・土塁・築山・園池が良好に遺存している。

### (3) 周辺の調査 (図3、表1)

調査地周辺では、これまで、多くの調査が行われている。山科本願寺に関する初期の調査としては、戦前に詳細な地上踏査が行われ、戦後には、寺内町の区画を復元するために地上に遺存する土塁と堀跡の追跡調査が行われている。また、考古学的調査としては、昭和37年(1962)の新幹線建設に伴う立会調査<sup>註2</sup>が初めてで、調査の結果、遺構が良好に遺存していることが判明した。その後市営住宅建設に先行して昭和48年(1973)に山科寺内町遺跡調査団によって、初めて本格的な発掘調査<sup>註3</sup>が実施された。また翌年の調査では、石室が検出され、多量の土師器が出土した。これは天文元年(1532)の焼亡時のものとされ、京都における土師器編年の貴重な資料となっている。

南殿に関する調査としては、森 蘊氏を中心とした奈良国立文化財研究所遺跡庭園班により昭和31年(1956)に光照寺南側の詳細な地形測量<sup>註4</sup>が実施されている。

その後、1980年代から宅地開発、市街化が進み多くの調査が実施され、平成9～12年に実施された発掘調査では、ほぼ原形を留めたL字形に曲がる土塁や堀、その内側では、甕倉と考えられる礎石建物や掘立柱建物、井戸、鍛冶関連遺構などの貯蔵や手工業生産に関連する施設などの重要な遺構が確認されている。特に、土塁内側に展開する遺構配置を明らかにできた成果は大きい。また、発掘調査だけではなく、試掘・立会調査(図3)も行われている。各調査の概要は一覧表(表1)にまとめた。

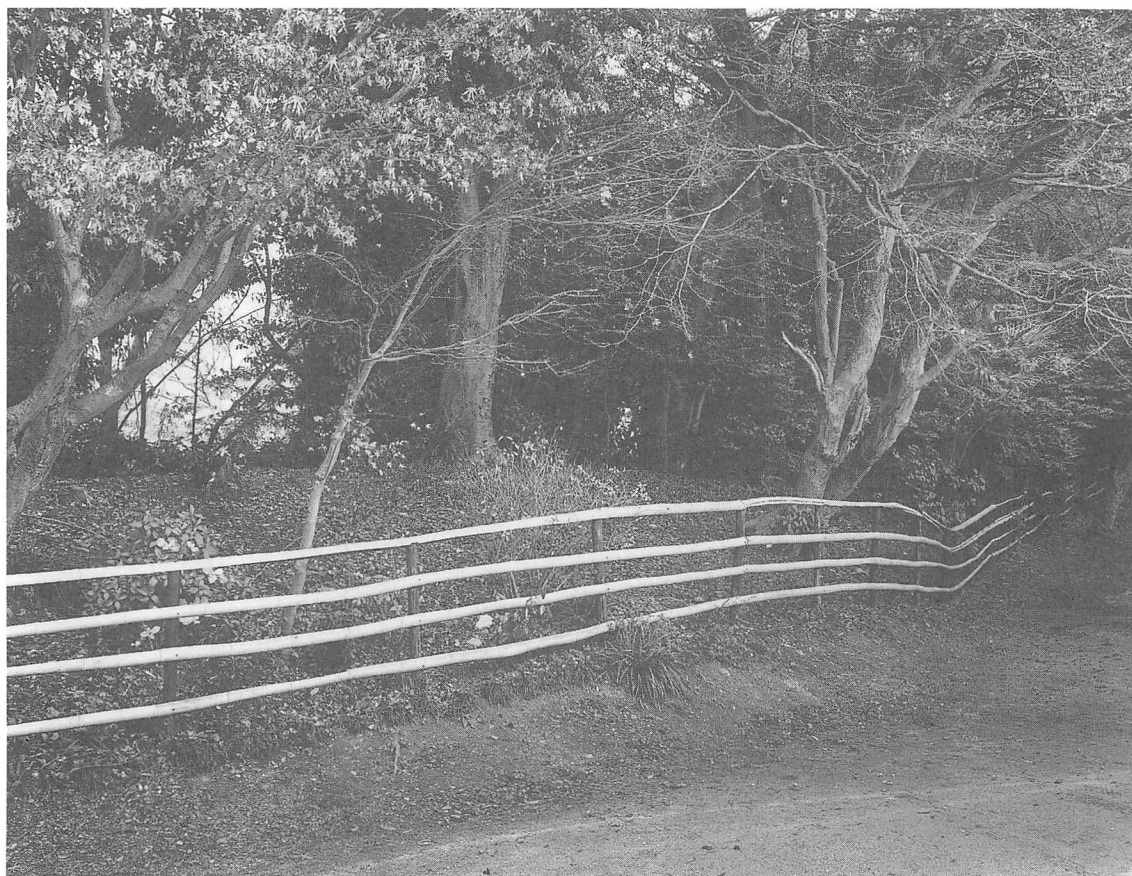


図2 土塁の現存状況(北西から)

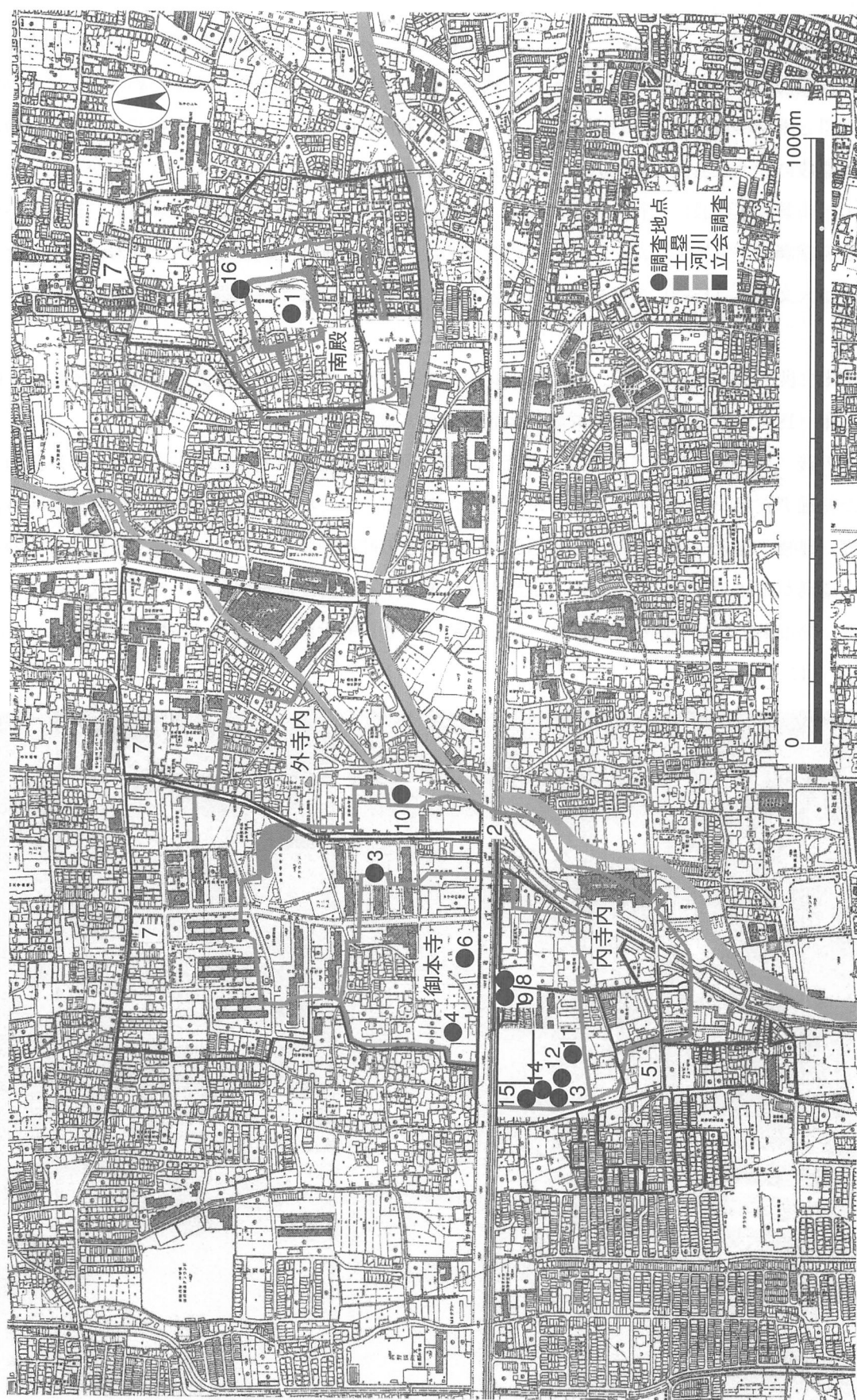


図3 周辺の調査 (1 : 10,000)

表1 周辺調査一覧表

No.	推定地	調査地	調査方法	調査機関 調査期間	調査概要	出土遺物	備考・文献
1	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町	地形測量	奈良国立文化財研究所 55.4	光照寺南側にある南殿庭園遺跡の起伏ある草地、粗林、竹藪について、地形測量した。	なし。	『中世庭園文化史』(『奈良国立文化財研究所学報』第6冊)1955年
2	山科本願寺跡	山科区西野左義長町山階町離宮町	立会	京都府教育庁 62.8.9~11.11	石組みの南北方向の溝(径0.5m内外の玉石を使い、積み上げられた。)・暗渠・南北方向の土塁を検出した。	土師器、瓦など。	『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』1965年
3	山科本願寺跡	山科区安芸沢町山階町離宮町	発掘	山科寺内町遺跡調査団 73.5.21~8.4	南北方向の堀・土塁(規模は不明、ただし通路である切り通しを確認した。)・石垣(石は4~5段積み、延長20m以上確認)・柵・鍛冶場跡・建物等を検出した。	土師器、瓦器、焼締陶器(備前甕、常滑甕、信楽播鉢)、輸入陶磁器(中国製青磁碗など)、銅銭、鉄釘、砥石など。	『国立歴史博物館研究報告 第8集』1985年
4	山科本願寺跡	山科区西野山階町	発掘	山科寺内町遺跡調査団 74.10.9~11.13	小溝・石室群を検出した。	土師器など。	『国立歴史博物館研究報告 第8集』1985年
5	山科本願寺跡	山科区西野離宮町、山階町、左義長町、広見町、大鳥井町、東野舞台町、八代町	立会	市埋文 84.3.6~11.17	南北方向の堀・石組井戸・土塀・溝などを検出した。堀は幅3.2m、深0.97~1.24m、断面形V字形である。石組井戸の掘形は円形で、直径約2.5m、内法約1m、深さは不明。石組は幅0.2~0.3m、厚さ0.1~0.2mの自然石を小口積み、9段まで確認。	15世紀後半から16世紀前半の土師器皿、陶器甕・播鉢、磁器碗、瓦などがある。	『市立会概要昭和59年度』1987年
6	山科本願寺跡	山科区西野山階町12	立会	市埋文 86.1.27~1.30	石組みの東西溝(幅0.8m、深1.0m、断面形は逆台形)延長6m確認。石組は下段に一辺0.2~0.5mの川原石を1段ないし2段に据え、上に径0.05~0.1mの小石を敷く。	土師器、陶器、磁器、軒瓦、平瓦などがある。	『市試掘・立会概報昭和62度』1988年
7	山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町、西野広見町、大手先町、今屋敷町	立会	市埋文 87.4.1~88.5.16	堀・土塁・土塀などを検出した。南北方向の堀と土塁の規模は不明。土塀の掘形は、垂直で、均一に径0.01mの礫が詰まる。南殿推定地では、石垣・土塀など各種の遺構を検出。石垣の上面は地表下1.4mで径0.2~0.5mの石を2段に積み、間に小石を詰めて固定。	土師器・瓦質土器・須恵器・陶器・磁器・瓦など。国産陶器には瀬戸・美濃天目碗、備前甕・播鉢、信楽甕・播鉢、唐津碗など、中国陶磁器には青磁碗・盤、白磁碗、青花碗など。	『市立会概要昭和61年度』1989年
8	山科本願寺跡	山科区西野山階町29	立会	市埋文 88.5.30~6.2	東西の石組溝(幅0.8m、深0.6m、断面形緩やかなU字形)延長8m確認した。石組は下段に一辺0.2~0.5mの川原石を据え、その上に径0.05~0.1mの小石を敷く。	土師器、陶器、磁器、軒瓦、平・丸瓦、鉄製品など。	『市試掘・立会概報昭和63年度』1989年
9	山科本願寺跡	山科区西野山階町29	試掘	市埋文 89.10.2~10.14	東西石組溝(幅0.8m、深0.9m、断面形は逆台形)を延長11.3m確認した。南北の石組溝(幅0.3m、深0.2m)は、長さ1mを確認した。東西溝の石組は3段ある。最下段では一辺が0.5~0.8mの川原石を据え、石の隙間に径の小石を詰めて固定する。南北溝は、両壁を石で組み底部にも石を敷く。	土師器・瓦など。	『市試掘・立会概報平成元年度』1990年

No.	推定地	調査地	調査方法	調査機関 調査期間	調査概要	出土遺物	備考・文献
10	山科本願寺跡	山科区西野 大手先町20	立会	市埋文 91. 8. 20～10. 18	南北方向の土塁（上部幅15.4m、 基底部幅26.5m、高3.2m）・溝・ 堀（東西幅15m以上）を検出した。 土塁は、版築土が20数層あり、砂 礫と粘質土を交互に重ねる。	土師器皿、陶器播鉢、 伊万里染付椀など。	『市立会概 要平成3年』 1995年
11	山科本願寺跡	山科区西野 左義長町16 他	発掘	市埋文 97. 4. 20～7. 10	東西方向の堀（幅5m、深さ1.5 m）・南北方向の堀（幅約12m、 深さ約4m）・東西方向の土塁（基 底部幅10m）・建物（南北5間、 東西2間）・石組溝（幅1.7～4.0 m、深さ約1.3m、断面形はU字 形）、その他に土壌・柱穴など検 出。	土師器、瓦器、焼締陶 器（備前甕・壺・播鉢、 常滑甕、信楽鉢）、施 釉陶器、輸入陶磁器、 和鏡など。	『市概要平 成9年度』 1999年
12	山科本願寺跡	山科区西野 左義長町23	発掘	市埋文 97. 7. 16～9. 18	東西方向の土塁（基底部幅18m、 高さ5～6m、断面形は台形）・ 建物（南北5間3.1m、東西3間2.7 m）・炉跡・石組井戸（掘形径約 2.0m、内径0.9m、深さ4.0mで、 径0.2～0.4mの石を積み上げ る。）・石組暗渠（内法で高さ0.25 m、幅0.3m）などを検出。	土師器、瓦器、焼締陶 器（備前壺・鉢、信楽 甕・鉢、常滑鉢）、輸 入陶磁器（中国産染付 皿、青磁椀、白磁椀・ 壺、他に銅・鉄製品な ど。	『市概要平 成9年度』 1999年
13	山科本願寺跡	山科区西野 左義長町	発掘	市埋文 98. 8. 17～11. 9	南北方向の土塁（幅8.8m、高5.0 m、長43m）・堀（幅不明、深約1.7 m）・暗渠（幅0.75m、高0.5m、 空洞部幅0.3m、同深0.25m、長6.5 m）を検出した。暗渠は底石・側 石・蓋石から構成され、石材は丸 みのある花崗岩の川原石を用いる。	江戸時代以降の土器類 と木片。古墳時代の須 恵石など。	『市概報平 成10年度』 2000年
14	山科本願寺跡	山科区西野 左義長町 19-1 他	試掘	市センター 99. 10. 28	山科本願寺に関連する土塁（幅3 m、高3m）・土壌などを検出し た。	出土遺物なし。	『市概報試 平成11年度』 2000年
15	山科本願寺跡	山科区西野 左義長町	発掘	市埋文 2000. 5. 10 ～6. 30	南北方向の堀（幅5m）・南北方 向の土塁（基底部の幅約15m、高 1.5m）・暗渠（内法幅約0.15m、 高さ0.15m、長さ2.5m）・建物 （東西4間6.7m、南北3間3.9m）・ 溝・土壌などを検出。	土師器、瓦器（火舎）、 焼締陶器（甕・播鉢）、 施釉陶器、青磁、白磁 があり、瓦類は丸瓦、 平瓦、軒丸瓦、鬼瓦、 塼。	『市概報平 成12年度』 2001年
16	山科本願寺南 殿跡	山科区音羽 伊勢宿町 38-1 他	発掘	市埋文 2001. 11. 15 ～2002. 1. 23	南北方向の堀（幅約5.0m、深さ 約2.2m、延長約25m、断面形V 字形）、南北方向の土塁（基底部 幅5～7m、残存高0.2m前後）、東 西方向の土塁（基底部幅5.0～7.5 m、残存高0.6m前後）、暗渠（内 法幅0.15m、高さ約0.2m、長さ 約3m）、建物（東西9尺約2.7m、 南北7尺約2.1mの間四方）、土 壌、柵などを検出。	土師器、瓦器（火舎）、 焼締陶器（甕・播鉢）、 施釉陶器、青磁。少量 の瓦、銭貨。	本調査

調査機関・文献名は以下のように略した。

市埋文：京都市埋蔵文化財研究所

市センター：京都市埋蔵文化財調査センター

『市概報』：京都市内遺跡発掘調査概報

『市概要』：京都市埋蔵文化財調査概要

『市概報試』：京都市内遺跡試掘調査概報

『市立会概要』：京都市内遺跡立会調査概要

『市試掘立会概報』：京都市内遺跡試掘立会調査概報

### 3 遺 構

#### (1) 層 序

調査地の基本的な層序は、地表面から現代盛土、江戸時代以降の耕作土、室町時代後期の整地層、地山（無遺物層）の順である。

現代盛土は厚さ0.3～0.4mある、江戸時代の耕作土は黒褐色泥砂層で厚さ0.2～0.3mあり、調査地全域で確認した。室町時代後期の山科本願寺南殿造営時の整地層は黒褐色砂泥層で厚さ0.2～0.3mあり、調査地全域で確認した。室町時代の遺構と江戸時代の遺構は、全てこの上面で検出した。その下が灰色砂礫層や褐灰色砂礫の地山（無遺物層）である。

周辺全体の地形は、北東側から南および西側に緩やかに傾斜する。各トレンチの遺構面の標高は、1トレンチ東端で60.2m、2トレンチ西端で59.25m、3トレンチ中央で59.05m、4トレンチ東端で60.1m、5トレンチ中央で59.5m、6トレンチ中央で58.7m、7トレンチ北端で59.5mである。

#### (2) 遺構の概要

今回検出した遺構には、主に室町時代後期と江戸時代のものがある。室町時代のものは山科本願寺南殿関連の遺構と考えられ、上述の整地層上面で検出した。調査で検出した遺構は、1トレンチ19基、2トレンチ48基、3トレンチ69基、5トレンチ3基、6トレンチ8基、7トレンチ2基、総計149基である。なお、4トレンチについては後世に削平を受けているため遺構は検出できなかった。

当地域の地形は北東から南西へと緩やかに傾斜するが、室町時代後期の遺構面は傾斜が少ないことから、南殿造営時には大規模な整地を行い平坦面を確保したと推定できる。

遺構には土塁・堀・建物・柵・土壇・溝・暗渠排水溝・柱穴がある。土塁は3トレンチ・5トレンチ・6トレンチで、堀は2トレンチ・3トレンチ・5トレンチで検出した。土塁は南北方向と東西方向のものがある。南北方向のものは延長約12m、東西方向のものは延長約20mを確認した。堀は延長約25mを確認した。建物と柵・柱穴は、2トレンチ・3トレンチで検出した。柱穴の中には底部に川原石を据えるものもある。土壇と溝・暗渠排水溝は、3トレンチで検出した。

江戸時代の遺構は室町時代の遺構と同一面で検出したが、本来は、上述の江戸時代の耕作土上面で成立していたと考えられる。

遺構には、土壇・溝・柱穴がある。これらの遺構は、1トレンチ・2トレンチ・3トレンチ・5トレンチ・6トレンチ・7トレンチで検出した。土壇は、直径2.0m前後の円形のものが多く、水や肥料を溜めるための耕作に関連する遺構と考えられる。柱穴は散在し建物としてのまとまりがつかめていない。

以下、主な遺構について報告する。

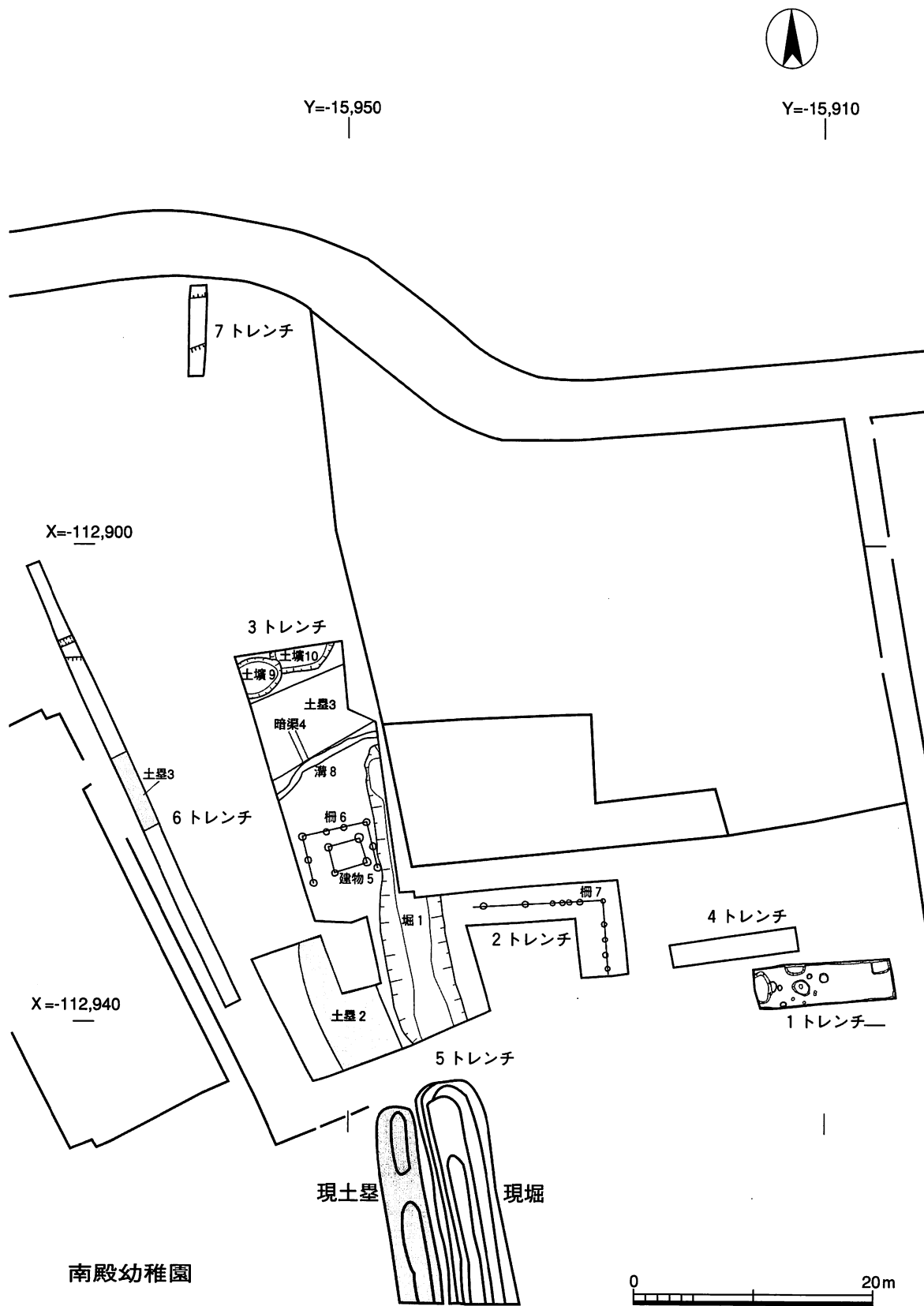


図4 調査区配置図 (1:500)



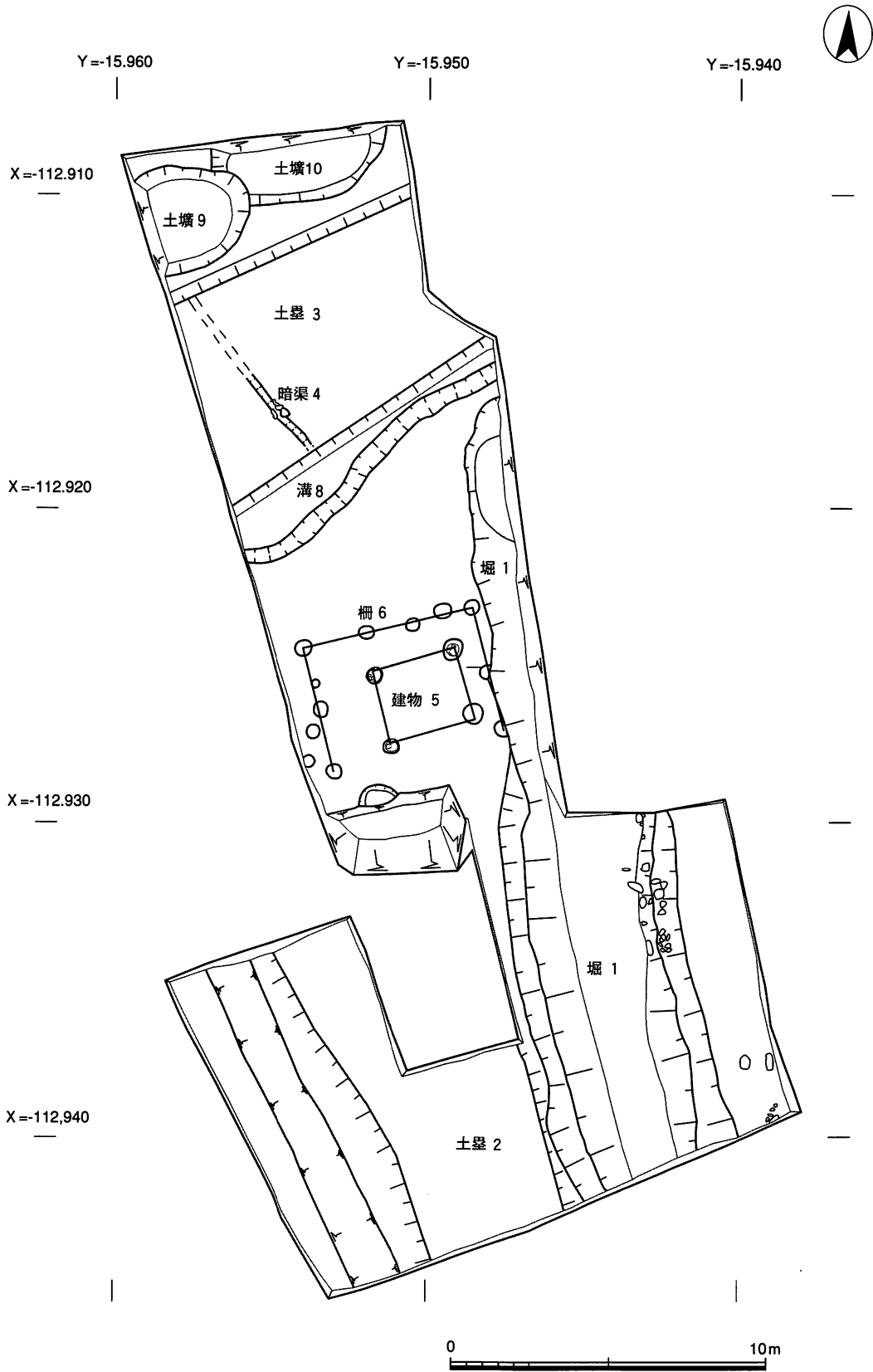


図5 3・5トレンチ平面図(1:200)

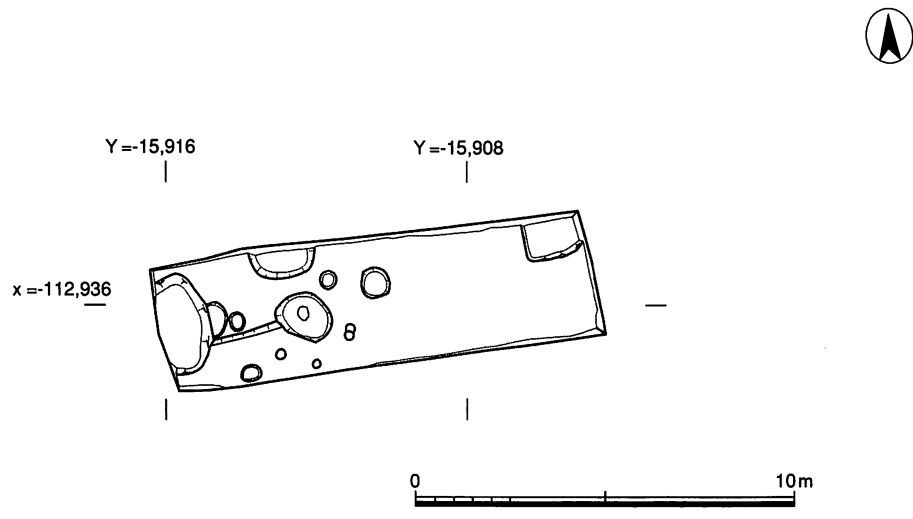


図6 1トレンチ平面図 (1:200)

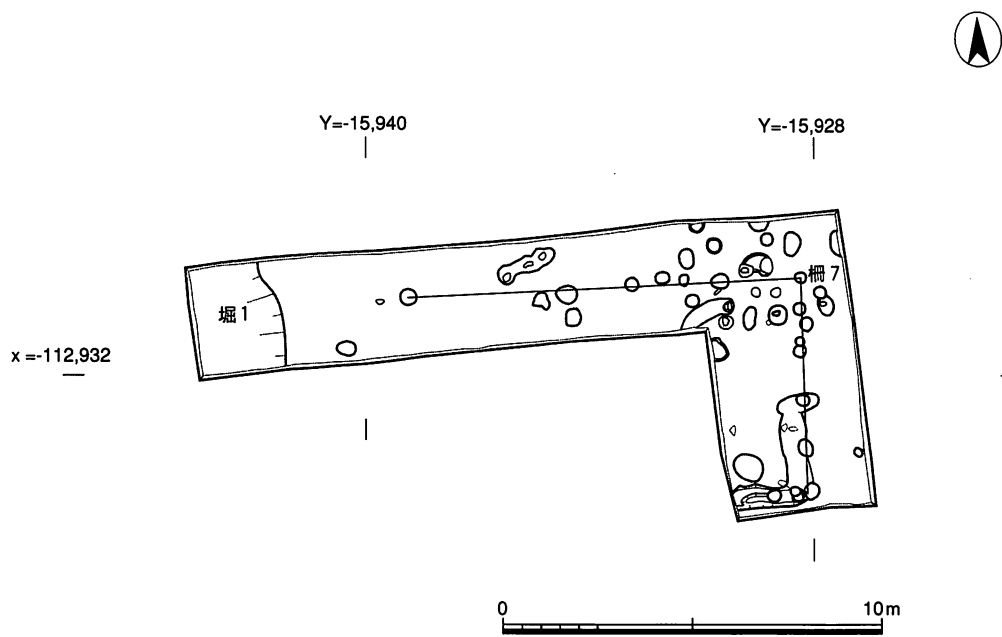


図7 2トレンチ平面図 (1:200)

(3) 検出遺構

堀1 (図4・5・7・8、図版1・3) 3トレンチの東側で南北方向の堀の西肩部を延長約13m検出した。2トレンチ・5トレンチでも堀の両肩部を検出し、幅約5.0m、深さ約2.2m、延長約12mを確認した。堀の肩の断面形はV字形を呈し、土止めなどの護岸を施した痕跡は一切認められない。埋土は大きく3層に分かれ、上層は黄褐色系の泥砂層、中層は褐色系の泥砂層(混礫)、下層は灰黄褐色系の泥砂層(混礫)であり、水が溜まった土層はみられない。埋土から室町時代の遺物と共に江戸時代の遺物が出土した。

土塁2 (図4・5・8、図版1-2) 5トレンチの西側で検出した南北方向の土塁である。堀1の西側に接して基底部を検出した。基底部の幅は約5~7m、残存高は約0.2mである。当初は、調査区の南側に現存する土塁と同様に高く盛り上がっていたと考えられるが、後世に大きく削平を受け、基底部のみが残っていた。このため築造順序や方法は確認できない。また、土層断面の観察によると、整地層の上に土塁基底部が構築されていることから、整地の後に土塁が築かれたと考えられる。なお、この土塁2の北限は、3トレンチで検出した建物5の南側である。

土塁3 (図4・5、図版1-1) 3トレンチの北側で検出した東西方向の土塁である。基底部の幅は約5.0~7.5m、上方は削平を受け、残存高は0.6m前後である。また、土層断面の観察によると、砂礫質の土を交互に水平に積み上げ基底部を構築していたことがわかる。土塁3に伴う明確な堀は検出していない。土塁3は6トレンチでも検出した。

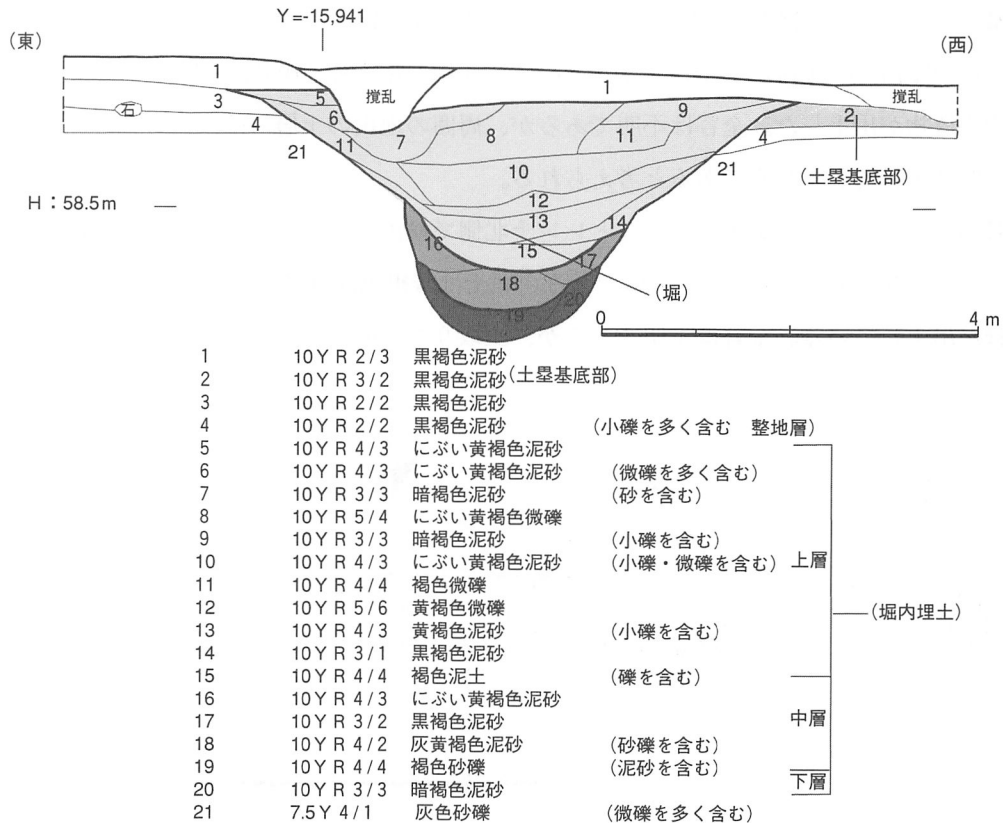


図8 堀1・土塁2断面図(1:80)

暗渠 4 (図 4・5・9、図版 1-1・4-1) 3トレンチの土塁 3 の南裾部で検出した南北方向の石組暗渠である。石組みの部分は延長 0.5m を確認し、内法幅約 0.15m、高さ約 0.15m である。底面は北側に向かってわずかに傾斜する。また、暗渠の南端は東西方向の溝 8 と合流していることから、土塁内側の水を排出する施設と考えられる。上面は後世に削平を受け、残存状況は悪い。埋土はオリブ褐色泥砂層で、遺物は室町時代の土師器小片が少量出土した。

建物 5 (図 4・5・10、図版 4-2) 3トレンチ南側で検出した一間四方の建物である。柱間は、東西 9 尺 (約 2.7m)、南北 7 尺 (約 2.1m) である。柱穴の底部には、人頭大の川原石を据え付ける。遺物は室町時代の土師器が少量出土した。

柵 6 (図 4・5・10、図版 4-2) 3トレンチ南側で検出した柵である。柱間寸法はおおよそ 7 尺 (2.1m) で、柱穴の底部には、川原石を据え付けている。建物 5 を囲むような状況で検出した。全容は不明であるが、建物を囲う柵の跡と考えられる。遺物は室町時代の土師器が少量出土した。

柵 7 (図 4・7、図版 2-2) 2トレンチで検出した L 字に曲がる柵である。約 16m を確認した。柱間は不揃いである。埋土は褐色系砂泥層で、遺物は室町時代の土師器が少量出土した。

溝 8 (図 4・5、図版 1-1・4-1) 3トレンチの北側で検出した土塁 3 と堀 1 の間を北東から南西方向に延長する素掘の溝である。幅約 0.5m、深さ約 0.1m である。光照寺境内の園池に水を取り込むための、遣水ではないかと考えられる。埋土は黒褐色砂泥層で、遺物は室町時代の土師器、瓦器小片が少量出土した。

土壇 9 (図 4・5、図版 1-1) 3トレンチ北側で検出した土壇である。東西 3.5m 以上、南北 3.2m、平面形は楕円形で、深さ 1.2m である。埋土は暗褐色泥砂で、室町時代の遺物と共に江戸時代の遺物が出土した。全容は不明であるが、周囲の地山の土層 (にぶい黄色砂泥) の状況から、土取りを目的とした穴であると考えられる。

土壇 10 (図 4・5、図版 1-1) 3トレンチ北側で検出した土壇である。東西 4m 以上、南北 2m 以上、深さ約 1m の不定型な土壇である。埋土は暗褐色泥砂で、室町時代の遺物と江戸時代の遺物が出土している。全容は不明であるが、土取りを目的とした穴であると考えられる。

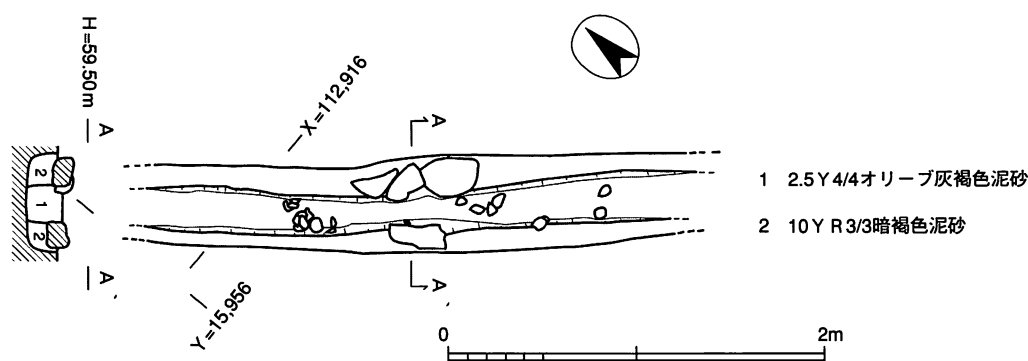
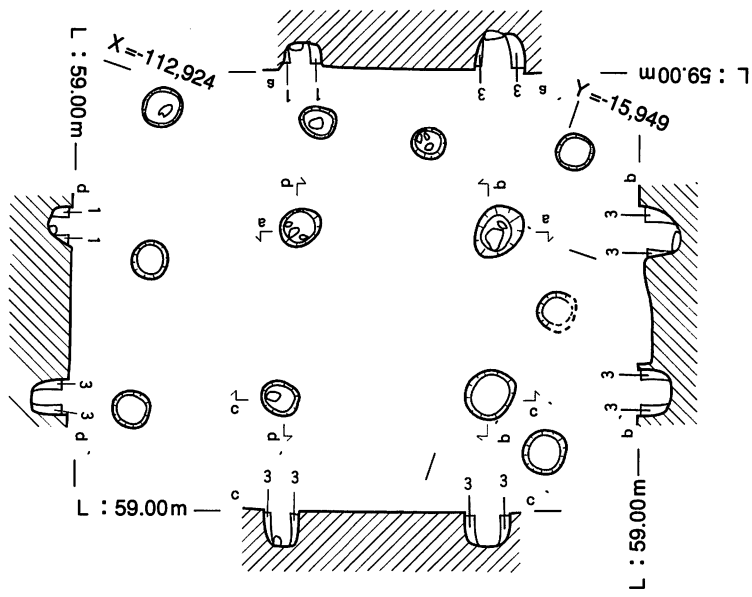


図 9 暗渠 4 実測図 (1:40)



- |   |                  |   |               |
|---|------------------|---|---------------|
| 1 | 10Y R3/4暗褐色砂泥    | 3 | 10Y R3/2黒褐色砂泥 |
| 2 | 10Y R4/3にぶい黄褐色砂泥 | 4 | 10Y R3/3暗褐色砂泥 |

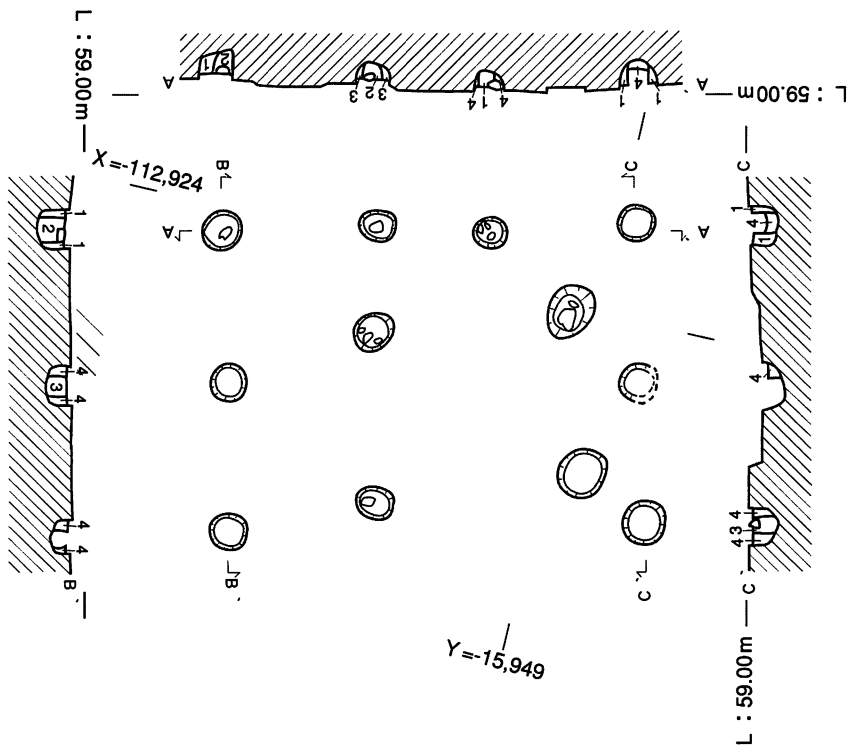


図10 建物5・柵6実測図(1:100)

## 4 遺物

### (1) 遺物の概要

調査で出土した遺物は、整理箱に12箱である。土器類・瓦類・石製品などがあり、その他、銭貨・鉄釘・焼土などがある。土器類には、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・青磁などがある。瓦類では、平瓦が少量出土している。

遺物は4トレンチを除き、全ての調査区から出土した。時期別には、室町時代後期から江戸時代の遺物が主体で、他の時代に属する遺物は微量である。室町時代後期の遺物は、主に堀1・建物5・土壇8から出土した。土器類・瓦類があるが、いずれも細片で損傷が進んだ小片が多い。江戸時代の遺物は各調査区から出土した。土器類が大半を占め、他に石製品や銭貨などがある。以下主要な遺構ごとに遺物の詳細を記す。

### (2) 土器類 (図11、図版5)

堀1 (図11) 土師器皿、瓦器羽釜・鍋・香炉、焼締陶器甕・壺・鉢、施釉陶器皿・椀、染付皿・椀が出土した。土師器中型皿(1)は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き端部が立ち上がる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。土師器中型皿(2)は、口縁が緩やかに内弯して開き、端部が尖る。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。土師器大型皿(3)は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き端部が立ち上がる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。唐津産椀(4)は、体部が内弯して開き、底部外面・体部下位は回転ケズリ、底部内面・体部口縁部内外面は回転ナデ。体部外面上位と内面に灰釉を施す。土師器小型皿(5)は、口縁部が緩やかに屈曲して内弯気味に開き、底部・口縁部外面下位はオサエ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。土師器中型皿(6)は、口縁部が底部から屈曲して外反気味に開き、底部・口縁部外面下位はオサエ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。土師器大型皿(7)は、口縁部が緩やかに内弯して開き、端部は尖る。底部から口縁部屈曲部が凹み、底部・口縁部外面下位はオサエ。底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。時期幅をみてX期中段階からXI期に属すると考える。

柵6 (図11) 土師器皿、焼締陶器甕、樽などが出土した。土師器小型皿(8)は、口縁部が内弯気味に開き、端部が立ち上がる、底部が大きく内側に凹み、内面はナデ、外面は指オサエの凹凸を明瞭に残している。土師器大型皿(9)は、口縁部が底部から屈曲して内弯気味に開き、端部が立ち上がる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。時期はX期中段階に属する。

土壇9・10 (図11) 土師器皿、瓦器羽釜・鍋、焼締陶器甕・壺・鉢、石臼などが出土した。土師器小型皿(10)は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して外反気味に開き、端部が立ち上がる。底部中央が大きく内側に凹み、底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・

外面上位は横ナデで仕上げる。土師器中型皿（11）は、口縁部が底部から屈曲して外反する。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。土師器中型皿（12）は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して、外反気味に開き、端部が立ち上がる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。土師器大型皿（13）は、口縁部が底部から緩やかに屈曲して、外反気味に開き、端部が立ち上がる。底部・口縁部外面下位はオサエ、底部内面はナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデで仕上げる。段皿（14）は、口縁部が直線的に開き、上位は水平に延び、端部が立ち上がる。底部外面が回転ケズリ、底部内面・体部口縁部内外面が回転ナデ、高台を削りだし、全面に灰釉を施す。備前壺（15）は、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部が内側に肥厚する。体部・口縁部内外面は回転ナデ、体部外面・口縁部内外面に釉を施す。時期はX期中段階から江戸時代中期に属する。

建物5（図11）土師器皿、瓦器羽釜・鍋、焼締陶器甕・壺・鉢、砥石などが出土した。砥石（16）は、5面の研磨面を有する。長さは約19cm以上である。

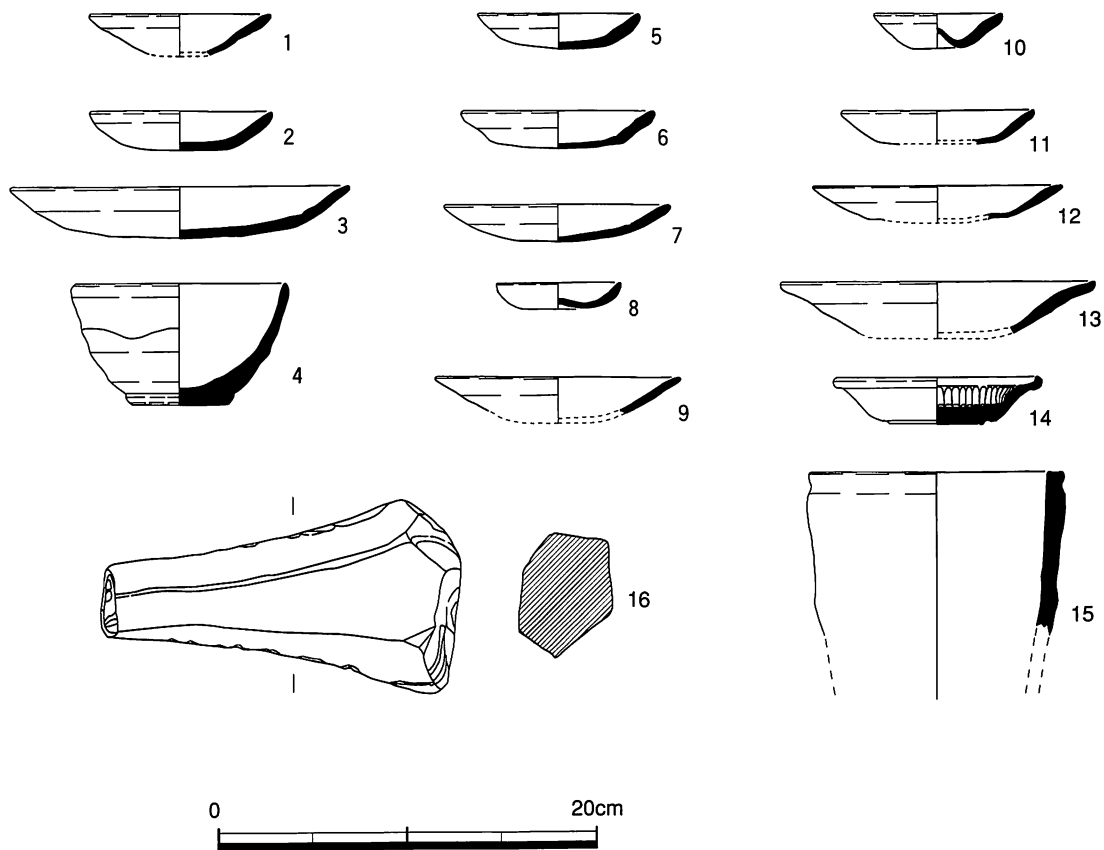


図11 出土遺物実測図（1：4）

## 5 まとめ

今回の調査では、室町時代後期の山科本願寺南殿に関連した遺構を中心として多数の遺構を検出でき、遺物も出土した。ここでは、周辺の調査成果を含めた検討を行って調査のまとめとした。

### (1) 遺構について

室町時代後期の遺構は、3トレンチと5トレンチを中心に各調査区で検出した。

検出した土塁・堀・建物・暗渠・溝・土壙などは、出土遺物からほぼ同じ時期と考えられ、これまでの推定地から、これらの遺構は南殿に関連する施設と推定できる。調査地周辺の立会調査でも当該期の遺構・遺物が広範囲に認められ、調査地周辺に南殿が展開していたことが明らかである。

2・3・5トレンチでは、堀1、土塁2の基底部などの遺構を検出した。これらの土塁の南延長上に光照寺境内に現存する堀（幅約5m、深さ約1.5m）や土塁（高さ約1.5m、幅約8m）が位置し、従来から指摘されていたように、これらの施設が、山科本願寺南殿の旧状を良く伝えていることが確認できた。

2・3トレンチでは、掘立柱建物や柵などの遺構を検出した。南から続く堀の西側（内側）の南北方向の土塁2は、途中で途切れ、北限を確認することができた。この土塁の北側で一間四方の建物を検出し、これが門であると推定した。南から続く南北方向の堀は、新たに検出した東西方向の土塁の南側で途切れることにより、ここでも内堀の南北方向の堀の北限を確認することができた。

3・6トレンチでは、東西方向の土塁3の基底部、東西溝、暗渠などの遺構を検出した。東西土塁3は調査区内で途切れることなく東西両方向に続き、土塁3と光照寺南側東西土塁との距離は中心で126mと判明した。また、この土塁3の南側裾部を流れる溝8は、その位置が、光照寺所蔵の『南殿遺跡古図』に描かれる遺水跡とおおよそ符合していて、光照寺境内に見られる園池に水を引き込むための溝であると考えられる。また、東西土塁3を横断する暗渠4は素堀溝8と合流しており、本来は、土塁内側の水を排水するための施設と考えられる。

堀は埋土の状況から空堀であり、この堀の出土遺物などから、江戸時代中期まで空いていたと推定できる。また江戸時代の耕作に関連する遺構（土壙、小溝）を検出したことにより、この時期に一部は埋め立てられたと考えられる。調査地では江戸時代になると、柱穴や耕作に関連する土壙や小溝が分布する程度となり、堀1をはじめとする施設は、おそらく江戸時代後期のうちには廃絶したと考えられる。このような経過のなかで、現在の光照寺境内部分は、ほとんど人の手が加えられることなく今日に至ったと思われる。

以上、今回の主な調査成果をまとめた。山科本願寺南殿も山科本願寺（寺内町）と同様に、規模は小さいが堀と土塁がめぐらされ、本願寺（御本寺）と同時期に造営されたことがわかった。今回の調査成果は、山科本願寺南殿の構造を解明する手掛かりになったといえよう。



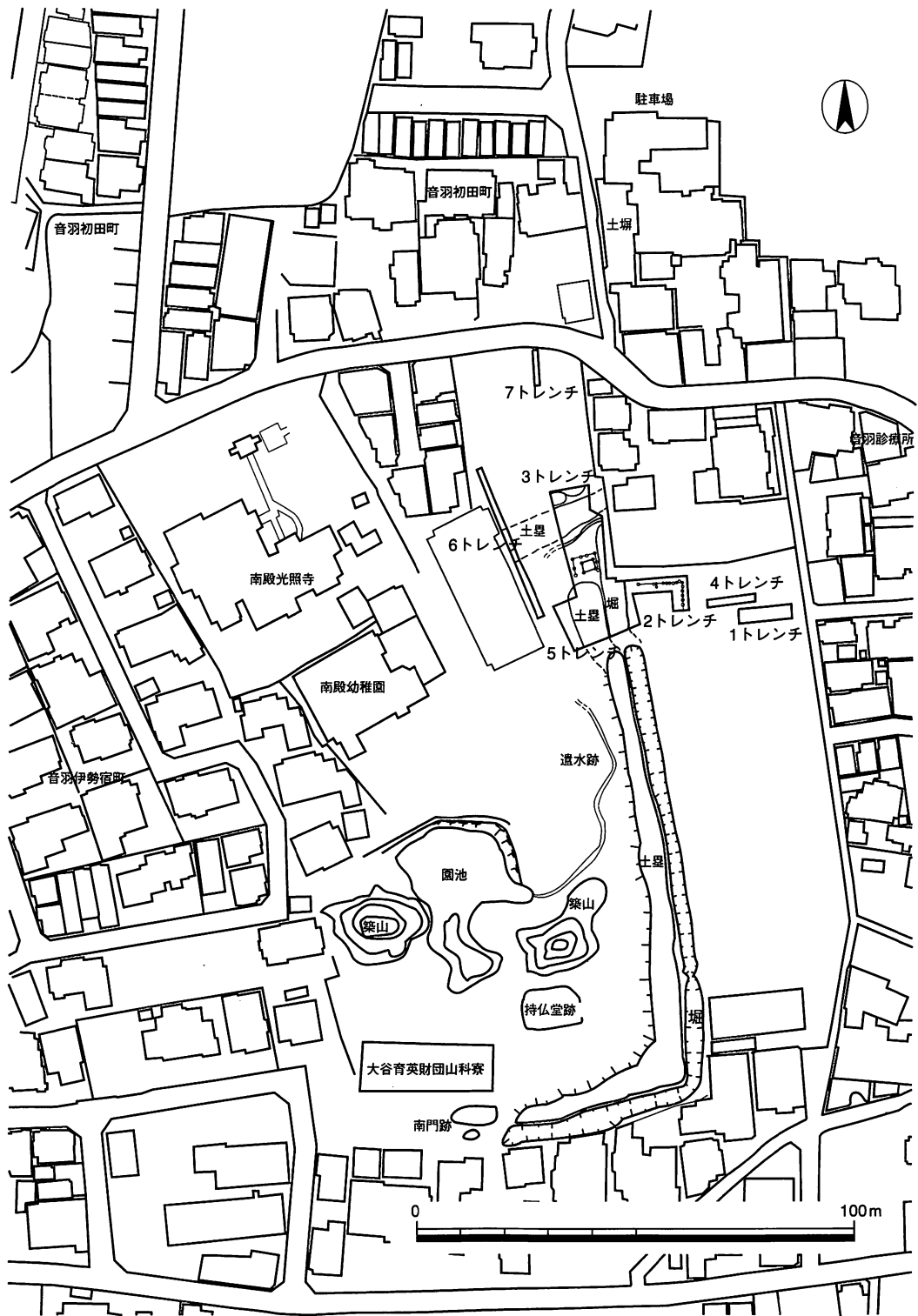


図12 調査区と光照寺 (1 : 1,500)

(2) 山科本願寺南殿について

光照寺には南殿の様子を記した古図『御在世山水御亭図』が残っている。この古図には、山科本願寺（寺内町）と同じように、周囲に土塁と堀（防御施設）をめぐらし、三つの郭から構成された南殿の様子が描かれている。持仏堂・山水亭・園池のある中央郭、台所・井戸のある西郭、そしてこの二郭を囲い込む土塁（水ヨケノ土手）で囲まれた外郭から構成される。

中央郭には蓮如上人御指図井という井戸、泉水・園池・築山などの庭園を備え、庭園の南には山水亭と持仏堂が配されていた。山水亭は隠居した蓮如上人の居場所であり、持仏堂は、柿葺きの簡素な建物であった。

この古図に描かれている土塁・堀と、昭和三十一年に奈良国立文化財研究所が実施した地形測量を合わせて考え南殿全体を復元すると、今回調査した地点は、現存する土塁・堀の北側に位置することから、南殿の内堀の北東隅に位置付けられる。

今回の調査成果と、現存の土塁・堀、現状の道路などを考え合わせて図13を調整し、現在の地図に重ね合わせたのが図14である。

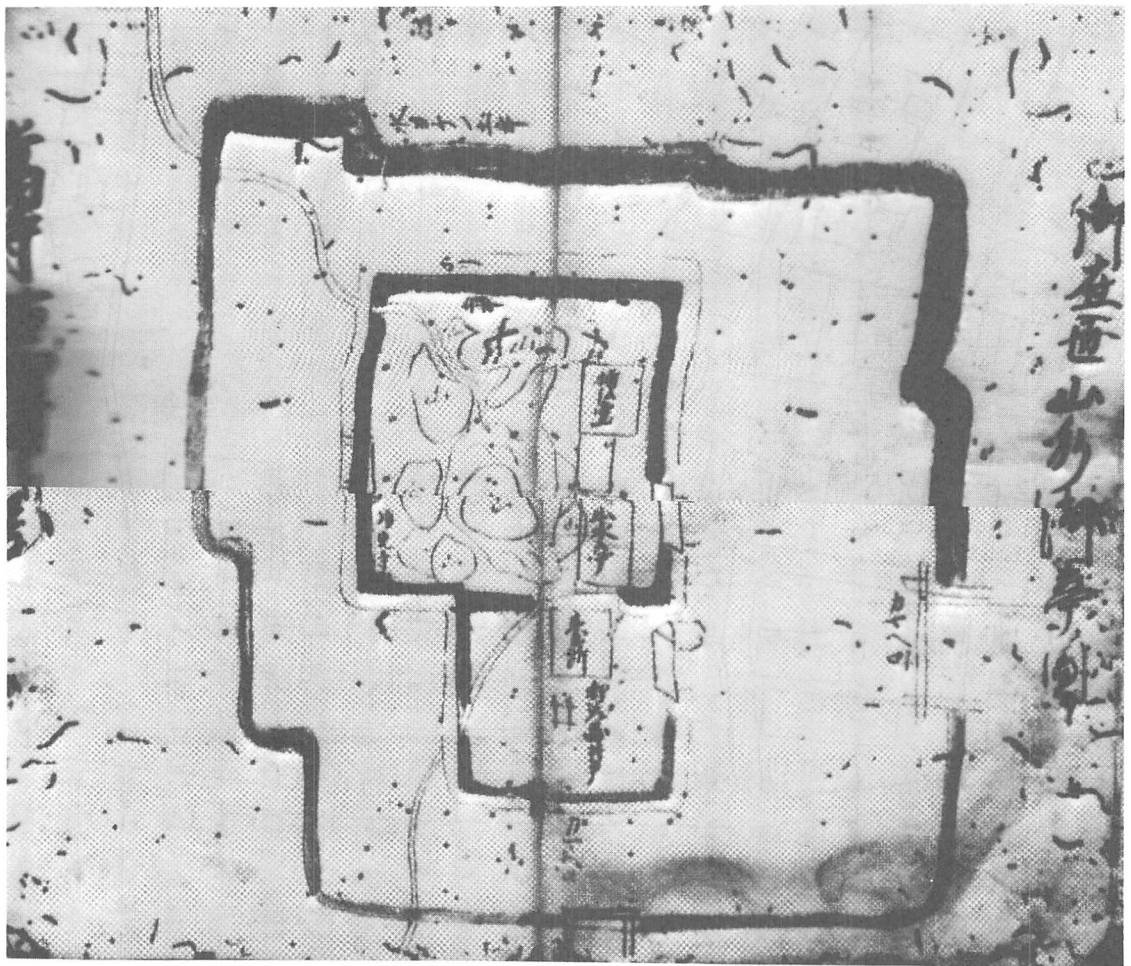


図13 御在世山水御亭図（光照寺所蔵）

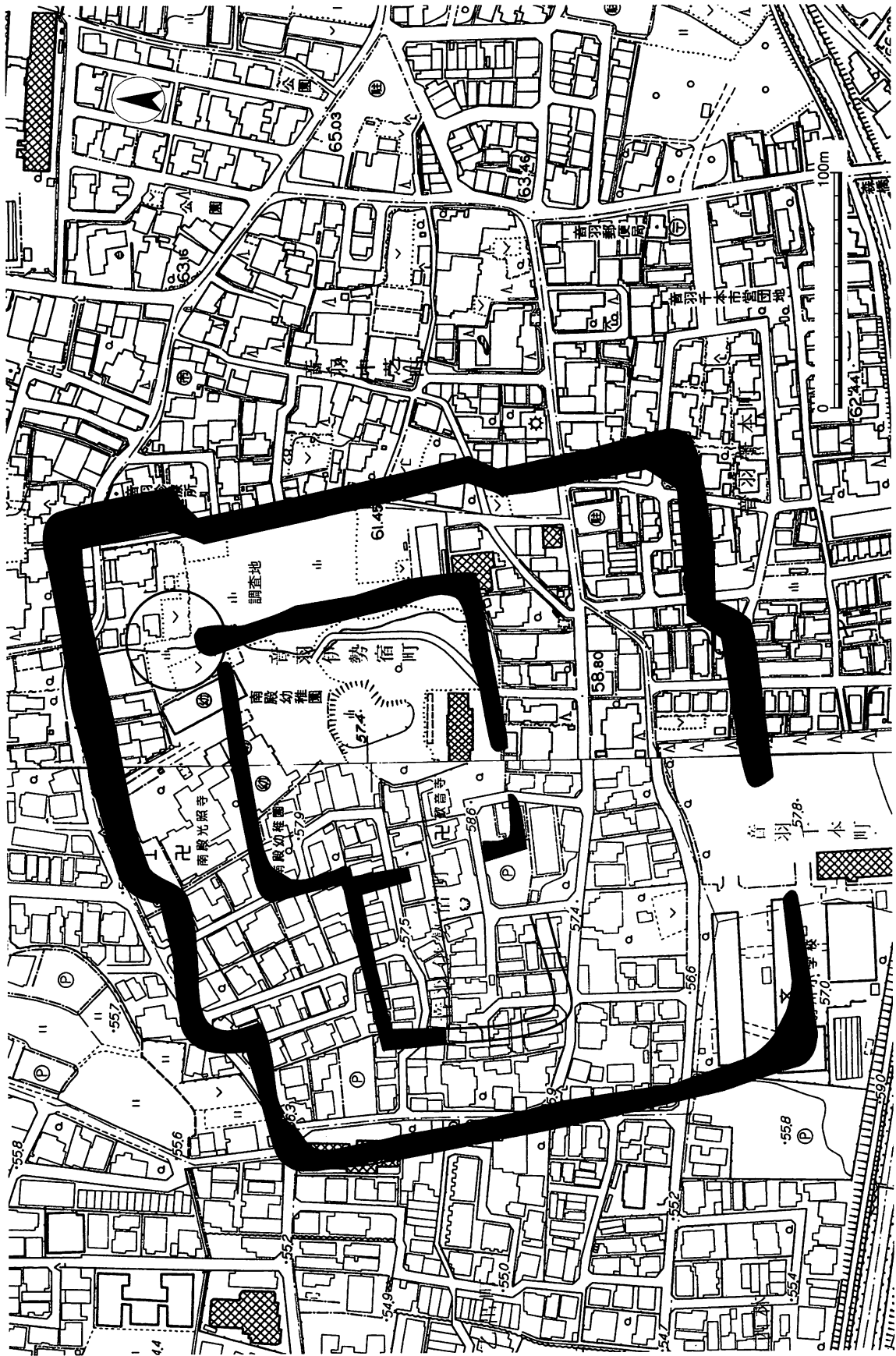


图14 南殿復元図 (1 : 2,500)

引用・参考文献

- 註1 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民族博物館研究報告』第8集 第一法規出版株式会社、1985年。  
西川幸治「都市史の中の中世寺内町」『国立歴史民族博物館研究報告』第8集 第一法規出版株式会社 1985年。  
山科本願寺・寺内町研究会編『戦国の寺・城・まち』法蔵館 1998年。
- 註2 杉山信三・堤圭三郎「山科本願寺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』日本国有鉄道 1965年。
- 註3 註1 岡田保良・浜崎一志に同じ。
- 註4 森 蘊『中世庭園文化史』（『奈良国立文化財研究所学報』第6冊）奈良国立文化財研究所 1955年。
- 註5 平方幸雄「山科本願寺跡」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1987年。
- 註6 百瀬正恒・吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年。
- 註7 百瀬正恒「山科本願寺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1989年。
- 註8 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年。
- 註9 久世康博「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年。
- 註10 本弥八郎「山科本願寺跡」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1995年。
- 註11 永田宗秀「山科本願寺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1999年。  
近藤知子「山科本願寺跡」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1999年。  
吉村正親「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 2000年。  
吉崎 伸「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年。
- 註12 長谷川行孝「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年。
- 註13 近藤知子「山科本願寺跡の発掘調査」『リーフレット京都 No.114』京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1998年。

## II 長岡京跡左京北一条三坊三町・東院推定地

### 1 調査経過

調査地は京都市南区久世殿城町600-1で、長岡京左京北一条三坊三町にあたり、長岡京の東北部に位置する。南に隣接して北一条大路があり、東には東三坊坊間小路が想定されている。また弥生から古墳時代の大藪遺跡・中久世遺跡に近接し、東土川遺跡の一部を構成する宮脇遺跡<sup>註1</sup>に隣接する地点でもある。

国道171号線を介して西に隣接する地点では、1999年9月から翌年4月まで、左京第435・436次調査が行われ、長岡宮から平安宮へ遷都するために、仮の内裏として造営された東院や勅旨所<sup>註2</sup>に関係した大規模で整然とした遺構が発見され、当地の重要性が明らかとなった。また、南に位置する1988年度に実施した左京203次調査では、宮・京の造営に関係した津の遺構と、樽の漕運と車載での輸送に関係した木簡が発見されており、当地が多様な目的のために利用されたことがわかってきた。

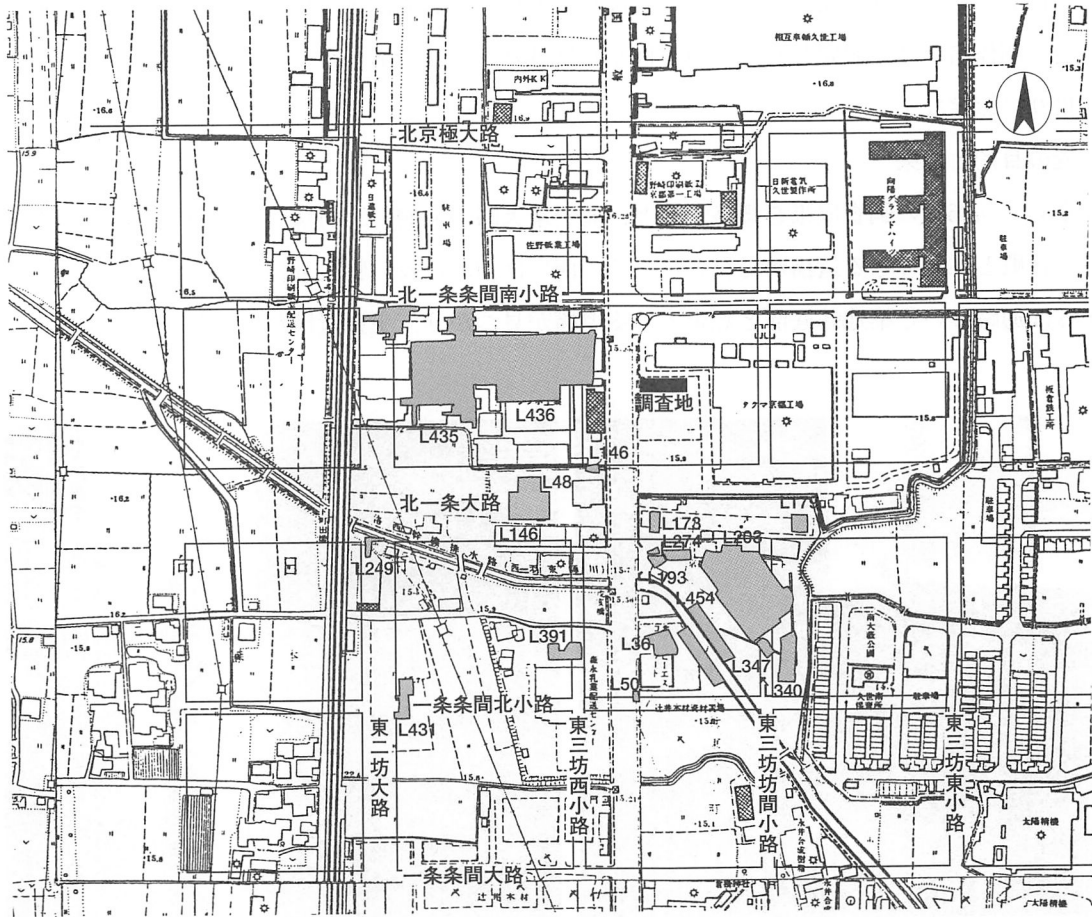


図15 調査地位置図 (1 : 5,000)

## 試掘調査の実施方法

今回の調査は、上記した東院の範囲を確認するため、文化庁・京都府教育委員会・京都市埋蔵文化財センターなどの指導で、試掘調査を左京第490次調査として実施した。実施にあたっては、敷地の占有面積が狭いことから、2回に分けてトレンチを設定した。当初は敷地北側に幅4mのトレンチを東西に20m設けて調査を開始し、その後東に拡張し、最後に西側を南に広げた。当初のトレンチを西区、その延長線上を東に広げたトレンチを東区、西区を南に拡張した部分を西拡張区と呼ぶ。

調査の実施にあたっては、対象地が株式会社タクマ京都工場内なので、操業と完全に分離した方法で行うことになり、関係者と協議の上で、以下の方策を採った。

1. 鋼板で占有地の周囲を囲う。
2. 調査地へは、171号線から専用の出入口を設けて行う。
3. 車での工場内への立ち入りは最小限とする。
4. 調査現場の見学については許可を受ける。
5. 工場との事前協議を遵守する。

結局、トレンチ周囲の30×12mを囲い、占地面积を約360㎡とした。通常の調査は公開が原則で、時にはメディアによる取材もあるが、今回は上記の理由から文化庁・京都府・京都市などの行政関係者、京都市埋蔵文化財研究所、長岡京に關係した調査団体で構成している「長岡京連絡協議会」関係者だけに限定した。一般原則からは外れた方法であったが、特殊な状況下で、この場を借りてお詫びをしておく。

## 調査の目的と成果

左京435・436次の調査成果を概略すると、北一条大路の北側、三坊坊間西小路の推定地に東院前殿・後殿と推定できる遺構が発見され、その西には南北に長い脇殿も検出された。また、その西からは通路ないし築地<sup>註3</sup>基底部と想定できる遺構が見つかり、主要遺構が区画されていたことが判った。



図16 調査予定地 背後は高層ビル（東から）

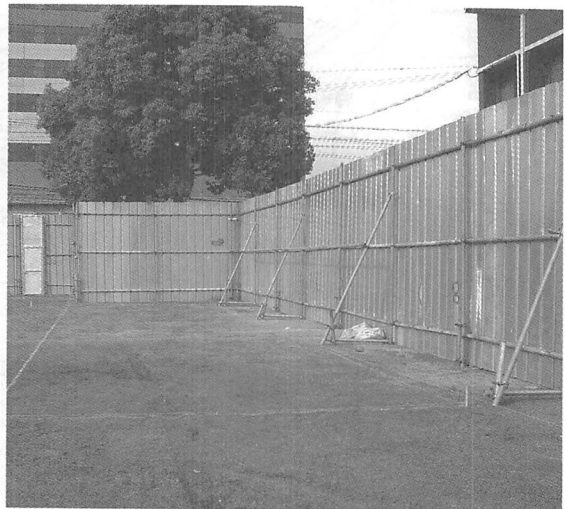


図17 西区トレンチ調査位置（東から）

正殿から西区画までの距離を2倍した位置に、東院中核部の東限が推定できる。今回の調査予定地は、この東限の推定地に当たることから、それに関係した遺構の検出を主目的とし、トレンチは東西に長く設定した。また、東院関連遺構の東への広がりを調べることも課題とした。

後に詳しく述べるが、今回の左京470次調査では、東限想定的位置で関係する遺構を確認することができ、東院中核部の東西規模を大略100mに確定することができた。

## 2 遺 構 (図18~23)

### (1) 層 序 (図18)

西区の北壁断面Y-25.584m付近の土層を示すと、1層工場造成に伴う盛土、2a層5Y4/1灰色泥砂層(水田耕作土)、2b層5Y3/1オリーブ黒色泥砂層(水田耕作土)、3層7.5Y5/1灰色泥砂層(耕作溝SD12埋土)、4層5Y5/2灰オリーブ色泥砂層(地山)、5層5Y3/2オリーブ黒色泥砂層(木株痕跡か)、6層2.5Y5/6黄褐色泥砂層(地山)である。この断面では、薄く他の断面に存在する床土層(5Y6/1灰色泥砂層)が耕作溝で削平されているが、3層の上面と下面で遺構の検出を行った。

### (2) 遺 構

遺構の検出は、上記のように2面で行ったが、ここでは上面の遺構をIa面とし、下面の遺構をIb面とする。Ib面の遺構の内、長岡京期から中世の遺構をII面として扱う。検出した遺構には、近代から長岡京期までの各時代のものがあるが数は少なく、長岡京期の遺構以外には目立つものはない。以下、近代の遺構から時代順に説明する。

#### 1) 近世から近代の遺構

肥貯め SK40 土壌を掘り、肥を貯蔵する容器を据えたもので、3時期の変遷がある。当初は径1.23mの木桶を、1.3m前後の円形掘形内に据えたもので、深さは底板のみの残存で不明である。2期は漆喰構造に変えられているが、3期の施工により完全に破壊され、残骸が第1期の底板と3期漆喰土壌の底との間に、そのレベルを上げるために使われていた。3期は径1.45mの漆

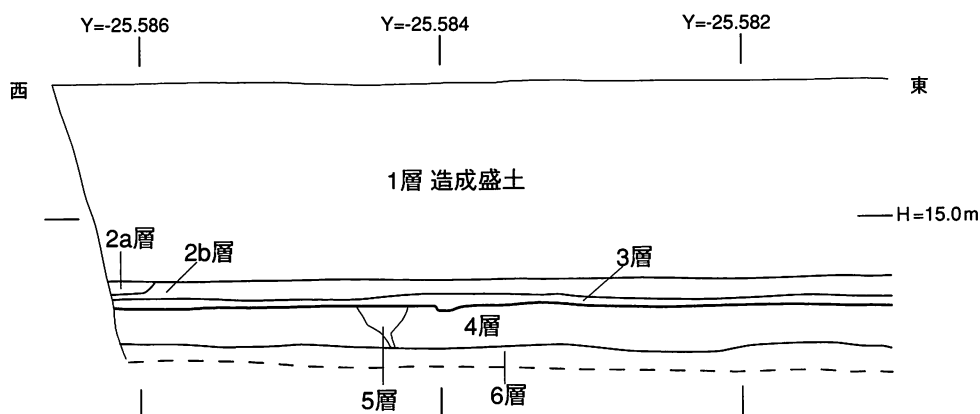


図18 西区トレンチ西部、北壁断面図(1:50)

喰構造で、深さが0.8mある。西区の西部で検出したが、約半分はトレンチ外になる。層位や構造から近代の遺構で、検出地点の西側に条里界線が予想されることから、肥貯めとして使われたことが判る。

土壌 SK45 不整形な土壌で、西・北肩などはトレンチ外で詳細は不明である。切り合いから肥溜に関係した土壌に先行する。出土遺物は長岡京期のものだけで、遺物から時代は決められない。

耕作溝群 SD09・11～14・22・23・26～28・31・33・38・42 各トレンチで検出した遺構の大半が耕作溝に関係するものであるが、規模は各種あり、切り合いなどもあるが、所属時代も長いことが予想される。比較的多くの細片となった瓦と土師器が少量出土したが、所属時期を決め

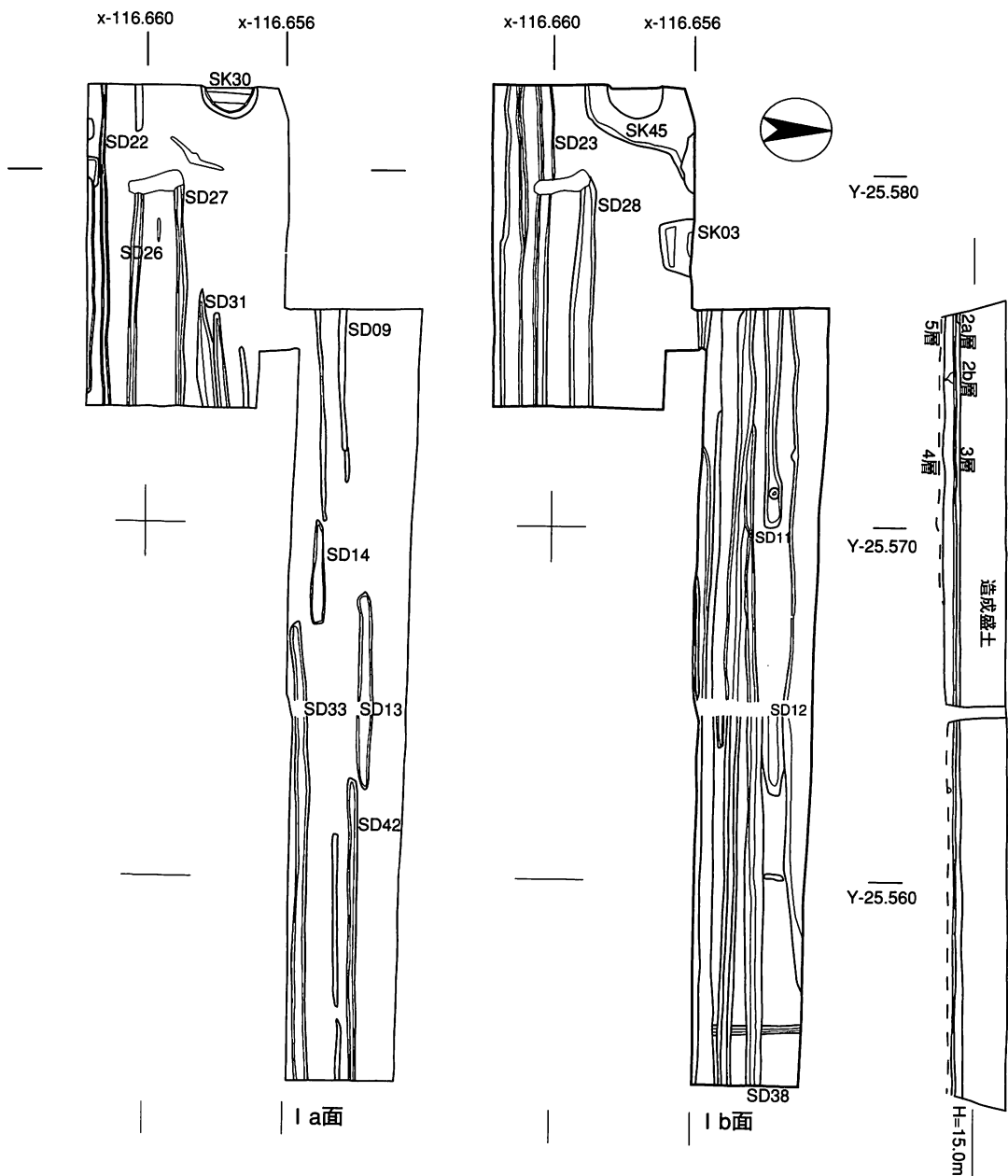


図19 I a・I b面遺構実測図（近世から近代 1：200）



ることではない。遺構の掘削時期は、大半が近世と推定される。

## 2) 中世の遺構

柱穴群 P02・61～63 少数の柱穴が西拡張区から検出された。P02とP62・63の掘形は径0.4m前後で、柱あたりは0.15m、P63は方形の一辺0.5mの掘形で、深さは0.4m、柱あたりは0.3mある。P02とP62の間は3.5m、P62とP61の間も同じ距離であるが、建物としてはまとまらない。

## 3) 長岡京期の遺構

SD50の構造には新旧2時期あることから、SD50Bの時期を1期とし、SD50Aを2期とする。

築地側溝 SD50B 瓦の破片を含むオリーブ灰色泥砂土層(5Y5/2)を埋土とする遺構で、東院東築地に伴う東側溝と推定されるが、北部の西肩はSK45によって壊されている。南部での幅は2.1m、深さ0.15m。溝の堆積土は南部では灰色泥砂層として確認できるが、北部は築地構築土と考えられるオリーブ灰色泥砂土層(5Y5/2)が堆積し、後に述べるSD50A上面との間に堆積層はない。

築地 SX55 SD50Bの西肩を構成する地業で、オリーブ灰色泥砂土層(5Y5/2)内に、径10cm前後の平瓦を主体として敷き並べていた。東院西側の遮蔽構造<sup>註4</sup>から推定して、東築地の基底部の地業と考えられるが、全容が判明してから結論づけたい。

南北溝 SD50A SD50B・SX55の下層で検出した南北溝で、東肩はSD50Bと共有している。この層上層には炭や土器を含む層が一面に広がり、セクションで見ると、東側から西側に傾斜している。下層の堆積層には少量の土師器しか含まない。東院を占地した段階の区画溝と推定される。

柱穴 P64 東西幅が0.75mで、根石状の石や瓦を含むが単独で存在し、建物の柱穴であるかは判断できない。他に、1m前後とやや規模の大きいP46・47もあり、東西に並んでいる。プランでは認められるが、セクションで埋土を確認しながら掘ると不明瞭になり、柱穴とは断定できない。

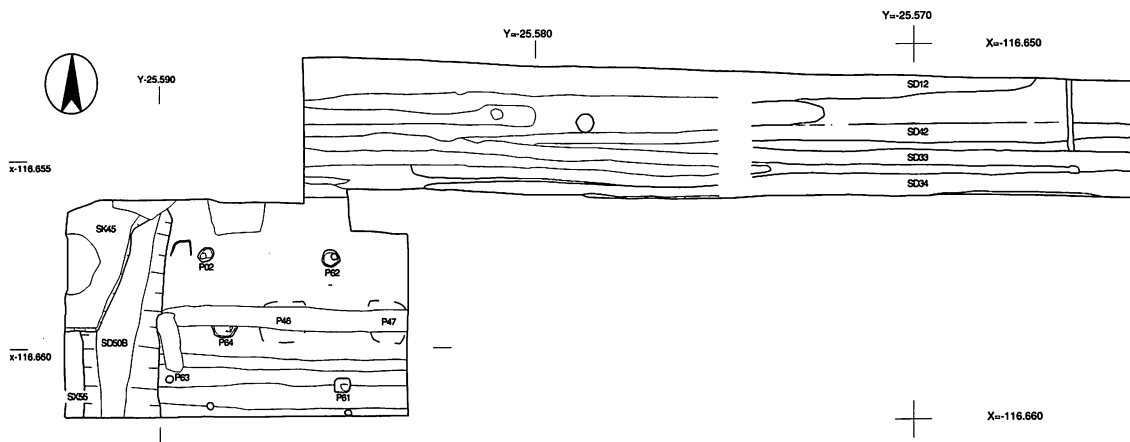


図20 II面遺構実測図(長岡京期から中世 1:200)

### 3 遺物 (図24・25)

コンテナに収納した状態で27箱の遺物が出土した。内訳は土器が10箱、瓦類17箱であった。古墳時代・長岡京期・中世・近世と各時代の遺物があるが、まとめて遺構から出土した長岡京期の遺物を中心に個体ごとに述べていく。

#### (1) 瓦類 (図24)

SD50Bの埋土から多くの瓦が、下層のSD50Aからも少量出土した。その他、細片になったものが近世の耕作溝にも含まれていた。軒瓦は、軒丸瓦2点、軒平瓦1点が出土しているが、い

ずれも小破片である。

軒丸瓦1 珠文帯だけが残る小破片で、珠文の特徴から7193型式と推定される。SD50下層の土器群から出土した。

軒丸瓦2 重圏線の珠文帯部分が出土している。SD50上層の埋土から出土した。胎土には砂粒を含み、色調は灰黒色である。

軒平瓦1 平城宮6663形式の軒平瓦。左側の中心飾り近くの小破片で、瓦当の幅から6663Cと推定される。顎は曲線顎で、胎土は灰色、焼成は軟質である。SD50を破壊している遺構、SK45から出土した。

丸・平瓦 重量にして50kgの瓦類が出土した。大半が細かな破片であるが、SD50下層の東肩から出土したものの数点は全容をうかがうことができる。

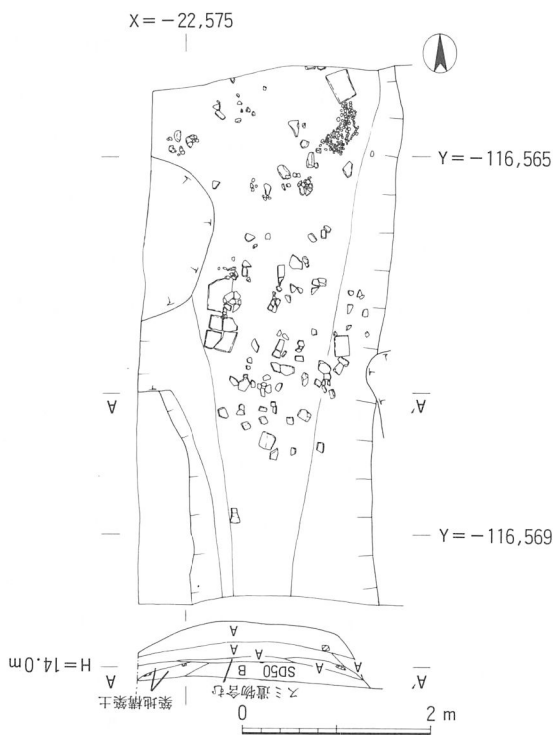


図21 SD50B遺物出土状況 (1:50)

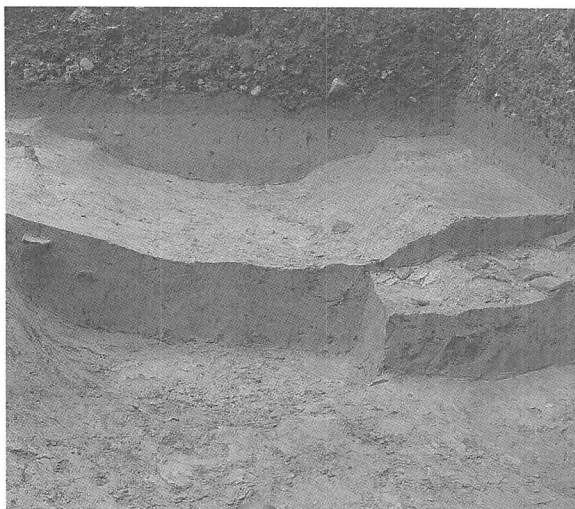


図22 SD50断面 (北から)

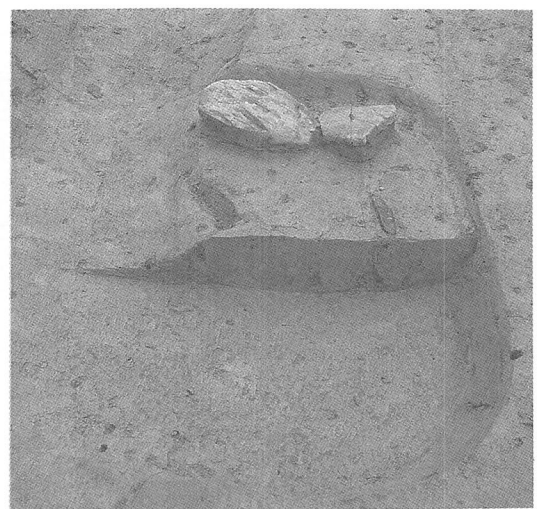


図23 P64 (西から)

大半の瓦は出土状況から判断すると、築地の瓦がその破壊に伴って溝に廃棄されたものと推定される。

(2) 土器類 (図25)

土器はSD50A期の最上層で、炭などが混在した状況で出土した。大半が土師器の供膳形態で煮焚具はほとんど出土しなかった。須恵器は量が少なく、蓋が中心で杯身は少ない。

須恵器蓋 (1~3) 小型と大型の2法量がある。小型品は径が11.5cm、器高は2cm前後、大型品は口径が25cm、器高は3cm前後である。杯はA類の小破片が1点であるのに対し、蓋は相対的に多い。

須恵器杯 (4) 口縁部の小破片である。

須恵器皿 (5) 小破片で口径は不明、端部は方形であるが、ナデでやや外側に拡張している。

須恵器鉢 (6) 口縁部から体部の破片で、口径は26.2cmある。これより口径の小さなものももう1個体ある。

土師器碗 (7~14) 器形からは大きく2群に分かれる。7~13までがA群、15はB群になる。A群はやや丸い底部から斜め上方に端部が立ち上がる器形で、丸くおさめている。外面調整はへら削りで、13など端部外面のナデが強い部分は削り残される。14は特異な器形で、体部のナデが強く数回行われた結果、凹凸が目立つ。内面は褐色で鉄分が多い土を二次的に塗っている。碗の出土量は他の器形に比べて多い。

土師器杯 (15~18) 比較的大きな底部からわずかに内彎しながら立ち上がり、端部は内面に巻き込む。外面調整はへら削りが主体で、碗と同じように外面端部が削り残されたものも多く、出土点数は少ない。

土師器皿 (19~28) 端部の形態から2種類に分かれる。内面に巻き込むものをA群 (19・21~24・26~28) とし、B群は丸く収まるもので、20・25がある。

土師器蓋 (29) 口径24.8cmの大型の蓋。肌が荒れていて、器面の調整は不明である。

土師器甕は比較的多く出土する通常の甕で、

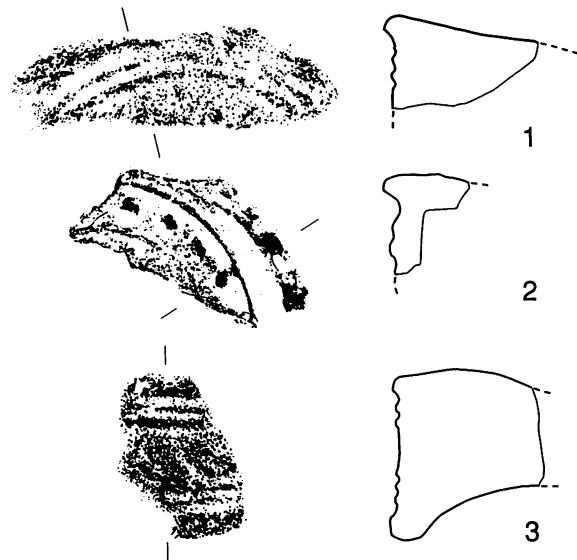


図24 軒瓦拓本・実測図 (1:4)

表2 SD50瓦の出土量

種類 遺構	軒丸瓦	軒平瓦	丸瓦	平瓦
SD50上層		0.6	4.5	34.2
SD50下層	0.3		3.9	7.9
合計	0.3	0.6	8.4	42.1

表3 SD50出土土器の破片数

種類 遺構	須恵器	土師器
SD50上層	6	97
SD50下層	17	1471
合計	23	1568

口径は18cm前後に復元される。外面は刷毛目、内面にも荒い刷毛目がつく。

当該期の遺物はSD50A最上層から大半が、SD50Bの埋土からも少量出土した。土師器には杯・皿・椀、甕などがあり、大半が供膳形態で、煮焚具は甕の小破片が数点あるだけできわめて少ない。須恵器には蓋杯・杯・皿、壺・甕などがあり、土師器と同じく供膳具が主体であるが、出土量は少ない。SD50A最上層で炭と共に出土した土器の出土状況を見ると、土器は東側から投げ込んだ状況で出土し、東院の造営に伴う食器と推定することができるであろう。

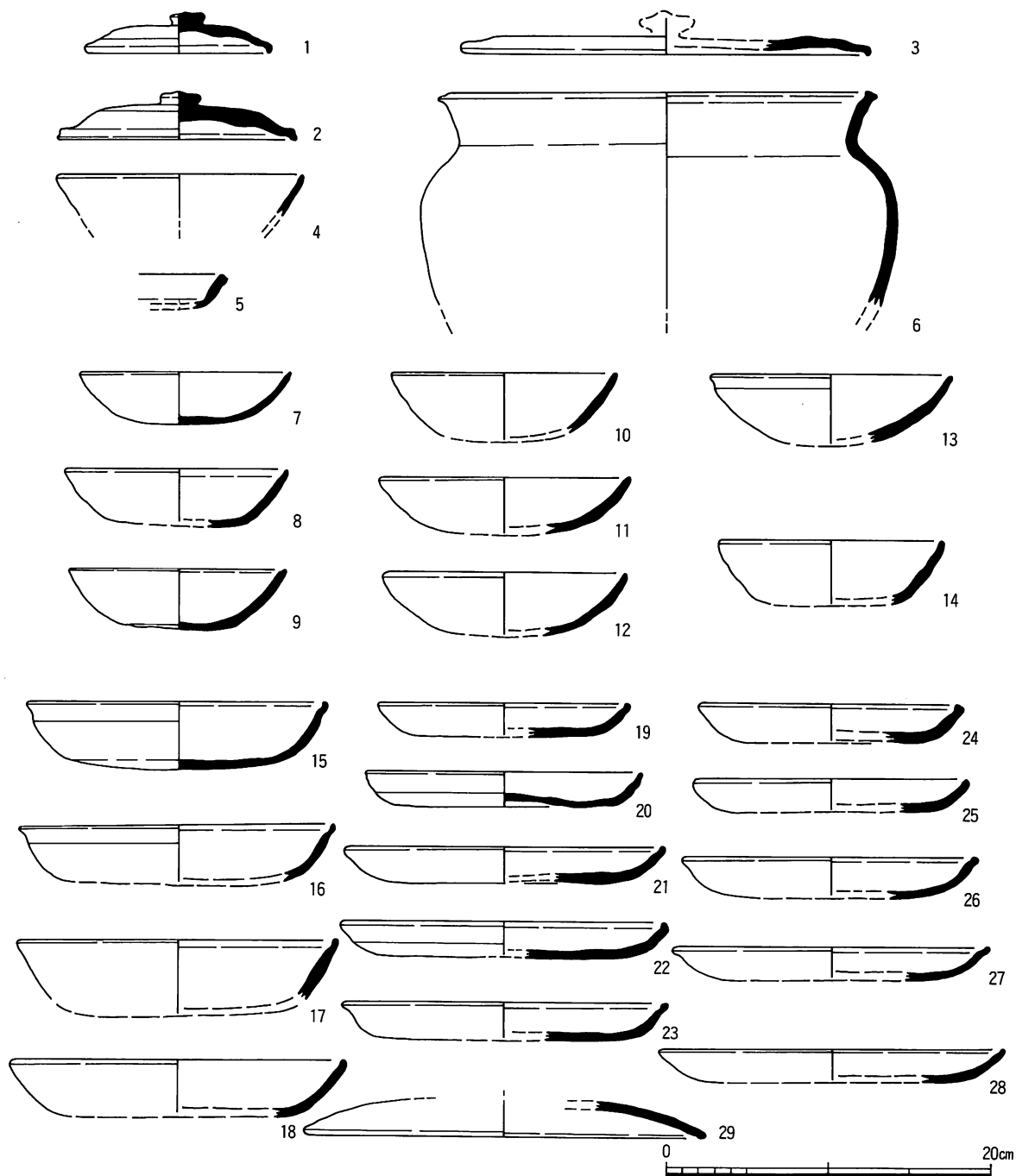


図25 SD50出土土器実測図(1:4)

その他の遺物 古墳時代の遺物には、小破片で実測図は作成できないが、須恵器杯身が出土した。平安時代の遺物には、灰釉陶器底部や中期の摂津型土師器羽釜が出土している。

鎌倉時代の遺物には白磁Ⅳ類碗、土師器皿、瓦器椀などが少量ある。近代の遺物は、耕作土などから少量出土した。

## 4 まとめ

今回の調査で検出した遺構と出土遺物を中心に述べてきたが、ここでは周辺での調査成果との関係についてふれ、まとめとしたい。

### 東院の内郭構造と規模

今回の調査で検出した遺構を、周辺での調査成果、主に東院に関係した遺構が検出された左京435・436次の遺構と合わせて検討する。

1 遺構面のレベル 築地とその側溝などの遺構検出レベルは14.4m前後で、東院正殿と比べると0.4m前後低い。また、遺構面のベースは灰オリーブ色泥砂層で、時間が経つと褐色に変色する、還元状態の土質であった。この直上には、近代の水田耕作土があることや、耕作に関係した小溝が中世まで遡らないことなどの状況を勘案すると、当地では近世段階で水田造成のために地面の掘削がなされ、耕地化されたことが判る。

2 東院正殿とSD50B東肩の距離 東院の正殿東西中軸から溝の東肩で50.8m離れており、左京436次調査で検出した通路（築地基底部か）の距離、50.2mとほぼ同じ位置にくる。<sup>註5</sup>左京436次の報告書では、この遺構を通路と理解し、築地としては解釈していないが、西側に存在した勅旨省との間には構造的な遮蔽物が想定され、具体的には各宮での通例である築地が考えられる。砂が敷き詰められた一見すると道路状の遺構は、築地基底部の地業と推定できる。

3 SD50の変遷 SF436017の西側溝・溝436100の下層には南北に蛇行して折れ曲がる遣り水状のSD436211があるが、これで中核部西限も大きく2時期あることが判り、470次も同様の経過を辿る。築地下層の遺構であるSD50Aでは、当初の溝幅が2.5m以上あり、灰色の堆積層は0.3mほどで、その下層や中層からは完形に近い平瓦が数点出土しているだけで、土器や炭の出土はない。これに対して、最上層からは炭や土器が東肩から投げ込まれた状態で出土し、大きな差異がある。この直上に溝の中央部では瓦が敷かれ築地の基底層となっている。

SD50Bは築地の外側溝として機能したが、固有の堆積層は北部では皆無で、直上には築地の積み土があり、この層で溝は埋められている。

このようなSD50を中心とした変遷から、調査地点の土地利用は以下のように経過したと推定される。

1 北一条大路に接した北側に東西幅約100mの占地をし、その中軸は東三坊坊間西小路とする。占有地の東側に3m前後の区画用の南北水路を掘削し、占地をすると同時に土地の乾燥をはかる。

2 東院に桓武天皇は延暦十二（793）年正月十一日に遷御しているから、これに先立つ延暦

十年か十一年には造営が開始されたと推定され、SD50A最上層の炭や土器の堆積層は、東院造営に伴う遺物と認定できる。

3 平安京への遷都に伴い、東院も解体されたことが前殿や後殿の柱抜き取り穴から判るが、物資の輸送に左京203次で検出した旧流路を使用したことも推定でき、作業上東築地は早くに破壊されたものと思われる。SD50B北部での西肩の破壊や、瓦を含むオリーブ灰色泥砂土層はこれに関係したことを示す遺構や層序と考えられる。

#### 長岡京の解体、平安京の造営

先に東院で解体した資材を、左京203次調査などで検出された流路を使い持ち出したと考えたが、この作業には陸路での搬送も予想される。後者の方法で輸送するためには両京の間を南流する桂川が障害となり、陸送から河を渡し、再度引き上げて陸送する必要がある。これに対し、桂川の旧流路を使い嵐山の近くまで漕運すれば、陸送は1回で済む。河の横断に対する労力は、上流側からは比較的簡易であるが、引き上げて渡河するには大きな労力が伴う。漕運は約6kmの距離があるが、筏に組み引き上げれば、陸送は1回で済む。嵯峨野には木屋が平安時代に存在したが、これは長岡京に解体時に設置され、引き続いて利用されたのであろうか。

このように考えを進めると、解体を考えて宮・京の造営に関係した津に隣接して東院を設定したとの想定も可能になるだろう。

最後に調査の実施について、多大な協力をいただいた株式会社 タクマに感謝し、まとめとします。

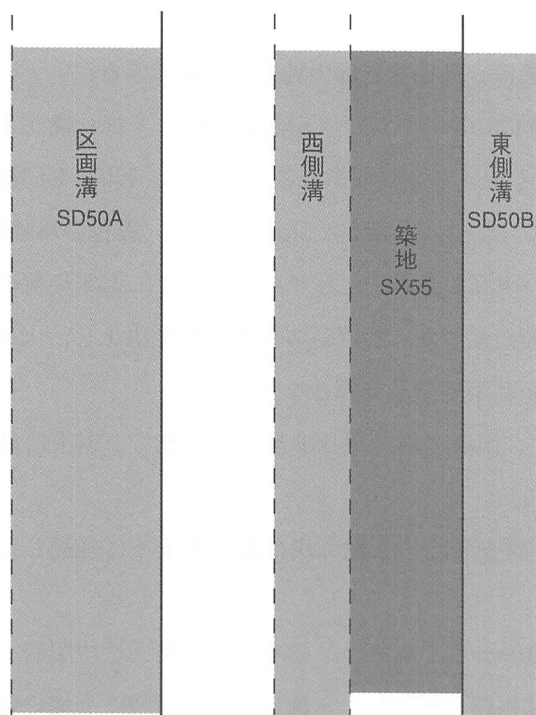


図26 築地SX55の変遷

#### 引用文献

- 註1 『京都市遺跡地図』平成8年度 京都市文化市民局 1996年
- 註2a 『長岡京左京北一条三坊二町』向日市埋蔵文化財調査報告書第55集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2002年
- 註2b 『長岡京左京東院跡の調査研究 正殿地区』古代學研究所研究報告 第7輯 財団法人古代學協會 2002年
- 註3 註2bではSF436017について、「SD436099と436100によって画される平坦面で、そこには築地の高まりや寄

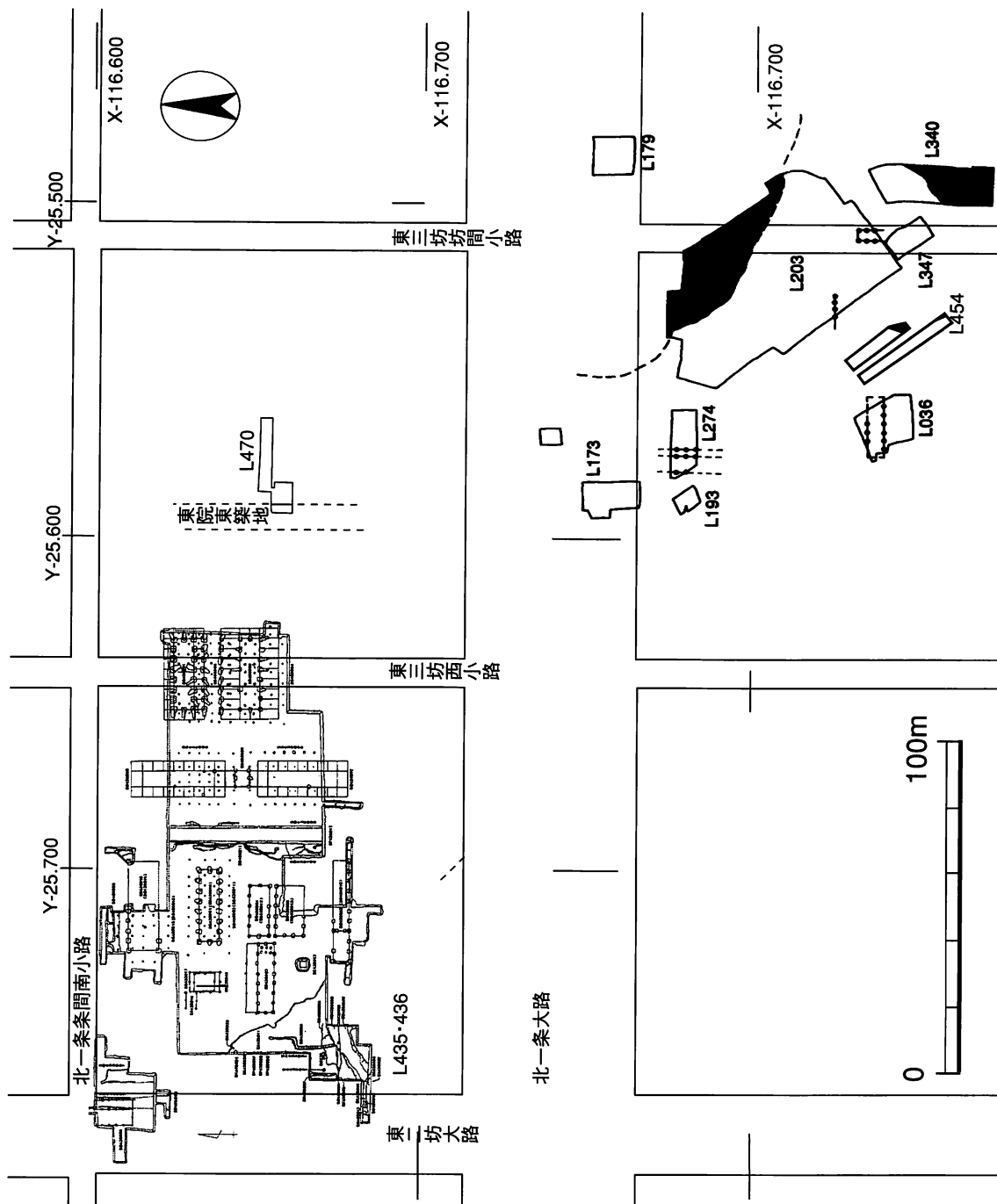


図27 長岡京東院と周辺の遺構 (1 : 2,000)

柱の痕跡が認められないこと」、などから判断してから「通路の可能性が極めて高い」、としている。

註4 SF436017は幅が4m前後あり、両側に0.7~0.8mの側溝が付属する。調査時の所見では、0.2~0.4m残存するとのことで、築地要素に関係した遺構の上面が削平されていることは、考えられないだろうか。

註5 『長岡京左京北一条三坊二町』向日市埋蔵文化財調査報告書 第55集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2002年では、東院正殿中軸と西築地との心々距離を160尺(一尺=29.6cm)としている。これは47.36mになり、2倍すると94.7mとなる。

註6 『長岡京左京出土木簡一』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第一六冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年



### III 方広寺大仏殿跡

#### 1 調査経過

今回の調査は方広寺大仏殿の範囲を確認するために実施した発掘調査である。

調査地は東山区大和大路通正面茶屋町にある豊国神社敷地内の本殿南東部に位置し、桃山時代に豊臣秀吉が創建した方広寺大仏殿の基壇南西部にあたる。

2000年7月に隣接する現大仏殿跡緑地公園で確認調査をしたところ、大仏殿基壇上面の四半敷・柱跡・大仏の台座・基壇南端階段付近の羽目石や地覆石・階段耳石など、多くの遺構を大変良好な状態で検出した。これらから建物中軸線を割り出し、現存する図面と照



図28 調査地位置図 (1 : 5,000)

合した結果、大仏殿の規模と位置をほぼ確定することができた。また基壇南端部の断割では、秀吉創建時の旧基壇に伴うと考えられる地覆石を検出するなど大きな成果が得られた (図34、図版10・11)。

さらに昨年の緑地公園化の工事中に実施した立会調査においても、北側敷地境界線の北壁断面で根固めを1基確認している。以上の成果をうけて今回の確認調査を実施する運びとなった。

今回の調査目的は前回検出した柱位置より西に延長する柱跡と基壇西端、および秀吉創建時の旧基壇の検出である。これによって前回の調査結果を補強することが期待できた。

調査は柱跡と基壇西端が遺存すると推定される本殿南側に調査区を設けて7月22日に開始したところ、調査区中央部以西で基壇盛土とその上面で南北方向の溝状遺構を検出した。前回の調査をもとに作成した大仏殿復元図に照合すると、検出した溝は基壇西端にあたり、地覆石の抜き取り跡と考えることができた。また調査区南壁と西壁に沿って断割りを行い、断面観察を行った結果、基壇盛土の下層に室町時代の遺物包含層や遺構を確認した。必要に応じて実測図・写真撮影などの記録を行って、8月9日にすべての調査を終了し、埋め戻しを行った。

## 2 遺跡の位置と環境

方広寺は天正十四年（1586）豊臣秀吉が大仏建立を志し、蓮華王院の北側に造営が開始された。文禄四年（1595）、東大寺に於いて高さ六丈（約18m）の木製金漆座像大仏が安置され、大仏殿もほぼ完成したが、翌年慶長の大地震で大破してしまう。慶長三年（1598）秀吉の死後、遺志を継いだ秀頼が大仏復興を命じ、再建を開始、途中、火災に見舞われるなどして慶長十七年（1612）にようやく銅造大仏が完成した。この後、寛文二年（1662）の地震で仏像は倒壊し銅造から木造に造り替えられ、寛政十年（1798）大仏殿に落雷、回廊、楼門を含むすべてが焼失してしまう。

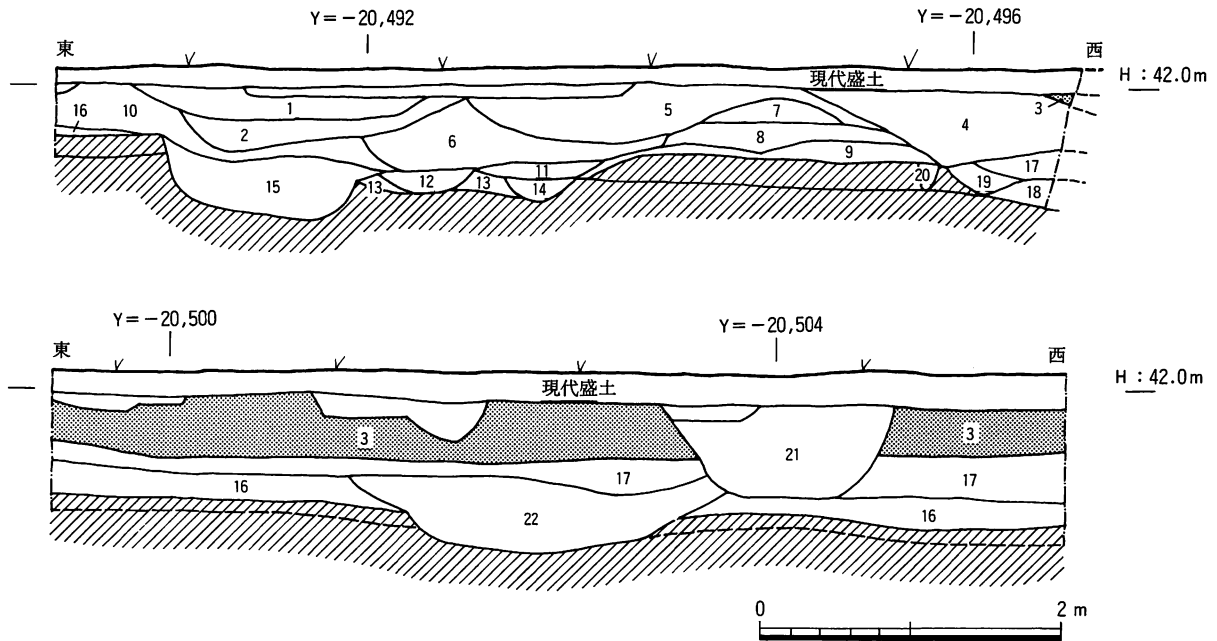
現在、往時の様子を残すのは大仏殿正面の門跡と寺域の西・北・南面の石垣、現方広寺の鐘楼に安置されている「国家安康」銘の梵鐘だけである。方広寺大仏殿は正面を西側に向けて建てられ、大仏殿後方には東山阿弥陀ヶ峰がそびえていた。山麓の広大な敷地には秀吉の死後、秀吉を祀った豊国廟が造営されたが、徳川家康によって破却され、現豊国神社は明治十一年に再建されたものである。敷地内南東部にある馬塚は家康が破却の際、大仏回廊の裏に「太閤を大仏鎮守と為すべし云々<sup>註1</sup>」として建立したものとされている。また、周辺には秀吉に関わる建造物も多く残っている。豊国神社門前の正面通南側には秀吉が朝鮮出兵の折、戦果として持ち帰らせた朝鮮兵の耳を葬った耳塚がある。また現在の五条大橋は秀吉が大仏殿参詣のために平安京の五条大路（現松原通り）から架け替えさせたもので、養源院など秀吉ゆかりの寺院も多い。なお、方広寺が造営される以前は、平安時代後期の法住寺殿跡、鎌倉時代の六波羅政庁跡の推定地にあたる。現存する石垣および耳塚・馬塚は1969年に「史跡方広寺石垣および石塔」として国の史跡に指定されている。

このあたりの地形は東から西に、北から南に低くなっている。つまり東辺の山地から丘陵・段丘を経て東大路から本町通あたりまで急傾斜扇状地となり、以西は緩傾斜扇状地が鴨川まで続く。このため、大和大路に面して造営された方広寺は、創建時の基礎工事として石垣を構築、寺域の東から西面石垣まで盛土をして平地となるように大規模な整地がなされた。路面から西面石垣の高さは約3mある。

## 3 遺 構

### (1) 層 位 (図29)

調査区の基本層序は表土の厚さが10～25cmあり、その直下が遺構面となる。調査区中央以西では基壇盛土を検出、厚さが10～40cm、室町時代の遺物包含層が10～30cm、それよりやや古い遺物包含層が20cm、その下が地山となり、共に基壇盛土の下層にほぼ水平に堆積している。東側は削平を受けているため基壇盛土は消滅しており、東端では表土直下で室町時代の遺物包含層を検出した。地山検出面は東端が標高41.6m、西端が41.1mで、50cm西に低くなっている。



- |   |  |
|---|--|
| 1. 10YR3/3暗褐色砂泥やや粘質、小礫多量混、炭含                    | 13. 10YR3/3暗褐色砂泥、小礫詰まる                             |
| 2. 10YR3/3暗褐色砂泥やや粘質、礫混、炭含                       | 14. 10YR2/3黒褐色砂泥やや粘質、小礫混                           |
| 3. 10YR6/3にふい黄褐色砂泥粘質ブロック+<br>10YR3/3暗褐色砂泥（基壇盛土） | 15. 10YR2/3黒褐色砂泥やや粘質+<br>10YR3/3暗褐色砂泥粘質、小礫多量混（土壇5） |
| 4. 10YR4/3にふい黄褐色砂泥、礫混                           | 16. 10YR5/2灰黄褐色砂泥粘質ブロック+<br>10YR2/3黒褐色砂泥粘質ブロック     |
| 5. 10YR4/3にふい黄褐色砂泥、小礫多量混                        | 17. 10YR4/3にふい黄褐色砂泥                                |
| 6. 10YR4/3にふい黄褐色砂泥、礫多量混、炭含                      | 18. 10YR3/3暗褐色砂泥やや粘質、礫混                            |
| 7. 10YR3/3暗褐色砂泥、礫混                              | 19. 10YR3/3暗褐色砂泥粘質                                 |
| 8. 拳大礫詰まる（石敷遺構6）                                | 20. 10YR3/2黒褐色粘質土、固く締まる                            |
| 9. 10YR3/2黒褐色砂泥粘質、小礫多量混                         | 21. 10YR4/3にふい黄褐色砂泥、炭含（土壇1）                        |
| 10. 10YR3/3暗褐色砂泥やや粘質                            | 22. 10YR3/2黒褐色砂泥やや粘質、炭含                            |
| 11. 10YR3/3暗褐色砂泥、小礫混                            |  |
| 12. 10YR3/3暗褐色砂泥粘質、固く締まる                        |  |

図29 調査区南壁断面図（1：50）

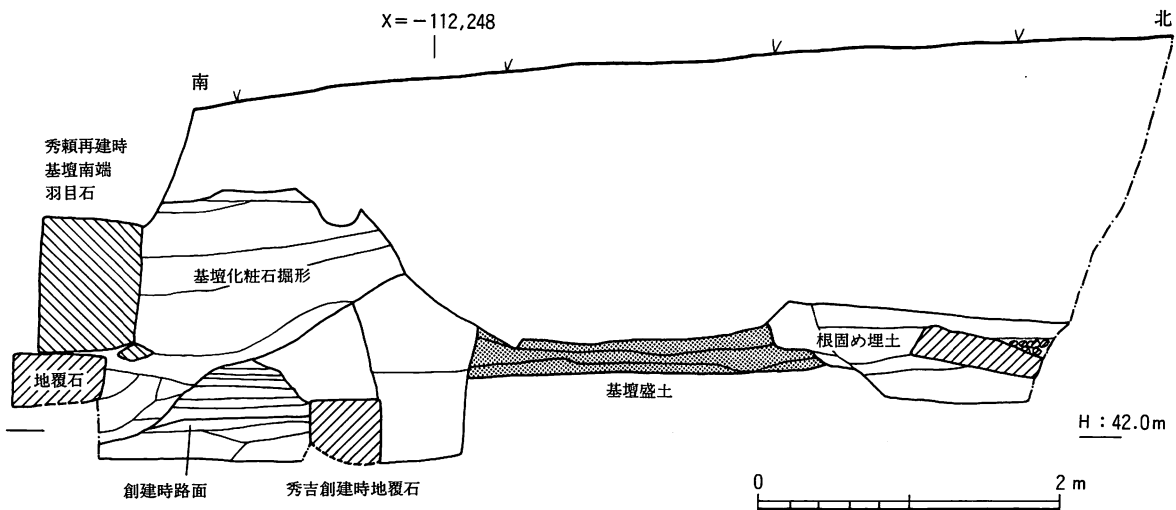


図30 2000年度調査4区西壁断面図（1：50）

## (2) 遺 構 (図31、図版 9)

検出した遺構は調査区西半部の南北方向の溝4がある。規模は幅65～80cm・深さ13cm・長さ2.0m以上あり、北は調査区外に延長し、南は土壌1で削平されている。埋土から江戸時代後期から幕末に属する土師器皿が出土した。この溝は大仏殿復元図の基壇西端にほぼ一致することから、地覆石の抜き取り跡でこれが基壇西端を示すと推測した。溝4の検出面の標高は41.87m、一方前回の調査で検出した秀頼再建時の地覆石据え付け面は標高42.04mであることから(図30)、豊国神社境内では、基壇西端の地覆石などの化粧石が遺存する可能性はない。しかしながら地覆石の大きさ(幅120cm以上・奥行き60cm・高さ35cm)を考慮すればこの溝が石の抜き取り跡として矛盾しないといえよう。

西に調査区を拡張したところ、南北方向の溝状遺構を検出した。規模は幅85cm・深さ30cm・長さ70cm以上あり、北は調査区外に延長し、南は調査区西隣りの建物掘形で消滅している。埋土から明治時代の遺物が出土し、大仏殿に関わる遺構とは確認できなかった。また調査区南壁沿いの断割り調査では、室町時代の遺物を主体とする遺物包含層や遺構を確認し、下層遺構の残存状態は良好であるとわかった。

## 4 遺 物

出土遺物には、土器類・土製品・瓦類などがあり、大半は土器類と土製品である。その他に銭や石製品が数点出土した。コンテナ総数は7箱で、内訳は土器類・土製品5箱、瓦類2箱である。

これらは基壇整地層上面の土壌や溝、下層の遺物包含層・遺構から出土したもので、時代別では平安時代から明治時代まで各時代の遺物がある。瓦類には明治時代の瓦のほかに、大仏殿に葺

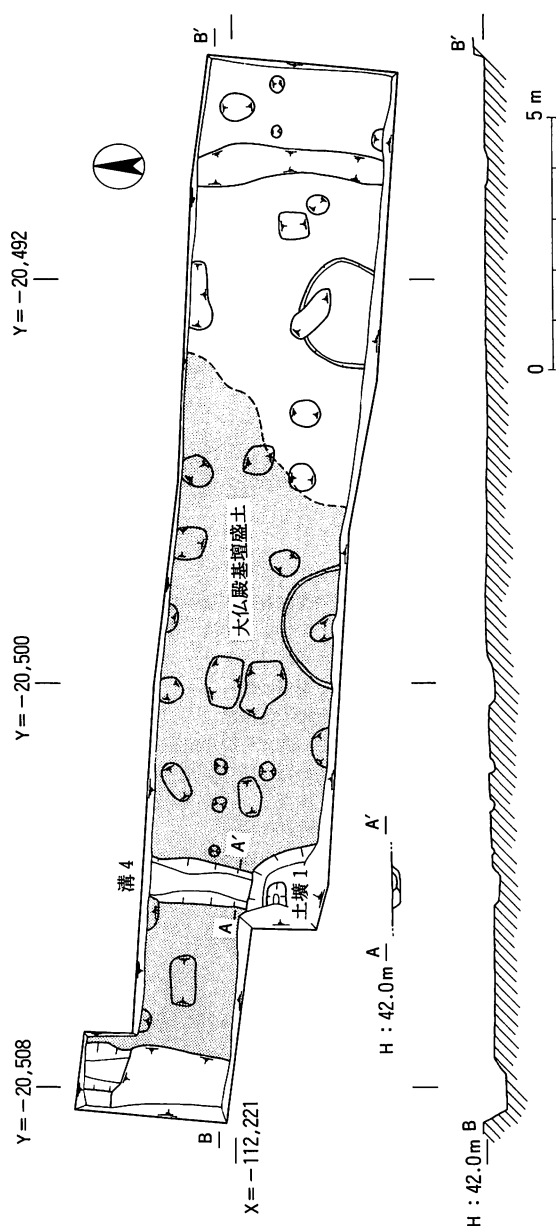


図31 調査区遺構実測図 (1:150)

かれた大型瓦や室町時代の瓦が少量ある。

平安時代の遺物は極少量で土師器甕、灰釉陶器壺があり、鎌倉時代では土師器皿、備前軟質須恵器椀・皿、焼締陶器甕などがある。共に遺物包含層などから混入遺物として出土している。

室町時代の遺物は土師器皿・丸底小型鉢、須恵器鉢・甕、瓦器鍋・釜・火鉢、焼締め陶器鉢・甕、輸入青磁・白磁椀皿、瓦、硯、石臼の破片などがある。主に断割り調査の遺物包含層や遺構から出土している。

安土桃山～江戸時代の遺物は大型瓦の破片で、焼けて赤変しているものもある。基壇整地層などから出土している。溝4からは銭貨の「寛永通寶」や江戸時代後期（19世紀前半）から幕末に属する土師器皿が出土した。

明治時代の遺物は大量の伏見人形の狐などのほかに磁器の狐・人形、施釉陶器灯明皿・器台付灯明皿・御神酒徳利、蓋付水入れなどが一括して土壌から出土している。これらの遺物は豊国神社敷地内にある稻荷神社に納められたものと考えられる。その他の遺物では国産施釉陶磁器、トチン・サヤ鉢などの窯道具、瓦類などがある。

遺物のうち土器類のほとんどは断割り調査で出土した土師器である。ここではこれらの概説を述べる（図32）。

1～9は室町時代（14世紀代）に属する土師器皿である。1・

8・9は口縁部が底部から屈曲して外反気味に開き、端部は丸く収まる。2～7は口縁部が底部から

内弯気味に開き、端部は立ち上がる。

7の底部中央は凹む。調整はすべて底部・口縁部外面下位はオサエ後ナデ、口縁部内面・外面上位は横ナデである。残存部は1・3が1/6、2・8・9が1/5、4が1/2、5・7が1/4、6が1/3である。1～3は土壌5、4～6は石敷遺構6下層、7～9は遺物包含層から出土した。

参考資料（図33）

2000年度の調査で出土した大型軒瓦である。1は右巻きの巴文軒丸瓦で外区に珠文が巡る。瓦当裏面上部には丸

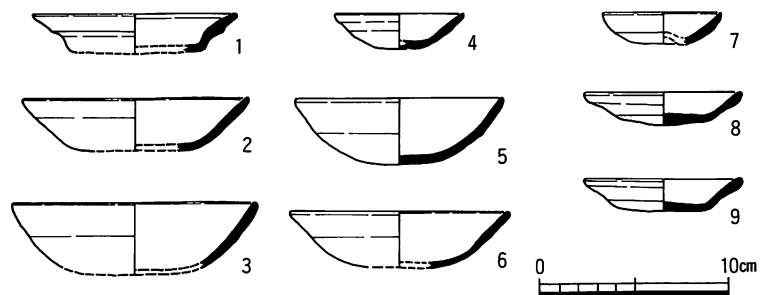


図32 断割出土土器実測図（1：4）  
1～3、土壌5 4～6、石敷遺構6 7～9、遺物包含層

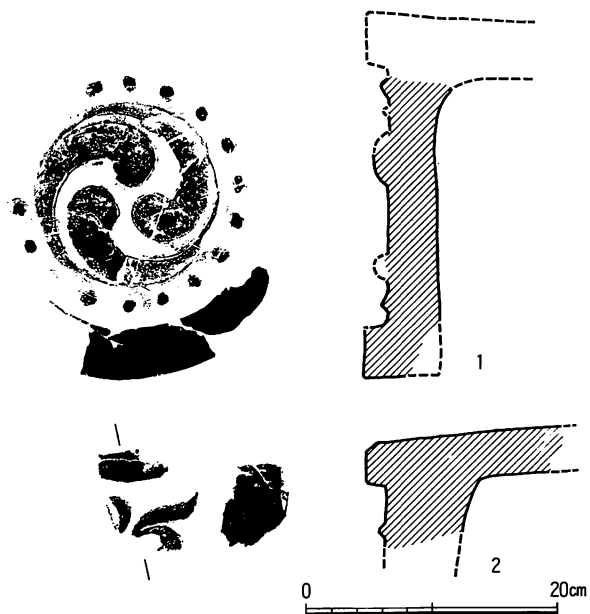


図33 参考資料 出土軒瓦拓本・実測図（1：6）

瓦をあて粘土を付加するためのカキメがあり、径は29.0cmある。2は唐草文軒平瓦で、瓦当部は顎貼付技法で成形し、貼付部分には横方向に数本のカキメがある。共に周縁には丁寧なミガキが施されている。大仏殿に葺かれたものと考えられる。

## 5 まとめ

2000年の調査成果をもとに今回実施した確認調査では、大仏殿の東西柱列の根固めや秀吉創建時の地覆石などの検出が期待されたが、豊国神社境内では削平されていてこれらの遺構は検出できなかった。しかし、検出した溝が大仏殿復元図から基壇西端の地覆石の抜き取り跡と確認できた。

大仏殿は江戸時代末期の<sup>註2</sup>絵図などにあるように、寛政十年（1798）の火災焼失後も基壇とその上の台座はそのまま存在していたようだが、明治十一年（1878）豊国神社造営の際には削平・整地されていた。しかし基壇西端を確認できたことは大仏殿基壇を確定する上で大きな成果であった。

<sup>註3</sup>『義演准后日記』によると秀吉の死後、方広寺再建を引き継いだ秀頼は寺域周囲の築地塀を回廊にし、また蓮華王院（三十三間堂）の西・南に現存する太閤塀を新たに築くなど、寺周辺も含めた方広寺再建事業を行っていることが分かる。これを裏付けるものとして、1998・99年度に行った京都国立博物館内の調査では、寺城南面の石垣が南門付近で南に曲がって延長すること、南門は八足門で回廊は複廊であったこと、南門から蓮華王院南大門に延長する道路敷きなどを確認した。また南

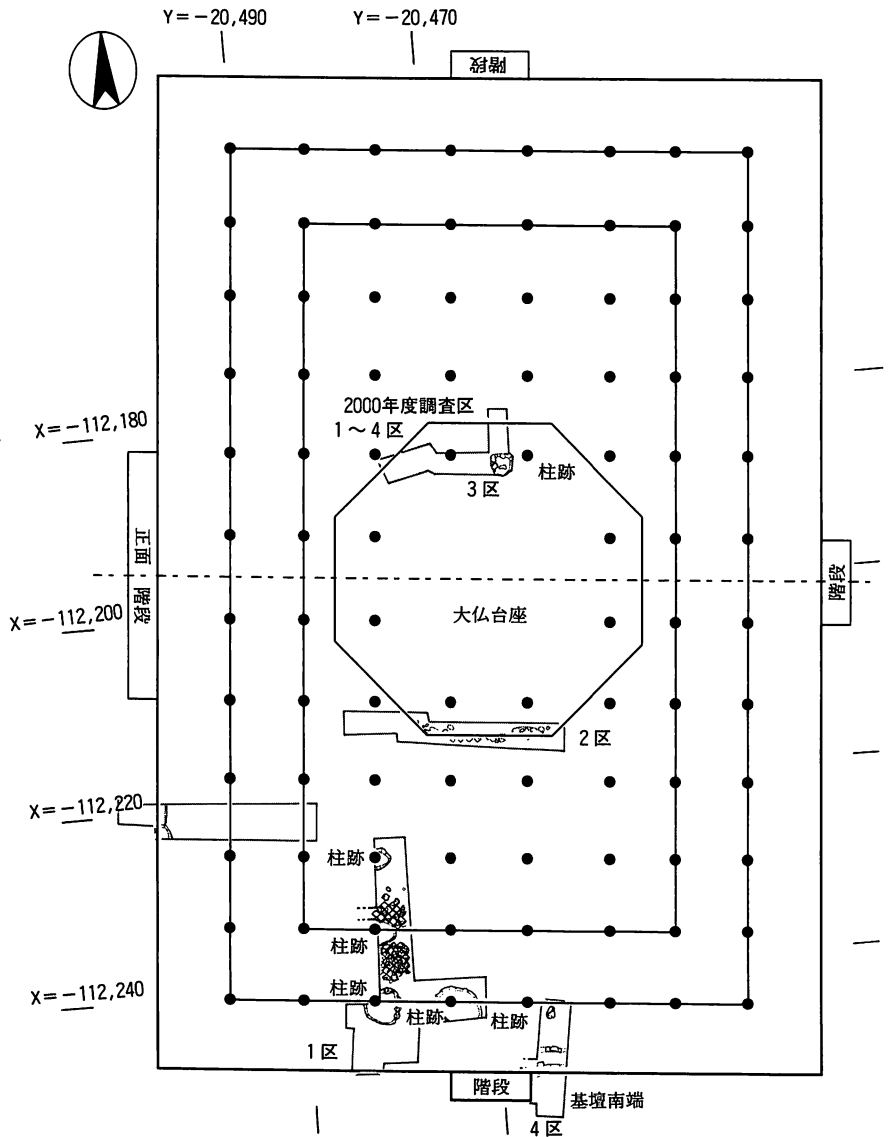


図34 大仏殿復元図 (1:800)

門西端付近より東は石垣が存在した痕跡はなく、東面に石垣はなかったものと考えられる。

2000年の緑地公園化に伴う大仏殿跡調査では、基壇上面の石敷、柱跡の根固め、大仏の台座、基壇南端、南階段などの遺構を検出し、大仏殿復元の手がかりとなる多くの資料が得られた。文献史料や<sup>註4</sup>絵画資料<sup>註5</sup>には方広寺大仏殿の規模や様子などに関する様々な記載があるが、基壇上面は花崗岩の四半敷であること、台座は径約34mの八角形であること、基壇の高さは約1.8mあることなどを新たに確認することができた。また台座の規模、根固めと南階段の位置を確認したことで建物の中軸線を割り出し、現存する図面や史料から大仏殿の位置を確定することができた。さらに秀吉創建時の地覆石を検出したことによって、秀頼が再建した際には大仏殿の基壇南端が1間分(約1.8m)大きく造り替えられていることが判明した。

これら一連の方広寺関係の調査の結果、大仏殿の規模や方広寺の寺域、伽藍配置の復元が可能となった(図35)。

#### 引用文献

- 註1 『駿府記』慶長二十年七月九日条「史籍雑纂 第二」國書刊行會 1881年
- 註2 『慶長 昭和京都地図集成』改正 京町絵図細見大成 天保2年(1831)  
「京町御絵図 明治2年(1869)」柏書房 1994年
- 註3 『義演准后日記』慶長五年五月十二条「史料纂集 義演准后日記 第二」続群書類従完成会 1984年
- 註4 『建築史 3』大熊喜邦「京都大佛殿の間尺覺書 附 京都御所延寶度御造當覺書」1941年  
『史料京都見聞記 第二卷』京師順見記 法藏館 1991  
『新修 京都叢書 第六』都名所図絵 卷三 臨川書店 1967年  
『新修 京都書 第二十一』京都坊目誌 下京第廿七学区之部 臨川書店 1970年  
『新修 京都叢書 第十四』山城名勝志 卷第十五 臨川書店 1971年
- 註5 『中井家所藏方広寺地建割地図』  
『日本建築史図集 日本建築学会編』洛陽大仏殿図 彰国社 1949年  
『古図に見る日本の建築』洛陽大佛殿 諸堂図 国立歴史民族博物館 1989年  
『京都大佛殿』明治二十有四稔  
『今村土佐様所藏大仏殿指図』

#### 参考文献

- 田中利津子・近藤知子・大立目一「六波羅政庁跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
財京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 田中利津子・近藤知子・大立目一「六波羅政庁跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
財京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 田中利津子・近藤知子「方広寺大仏殿跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』  
財京都市埋蔵文化財研究所 2003年

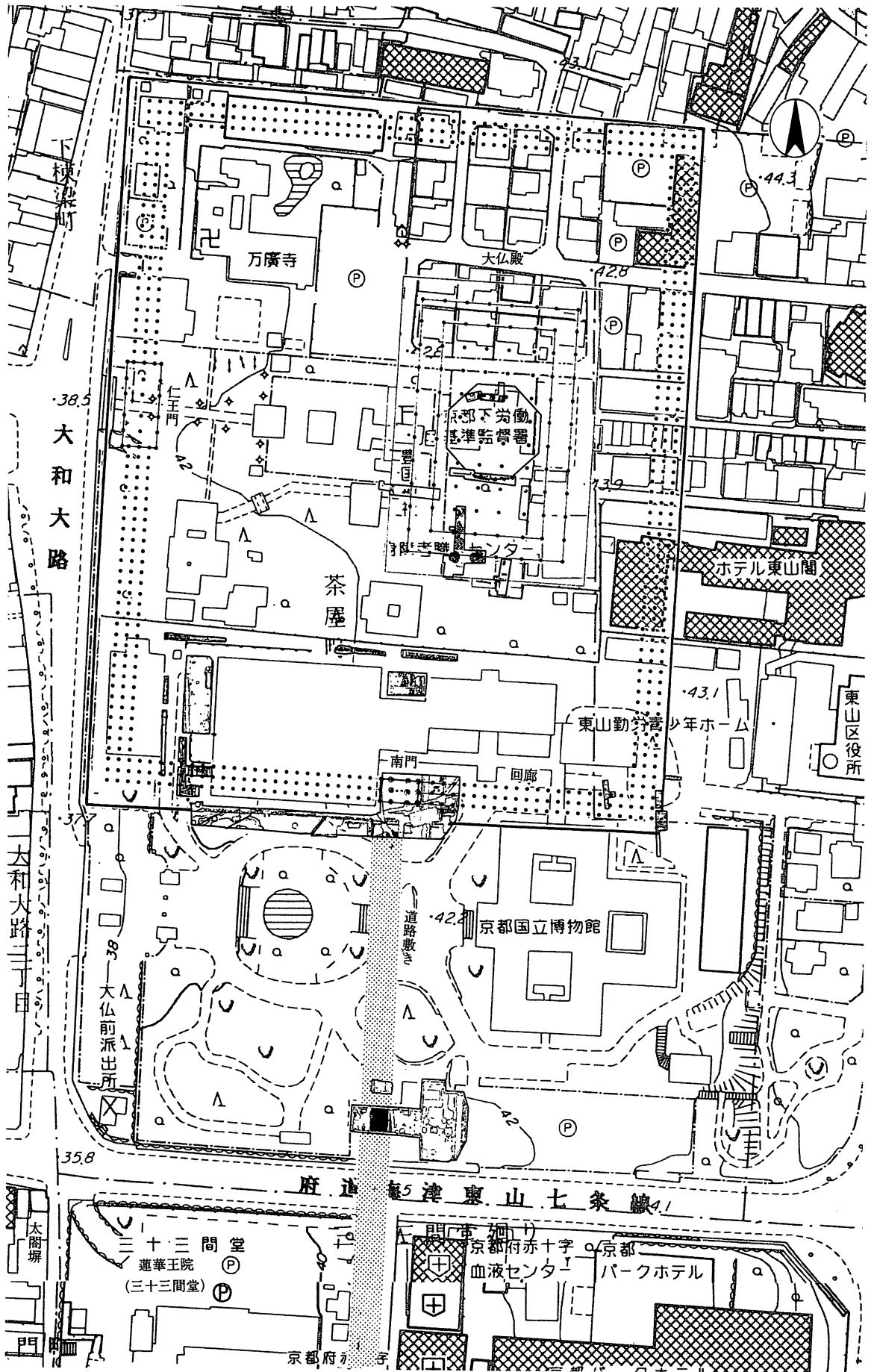


図35 方広寺寺域復元図 (1 : 2,000)



## IV 平安宮西院跡・聚楽遺跡

### 1 調査経過

#### (1) 調査経過

**調査に至る経過** 調査地は、京都市上京区下立売通千本東入中務町928番地であり、この地に個人住宅兼集合住宅の建築が申請された。当該地が平安宮跡及び聚楽遺跡の範囲に含まれるため、京都市埋蔵文化財調査センターは、2002年9月30日に調査対象地で2箇所のトレンチを設けて試掘調査を実施した。その結果、敷地北側の東西トレンチでは、中央部で地表下0.9mで固く締まった層と、東側で平安時代の瓦・土器を含む落込みを検出し、平安時代の遺構が良好に残存していると判断したため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査を委託し、実施することとなった。

今回の調査では、周辺の既往調査・試掘調査の成果に基づき、平安宮官衙の築地とそれに伴う内外溝を検出すると共に、周辺の調査と合せて当地の変遷を明らかにすることを目的とした。

**調査経過** 発掘調査では、2002年10月21日からハウス設置などの準備、10月23日・24日に機械掘削を行い、遺構調査を24日から開始した。調査区は、敷地南側に東西石組み水路があるため、それを避けて対象地北部に長方形（東西10m×南北16m）に設定した。

発掘調査は、江戸時代の遺構面（第1面、地表下約0.9m）まで機械掘削し、その後手掘りで行った。第1面の調査終了後、平安時代の遺構面（第2面、現地表下約1m）まで包含層を掘り下げ、築地などの遺構調査を実施した。各遺構面毎に平面実測図と写真記録を作成した。最後に断割により下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・断面実測などを行い、12月2日に調査を終了した。

#### (2) 遺跡の位置と環境

**地理的環境** 調査地周辺は、千本丸太町交差点の東側に位置し、周辺は木造家屋とコンクリートビルが混在した市街地である。当地域は、地理的には北から南に延びる丘陵地に立地し、緩やかに北から南に、西から東へ下がる傾斜地に位置する。調査地付近の標高は43.0mである。

**歴史的環境** 調査地周辺は、縄文時代から古墳時代の集落遺跡である聚楽遺跡の範囲に含まれる。周辺では竪穴住居・溝などの遺構が検出され、土師器・須恵器・石器などが出土した。

平安時代になると当地域には平安宮が造られる。平安宮の復元によると、調査地は平安宮南東官衙群の内、主水司を含む区画の西側中央部にあたる。この区画は、北を中御門大路延長（現榎木町通）、西を壬生大路延長（現美福通・旧智慧光院通）、南を春日小路延長（現北郁芳門通）、東を櫛笥小路延長（現西日暮通）に囲まれる。『陽明文庫』「宮城図」によると、区画の南側西寄りに南門があり、西半分が西院（予備の建物）、東半分北側が主水司（飲料水・粥などを管理する役所）、南側に醬司（醤油・味噌を管理する役所）が配される。

これらの官衙は平安時代後期から鎌倉時代頃には廃絶し、中世にはこの地域は「内野」と呼ばれる地域となっていた。当地域が再び開発されるのは江戸時代になってからで、慶長五年(1600)に「二条御城」の北側に京都所司代下屋敷が造られる。調査地はその敷地の東部にあたる。屋敷の跡地は、明治三年(1870)には京都監獄となったが、これが昭和六年に山科に移転し以降、当地域は町屋となり現在に至る。

### (3) 周辺の調査(図36)

調査地周辺で行われた、これまでの主要な発掘調査・試掘立会調査の概要を述べる。<sup>註1</sup>

西院内北西部の発掘調査(図36-1)では平安時代の礎敷き遺構と包含層を検出した〔1977年、文157-1〕。その東側の発掘調査(図36-2)では平安時代の遺構は無く、桃山時代の井戸・土壇などを検出した〔1977年、宮No.12〕。北西隅部の試掘調査(図36-3)では平安時代の土壇を検出した〔1984年、宮No.560〕。その東側の試掘調査(図36-4)では遺構・遺物を検出することはできなかった〔1982年、宮No.384〕。中央部の試掘調査(図36-5)でも遺構・遺物を検出することはできなかった〔1982年、宮No.326〕。東部の立会調査(図36-6)では平安時代の遺物包含層を検出した〔1990年、宮No.1128〕。主水司中央部の発掘調査(図36-7)では中世以降の土壇・小穴などを検出した〔1981年、宮No.235-5〕。北東部の試掘調査(図36-8)では南北築地状高まりを検出した〔1996年〕。<sup>註2</sup> 醬司東部の発掘調査(図36-9)では平安時代の東面築地内溝・土壇などを検出した〔1977年、宮No.5〕。南東部の発掘調査(図36-10)では平安時代前期の土壇群・整地層などを検出し、「醬」墨書土器が出土した〔1972・1973年〕。<sup>註3</sup>

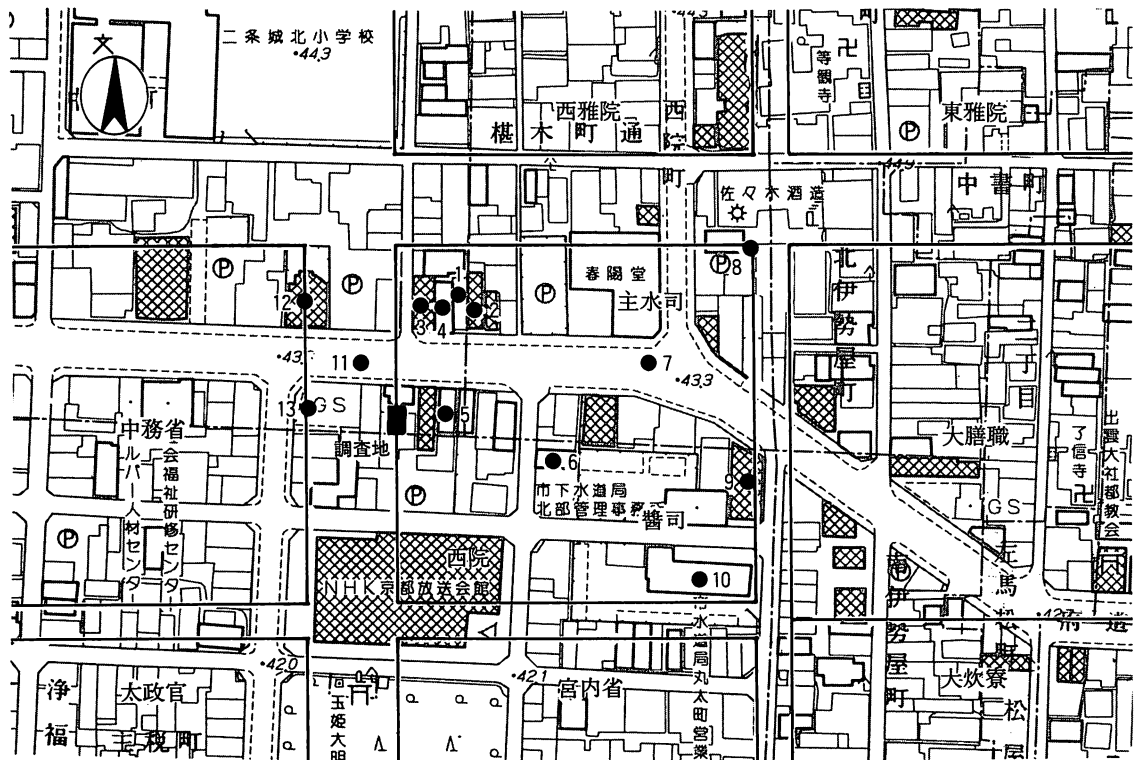


図36 調査地位置図(1:2,500)

周辺では、西院西側道路内の発掘調査（図36-11）では古墳時代の溝を検出した〔1981年、宮No.235-4〕。中務省東北側の発掘調査（図36-12）では平安時代の中務省東面築地・両側溝・土壙などを検出した〔1994年、宮No.1521〕。中務省東南側の試掘調査（図36-13）では平安時代の南北溝を検出した〔1990年、宮No.1177〕。

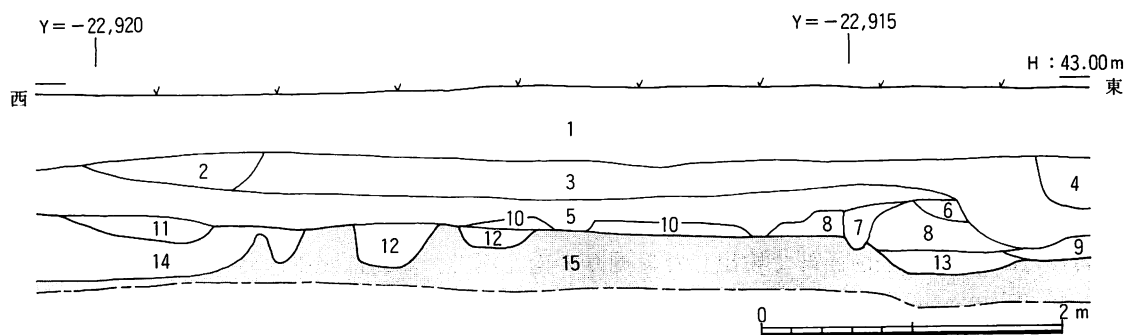
## 2 遺 構

### (1) 層 序 (図37、図版13-2)

層序 調査地は、場所によって堆積状況が異なるが、基本的層序は地表面から約0.5mまでが現代整地層（第1層）で、第2層は黄褐色砂泥が主体の土層（厚さ0.2m）、第3層は灰褐色砂泥が主体の土層（厚さ0.15m）で、いずれも江戸時代から近代の包含層である。その下層は第4層（無遺物層の地山）で、調査区北西部と南西部は褐色泥礫層、間には斜方向に黄褐色砂泥層（聚楽土）が堆積する。第4層上面には、中央部にのみにふい黄褐色砂泥の盛土層（厚さ0.1~0.2m）が部分的に残存する。

遺構の概要 調査は、第3層上面を第1面、第4層上面を第2面として、2段階に分けて調査を行った。第1面は江戸時代以降、第2面は平安時代の遺構を主体として古墳時代から江戸時代の遺構を検出した。第2面の検出高は北端の方が南端より0.1m高く、北側から南に若干傾斜する地形を呈している。第1面も同様に北側が高く南に傾斜する。第2面の標高は、調査区中央で42.1mである。

調査で検出した遺構は、第1面67基、第2面57基、総計124基である。時期は、古墳時代・平安時代・鎌倉時代から室町時代・江戸時代以降に分かれ、江戸時代以降の遺構が大半を占め、それ以前の遺構は少ない。なお、調査区南端部で近代から現代の東西石組み溝を検出したが、手掘



- |                  |                        |
|------------------|------------------------|
| 1. 暗褐色砂泥（第1層）    | 9. 灰黄褐色泥土              |
| 2. 黒褐色砂泥         | 10. にふい黄褐色砂泥（築地150基底部） |
| 3. にふい黄褐色砂泥（第2層） | 11. 黒褐色砂泥（溝70）         |
| 4. 灰黄褐色砂泥        | 12. 暗黄褐色砂泥             |
| 5. 黒褐色砂泥（第3層）    | 13. 灰黄褐色砂泥（溝100）       |
| 6. 灰黄褐色砂泥        | 14. 暗褐色砂泥（土壙124）       |
| 7. 黄褐色砂泥         | 15. 黄褐色砂泥（第4層：地山）      |
| 8. 褐色砂泥          |                        |

図37 調査地基本土層図（北壁中央部 1：50）

掘削が不可能のため第1面以下は掘り下げていない。

以下、各遺構面に分けて主要な遺構を報告する。なお、各遺構及び出土遺物の時期は、平安京・京都Ⅰ期～ⅩⅣ期編年案に準拠する。<sup>註4</sup>

### (2) 第1面の遺構(図38、図版12-1)

第1面で江戸時代以降の遺構を検出した。遺構には土壙・土取穴・井戸・柱穴等があり、全域に散在している。また、調査区内で部分的に黄色粘土の広がりを確認した。柱穴は全面で検出したが、まとまらず建物の復元には至っていない。柱穴の中には、底部に平坦な石を据えるものも見られる。

土壙7(図38) 調査区北西部で検出した土壙で、北側は攪乱を受ける。平面形は方形で底部は平坦、一辺1.8mで深さは約1mである。土取穴と推定できる。埋土は灰褐色砂泥で、棧瓦、土師器、陶器碗・壺・播鉢、磁器碗などが出土した。

土壙34(図38) 調査区南西部で検出した土壙で、南側は攪乱を受ける。平面形は東西4.5m・南北1.5m以上の不定形で、深さは0.26mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、拳大の礫を多く含む。瓦、土師器皿、陶器碗、焼塩壺などが出土した。

土壙60(図38) 調査区北西部で検出した土壙で、南側は攪乱を受ける。平面形は東西1.6m・南北1mの隅丸長方形で、深さは0.3mである。底部の北側と南側に木杭の痕跡が並び、護岸が廻っていたと推定できる。埋土は灰黄褐色砂泥で、瓦、土師器皿、陶器碗などが出土した。

土壙61(図38) 調査区北西部で検出した土壙で、北西部が攪乱を受ける。平面形は東西2m・南北1.1mの楕円形で、深さは0.2mである。埋土は灰褐色砂泥で、瓦、土師器皿・焙烙、陶器碗・播鉢・壺、磁器碗、焼塩壺などが出土した。

土壙63(図38) 調査区北東部で検出した土壙である。平面形は東西1m、南北1.7mの楕円形で、深さは0.4mである。底部で柱穴を検出した。埋土は灰黄褐色砂泥で、瓦、土師器皿、須恵器壺・甕、陶器碗などが出土した。

### (3) 第2面の遺構(図39、図版12-2)

第2面で古墳時代から江戸時代の遺構を検出した。遺構には土壙・溝・築地・柱穴等があり、全域に散在している。柱穴は東半部で検出したが、まとまらず建物の復元には至っていない。

溝70(図39) 調査区西部で検出した素掘りの南北溝で、北側は調査区外に延長し、南側は土壙34・98に攪乱される。断面形は浅いU字形で、幅1～1.7m・深さ0.2～0.3mである。埋土は暗褐色砂泥で、土師器碗・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・壺・鉢、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器蓋などが出土した。Ⅱ期中頃の遺構と推定できる。中心座標はX=-109256.4、Y=-22919.7である。

なお、溝70以西は、宮内道路の路面と推定できるが、舗装等は確認できなかった。

土壙80(図39) 調査区東半部で検出した土壙で、北西部は土壙90に攪乱され、南東部・南側は攪乱を受ける。平面形は東西約3.5m、南北14.2mの不定形で、深さは0.5mである。埋土は褐色砂泥である。瓦、土師器碗・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕・壺、緑釉陶器碗などが出土した。Ⅴ

期の遺構と推定できる。

土壙90 (図39) 調査区中央部から北部にかけて検出した土壙である。平面形は東西4.5m・南北9.5mの不定形で、深さは0.3~0.65mである。底部は凹凸があり、何度も掘り替えられたと推

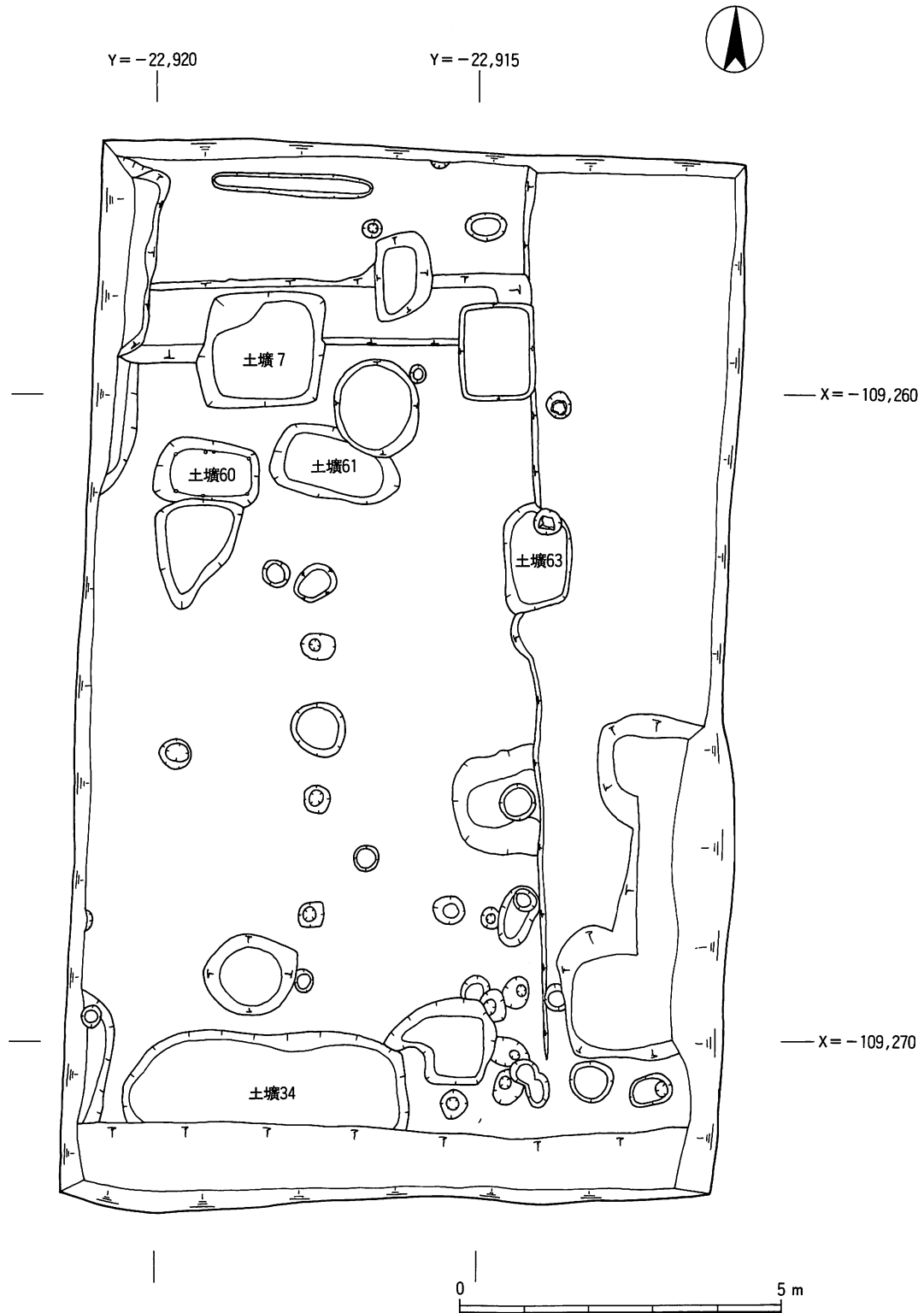


図38 第1面遺構平面図 (1 : 100)

定できる。埋土は2層あり、上層が褐色砂泥層で、瓦と礫を大量に含み土師器碗・皿、瓦器碗、須恵器鉢・甕、緑釉陶器壺、滑石製鍋などが出土した。下層は暗褐色砂泥で、瓦、土師器碗・皿、須恵器甕などが出土した。V～VI期の遺構と推定できる。

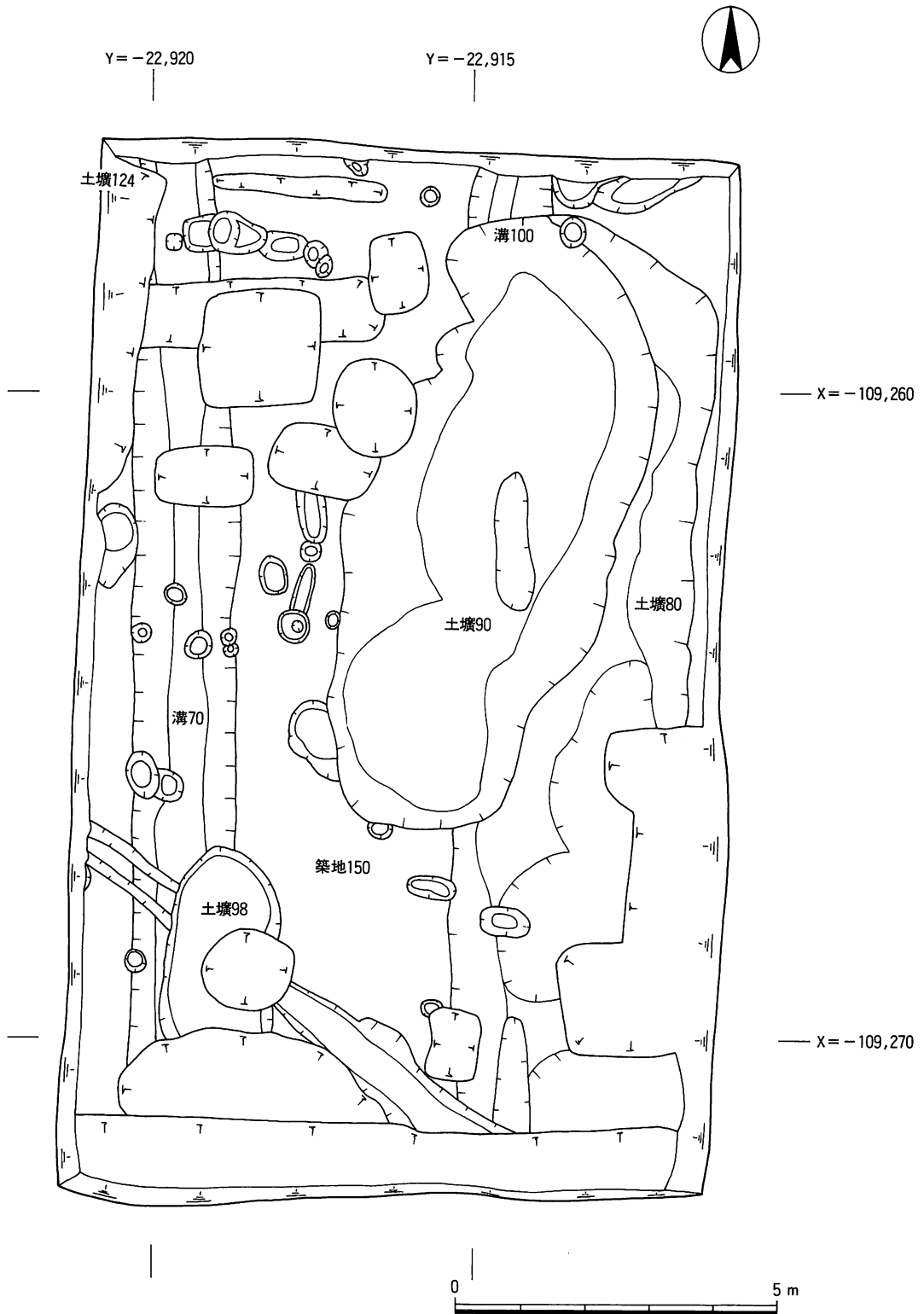


図39 第2面遺構平面図 (1:100)

土壙98 (図39) 調査区南西部で検出した土壙で、南側は攪乱を受ける。平面形は東西1.8m、南北3m以上の楕円形で、深さは0.15mである。埋土は灰褐色砂泥で、土師器碗・皿・鉢、白色土器高杯、須恵器杯・甕・円面硯などが出土した。Ⅳ期の遺構と推定できる。

溝100 (図39) 調査区東部で検出した素掘りの南北溝で、全体に土壙80・90によって攪乱され、北端部・中央部・南端部のみが残存する。断面形は浅いU字形で、幅1.05m・深さ0.25mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、瓦、土師器皿・甕、須恵器甕などが出土した。時期はⅡ期中である。なお、中心座標はX=-109,256.6、Y=-22,914.3である。

土壙124 (図39) 調査区北西部で検出した土壙で、北側・西側は調査区外に広がる。平面形は不明で、深さは0.5m以上である。埋土は暗褐色砂泥で、土師器甕などが出土した。時期は古墳時代後期である。

築地150 (図39、図版13-1) 溝70と溝100に挟まれた部分が南北築地と推定でき、調査区中央で検出した。南側と中央部東側が攪乱を受け、北側は調査区外に延長し、13.5m分検出した。溝70と溝100の肩部間の距離は4.45mである。上面は削平を受け、盛土基部しか残っていないため、築地本体の基底部幅や犬行の規模は不明である。盛土はにふい黄褐色砂泥層で、第4層(地山)上に積んでいる。高さ0.1~0.2m程度残る。掘込み地業は確認できない。盛土下面で円形土壙(径0.3m前後、深0.2~0.1m)を数基検出したが、整然と並ばない。盛土内からは遺物は出土していない。なお、溝70・溝100肩間の中心の座標はX=-109,256.4、Y=-22,917である。

### 3 遺物

#### (1) 遺物の概要

遺物は整理箱にして70箱出土した。種類には瓦類・土器類などがあり、大半が瓦類である。その他、凝灰岩片が若干出土している。時期別には、古墳時代から江戸時代のものがあるが、平安時代のものが大半を占め、他の時代に属する遺物は微量である。

以下、瓦類は時代別に主要軒瓦を報告し、土器類は主要な一括遺物を報告する。

#### (2) 瓦類 (図40・41、図版14・15)

概要 瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・鷗尾・埴・丸瓦・平瓦などがある。軒瓦は48点出土し、軒丸瓦11種11点・型式不明1点、軒平瓦26種26点・型式不明10点である。軒瓦の時期は、平安時代前期以前3点・中期9点・後期22点、平安時代9点、鎌倉時代1点、桃山時代2点、時期不明2点で、平安時代後期が最も多い。

平安時代の瓦類は、土壙90から大量に出土したほか、土壙98・113、第3層からも出土した。鎌倉時代の瓦類は土壙90・80から出土した。桃山時代の瓦類は第3層から出土した。

以下、時代別に主要な瓦を報告する。<sup>註5</sup>

平安時代前期以前 (図40-1~3) 前期以前の軒瓦は、軒丸瓦3種3点、鷗尾1片、緑釉丸瓦2片がある。出土遺構は土壙90(2・3及び緑釉鷗尾片・丸瓦片)・土壙113(1)である。

1は3重圈紋である。圈線は細く間隔は均等である。瓦当部裏面上部に丸瓦を接合する。瓦当

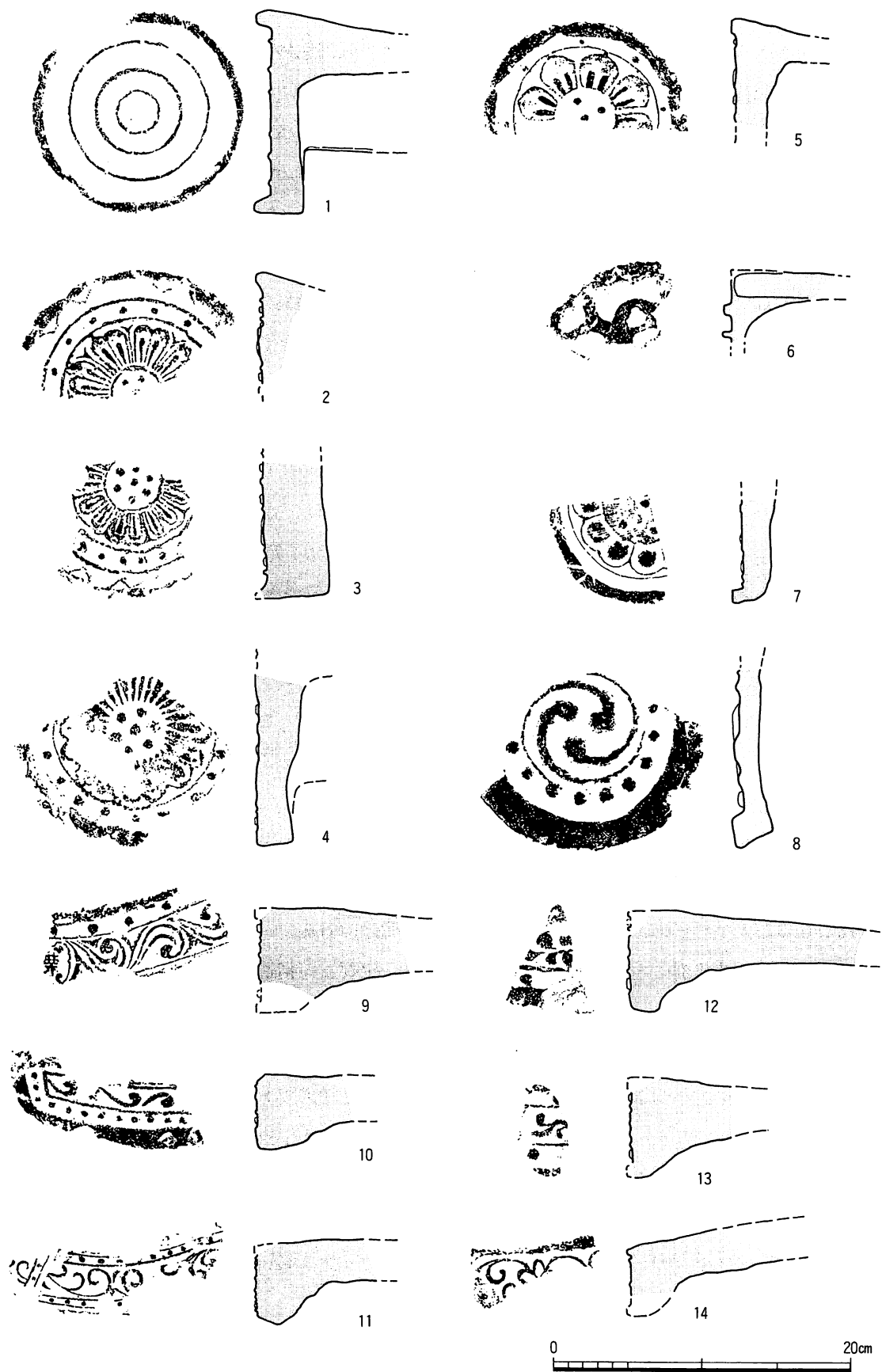
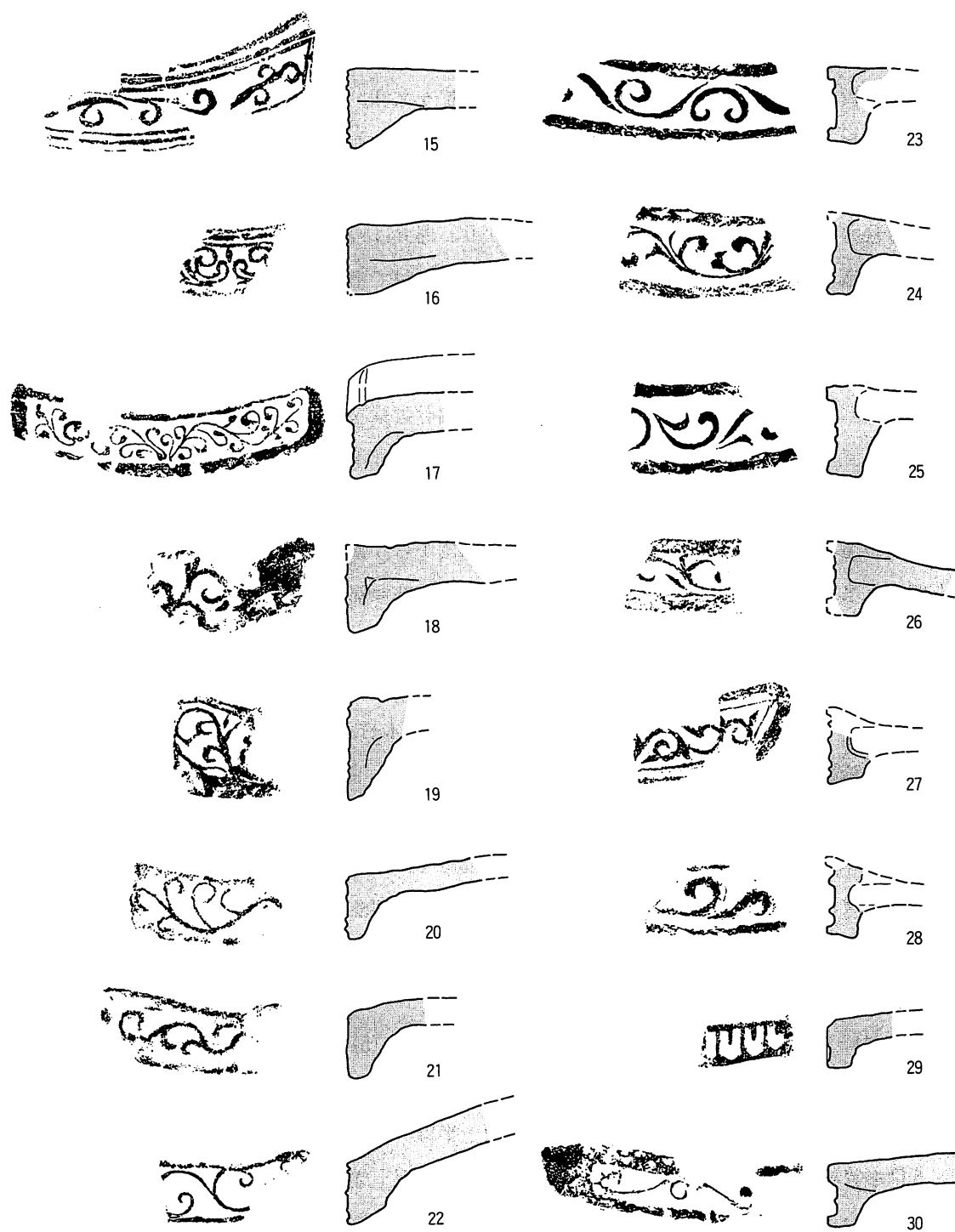


图40 出土軒瓦拓本·实测图(1:4)





0 20cm

图41 出土軒平瓦拓本·实测图 (1:4)

部側面横ナデ・裏面ナデ。難波宮6012型式と同範である。搬入瓦。2は複弁8弁蓮華紋である。中房は小さく、間弁はY字形である。傾斜縁で線鋸齒紋を配す。瓦当部側面上部縦ナデ。平城宮6308型式。搬入瓦。3は複弁8弁蓮華紋である。蓮弁は短く、間弁はY字形で連続する。傾斜縁で線鋸齒紋を配す。瓦当部側面下半横ナデ・裏面横ケズリ。平城宮6284型式。搬入瓦。

平安時代中期(図40-4・9~12・14) 中期の瓦は、軒丸瓦1種1点、軒平瓦8種8点である。出土遺構は土壙90(9~12・14)・土壙80(13)・第2面遺構検出中(4)である。

4は複弁4弁蓮華紋である。中房は盛り上がり、蓮弁は幅広く、間弁は撥形である。瓦当部成形は一本造りである。瓦当部側面下半横ナデ・裏面布目で下周縁は横ケズリである。栗栖野窯産。『平古』81と同範である。9は外向唐草紋である。中心飾りは対向C字形で栗銘を配し、唐草紋は両側に3転する。曲線顎。瓦当部凹面横ケズリ、顎部裏面ヨコナデ、平瓦凹面布目・凸面横ナデである。栗栖野窯出土軒瓦と同紋である。10は内行唐草紋である。唐草紋は両側から4転する。曲線顎。瓦当部成形は顎貼り付けである。瓦当部凹面端部横ケズリ、顎部凸面横ケズリ、平瓦凹面布目・凸面オサエ後ナデ・側面縦ケズリである。安井西裏窯・法勝寺下層出土軒瓦と同紋である。山城産。11は内行唐草紋である。唐草紋は両側から3転し、中心上下に小葉を配す。瓦当面左側に瓦当型右端部を2度押しする。曲線顎。瓦当部顎部凸面横ケズリ・裏面オサエ後ナデ、平瓦凹面布目・凸面ナデである。『木村』312・『平古』441と同範である。大和産か。12は外向唐草紋である。中心飾りは無く、唐草紋は両側に反転する。曲線顎。瓦当部・平瓦凹面布目、顎部凸面横ケズリ・裏面オサエ、平瓦凸面ケズリである。『木村』228と同紋である。森ヶ東窯産。13は外向唐草紋である。唐草紋は中心から両側に反転する。曲線顎。瓦当部凹面布目である。『木村』230と同紋である。森ヶ東窯産。14は内行唐草紋である。唐草紋は両側から展開し、中心で組み合う。曲線顎。瓦当部凹面端部横ケズリ、顎部裏面オサエ後ナデ、平瓦凹面布目・凸面ナデ・側面縦ケズリである。森ヶ東窯・安井西裏窯出土軒瓦と同紋である。

平安時代後期(図40-5~7・図41-15~28) 後期の瓦は軒丸瓦6種6点、軒平瓦16種16点、及び丸瓦・平瓦がある。出土遺構は土壙90(5~7・16・17・20~23・25~27)・土壙98(19)・溝69(24)・第3層(28)・第2面検出中(18)・柱穴36(15)である。

5は複弁蓮華紋である。中房は大きく、蓮弁は宝珠形で幅広い。瓦当部裏面上部に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合。瓦当部側面上半縦ケズリ・裏面ナデ。産地不明。和泉産か。

6は形象紋であるが、詳細は不明である。瓦当部裏面上端に溝を付け丸瓦を挿入し、粘土を付加して接合。瓦当部・裏面ナデ。産地不明。7は複弁蓮華紋である。中房は大きく、蓮弁は幅広く互いに接する。瓦当部側面下半横ナデ・裏面押さえ。播磨神出窯・魚橋窯・三本松窯出土瓦と同紋。播磨産。15は外向唐草紋である。中心飾りは無く、唐草紋は両側に5転する。曲線顎。瓦当部成形は顎貼り付けである。瓦当部・平瓦凹面布目、顎部裏面オサエ、平瓦縦ナデである。産地不明。『平古』440と同範である。16は外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で、唐草紋は両側に展開する。曲線顎。瓦当部成形は顎貼り付けである。瓦当部凹面横ケズリ・顎部凸面・裏面ナデ、平瓦凹面布目、凸面格子叩きである。『平古』501と同紋である。興福寺出土瓦と同紋。

大和産。17は外向唐草紋である。中心飾りは唐草紋で、唐草紋は両側に展開する。段顎。瓦当部成形は半折曲技法である。瓦当部凹面横ケズリ・顎部凸面横ケズリ・裏面オサエ後ナデ、平瓦凹面布目、凸面ナデ、側面縦ケズリである。平瓦凸面にヘラ記号有り。『木村』142と同範である。南ノ庄田窯産。18は右偏行唐草紋である。主葉は大きく反転する。曲線顎。瓦当部成形は半折曲技法である。顎部凸面横ナデ・裏面オサエ、平瓦凹面布目、凸面ナデである。『平古』462と同紋である。山城産。19は内行唐草紋である。唐草紋は両側から展開し、中心上下に小葉を配す。曲線顎。瓦当部成形は半折曲技法である。瓦当部凹面横ケズリ、顎部凸面横ケズリ・裏面オサエ、平瓦凹面布目、凸面ナデである。『木村』216・696と同紋である。小野窯産。20は外向唐草紋である。唐草紋は両側に展開する。曲線顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部・平瓦凹面布目・顎部凸面横ナデ・裏面オサエ後ナデ、平瓦凸面ナデである。21は外向唐草紋である。唐草紋は両側に展開する。曲線顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部・平瓦凹面布目・顎部凸面横ナデ・裏面オサエである。22は左偏行唐草紋である。主葉は大きく反転する。曲線顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部・平瓦凹面布目・顎部凸面横ナデ・裏面オサエで曲げ皺が残る。23は外向唐草紋である。中心飾りは下向C字形で、唐草紋は両側に展開する。段顎。瓦当部成形は包み込み技法である。瓦当部・平瓦凹面縦ナデ・顎部凸面・裏面横ナデである。魚橋窯出土軒瓦と同紋である。播磨産。24は外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で中心に子葉を配す。唐草紋は両側に2転する。段顎。瓦当部成形は包み込み技法である。瓦当部・平瓦凹面・顎部凸面・裏面横ナデである。林崎三本松窯出土軒瓦と同範である。播磨産。25は外向唐草紋である。中心飾りは無く、唐草紋は両側に展開する。段顎。瓦当部成形は包み込み技法である。瓦当部凹面・顎部凸面・裏面横ナデである。神出窯・林崎三本松窯出土軒瓦と同紋である。播磨産。26は外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で中心に紡錘形を配す。唐草紋は両側に2転する。段顎。瓦当部成形は包み込み技法である。瓦当部凹面・顎部凸面・裏面横ナデ、平瓦凹面布目・凸面平行叩きである。林崎三本松窯出土軒瓦と同範である。播磨産。27は外向唐草紋である。唐草紋は両側に展開する。段顎。瓦当部成形は包み込み技法である。顎部凸面・裏面横ナデである。林崎三本松窯出土軒瓦と同範である。播磨産。28は外向唐草紋である。唐草紋は両側に展開する。段顎。瓦当部成形は包み込み技法である。顎部凸面・裏面横ナデである。播磨産。

鎌倉時代（図41-29） 鎌倉時代の瓦は、軒平瓦1種1点がある。出土遺構は土壇90である。

29は剣頭紋である。紋様は陰刻で幅は狭い。段顎。瓦当部成形は折曲技法である。瓦当部凹面端部横ケズリ、顎部凸面横ナデ・裏面オサエで曲げ皺が残る、平瓦凹面布目・凸面ナデである。顎部に凹型調整台の痕跡有り。大覚寺御所出土軒瓦と同紋。山城産。

桃山時代（図40-8・図41-30） 桃山時代の瓦は軒丸瓦1種1点、軒平瓦1種1点、及び丸瓦・平瓦・道具瓦がある。出土遺構は第1面検出中（8）・第3層（30）である。8は右巻き三巴紋である。頭部は丸く、尾はやや長く離れる。瓦当部側面下半横ナデ・裏面ナデ。紋様・周縁上面に漆を刷毛で塗り、一部金箔が残る。30は外向唐草紋である。中心飾りは珠紋で、唐草紋は両側に2転する。段顎。瓦当部成形は顎貼り付け技法である。瓦当部・平瓦凹面横ナデ、顎部凸面・

裏面横ナデ、平瓦凸面縦ナデである。

(3) 土器類 (図42、図版16)

概要 古墳時代の土器類は、土壙124から少量出土した他は、全て新しい時代の遺構に混入して出土した。いずれも細片である。器種には土師器甕・須恵器杯等がある。

平安時代の土器類は築地両側溝 (溝70) からまとまって出土した他、新しい時代の遺構に混入して出土した。器種には土師器 (椀・皿・蓋・高杯)・須恵器 (杯・蓋・甕)・白色土器 (高杯)・緑釉陶器 (椀・皿)・灰釉陶器 (椀・皿・蓋)・白磁 (椀) などがある。

鎌倉時代の土器類は土壙90・80から、桃山時代以降の土器類は第2・3層、柱穴・土壙などから出土した。器種には、土師器 (皿)・瓦器 (椀)・施釉陶器 (椀・皿・壺)・焼締陶器 (播鉢・甕)・磁器 (椀) などがある。以下、まとまって出土した溝70の土器類を報告する。

溝70 (図42-31~45) 土師器椀・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋・鉢・甕、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器蓋などが出土した。

土師器椀 (31・32) は、口縁部がやや外反し端部が若干肥厚する。底部外面はオサエ・内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。土師器皿は、口縁部が外反し端部を丸く収めるもの (33) と、端部が若干肥厚するもの (34) がある。いずれも底部外面はオサエ・内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデである。須恵器杯は口縁部が外反気味のもの (36) と、内弯気味のもの (37) がある。いずれも口縁部内外面回転ナデである。須恵器鉢 (28・29) は、体部が直線的に開き口縁端部は外方へ拡張する。底部外面は糸切り、体部・口縁部内外面回転ナデである。須恵器蓋は天井部が平坦で口縁部は屈曲し端部は垂下するもの (40) と、天井部がなだらかに下がるもの (41)

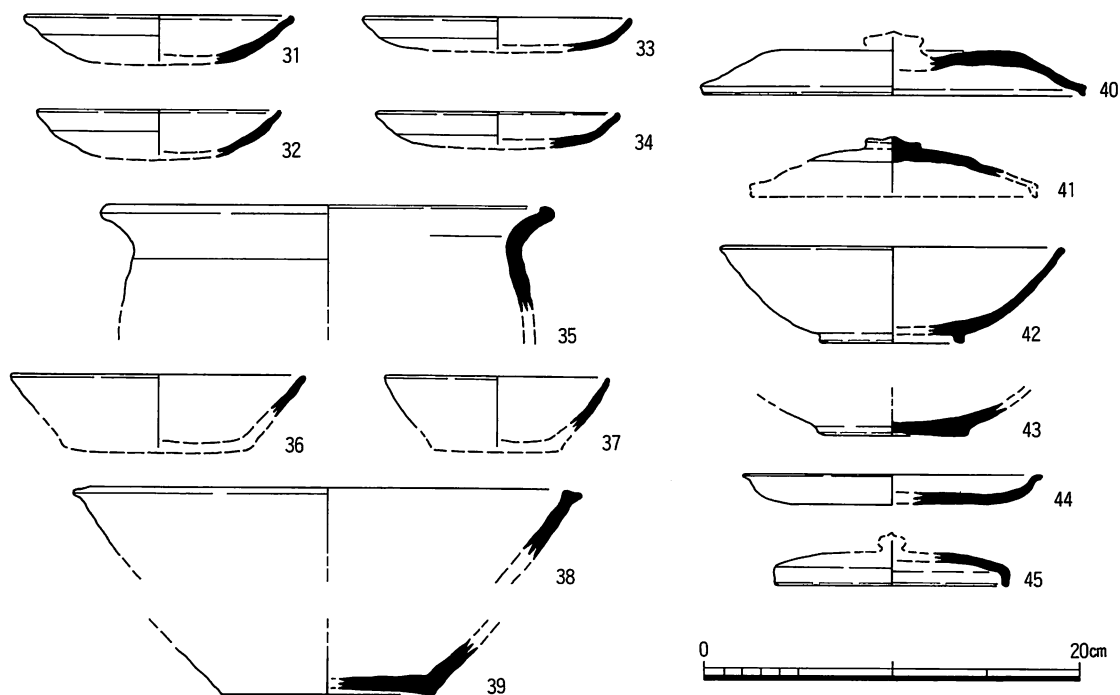


図42 出土土器実測図 (1 : 4)

がある。41は宝珠つまみが付く。天井部外面回転ケズリ、つまみ部・天井部内面・口縁部内外面回転ナデである。緑釉陶器椀(42・43)は、体部が内弯気味に開き口縁部端部は肥厚する。底部は貼り付け輪高台のもの(42)と平高台のもの(43)がある。底部・体部・口縁部内外面はヨコナデで、内外面に密なヘラミガキを施す。42はうぐいす色釉を厚く全面に施し、43は黄灰色釉を薄く全面に施す。緑釉陶器皿(44)は、体部が内弯し口縁部端部は外方へ拡張する。底部・体部・口縁部内外面はヨコナデで、内外面に密なヘラミガキを施す。全面に緑灰色釉を厚く施す。42・44は東海産、43は山城産。灰釉陶器蓋は天井部が平坦で口縁部はなだらかに下がり端部は垂下する。天井部・口縁部内外面回転ナデである。天井部外面に緑灰色釉を薄く施す。

## 4 まとめ

### (1) 遺跡の変遷

今回の調査では、平安時代の遺構を中心として多数の遺構が検出でき、良好な遺物が出土し、調査地周辺の歴史の変遷を明らかにすることができた。ここでは、周辺の調査成果なども含め、各時期ごとに変遷をまとめておく。

古墳時代 調査で検出した最も古い遺構は古墳時代の土壌であるが、これに関連する他の遺構や包含層は検出できなかった。調査地周辺でのこれまでの発掘・立会調査では、当該期の土壌(宮No.1223・119)・溝(宮No.81・235-4)・竪穴住居(宮No.1067・235-2)などの遺構が検出されており、この辺りに集落が営まれていたことが窺える。本調査区内では平安宮造営時の大規模な造成事業によって、上面が削平され下部が残存したと推定できよう。

平安時代前期 平安時代の初頭には平安宮が造営され、調査地に西院西面築地が造られる。築地の基底部には土器等は含まれておらず、設定時期は明らかではない。築地の東西両溝からは土器類が出土し、内溝(溝100)は外溝(溝70、宮内南北道路東側溝)と共に平安前期II期頃に、埋没していることが明らかとなった。

これまで明らかとなっている主要な築地側溝の埋没時期は以下の通りである。官衙内内溝では、中務省東面築地内溝〔宮No.1521〕が平安時代前期前半、中務省西面築地内溝〔宮No.1268〕がI期中、太政官西面築地内溝〔宮No.33〕は下層がI期新・上層がII期古、民部省南面・西面築地〔宮No.471〕はII期古、主水司東面築地内溝〔宮No.5〕が平安時代前期に埋没している。このように、官衙内の内溝は造営以後かなり早い時期、少なくとも9世紀前半代には埋没したことが分かる。このことは、内溝を造ったものの水路としての必要はなかった状況が窺え、溝を早い時期に埋め戻して内部を整備したと推定できよう。

外溝(道路側溝)では、中務省西面築地外溝〔宮No.1268〕がI期中、中務省西面築地外溝〔宮No.1507〕がI期中、太政官北面築地外溝〔宮No.33〕がI期、造酒司南面築地外溝〔宮No.3・4・6〕は下層がI期中・上層が平安時代後期、内匠寮東面築地外溝〔宮No.995〕は平安時代後期に埋没している。中務省東面築地外溝〔宮No.1521〕は新旧2時期あり、旧溝は平安時代前期・新溝は平安時代中期に埋没する。このように、外溝の埋没時期は、内溝と同じく9世紀前半代に埋没

したもの、中期・後期まで継続して使われたもの、埋没した後に造り替えられた例も知られる。外溝は宮内道路の側溝として使われ、宮内の雨水の排出機能を兼ね備えたものであり、京内道路と同様に官司による管理が行われたと推測できる。ただ、場所によってはメンテナンスが行きとどかず、早い段階で埋没したものも多い。

平安時代後期 今回の調査では平安時代後期の遺構は検出していないが、平安時代後期の軒瓦・丸瓦・平瓦が多量に出土した。出土瓦は、丸瓦・平瓦に比べ軒瓦の量が少ないことから、西院内の建物に使用され、廃絶した後に土壙80・90に投棄されたと推定できる。瓦の産地は山城・播磨・大和のものがあり、播磨産が半数を占める。時期は12世紀前半～後半である。西院は安元三年（1177）の大火（太郎焼亡）を受けていないことから、前代から存続していた建物をその都度修理していた、又は当該期に建てられたと推定できよう。

平安宮内で平安時代後期の遺構がこれまで検出されている地域は以下の通りである。大極殿院地区で整地層〔宮No.1539・1546・489・646〕、朝堂院地区で包含層〔宮No.174・1486〕・瓦溜〔宮No.129〕・土壙・柱穴〔宮No.174〕、応天門周辺で土壙・包含層・集石遺構〔宮No.113〕、内裏地区で回廊側溝〔宮No.116〕・土壙〔宮No.581〕・礎石建物〔宮No.14〕・整地層〔宮No.851〕、内裏西周辺で土壙〔宮No.939〕、中和院で包含層〔宮No.705〕、真言院で包含層〔宮No.617〕、内蔵寮で包含層〔宮No.702〕、中務省で瓦溜〔宮No.1029〕・建物〔宮No.37〕・側溝〔宮No.1067〕・溝〔宮No.1136〕・土壙〔宮No.759〕、太政官で瓦溜〔宮No.33〕・土壙〔宮No.78〕・溝、民部省で包含層〔宮No.699〕、内酒殿で路面・溝、大膳職で土壙〔宮No.761〕・落込み〔宮No.668〕・整地層〔宮No.692〕、正親司西限で溝〔宮No.31〕、右兵衛府で柱穴〔宮No.626〕、造酒司で南築地・側溝〔宮No.215・16〕、御井で瓦敷き遺構〔宮No.69〕、右馬寮で土壙〔宮No.429〕、弾正台で土壙〔宮No.498〕を検出した。

また、平安時代後期（11世紀末～12世紀）の瓦が出土した地点は、以下の通りである。大極殿院北東隅3点〔文278〕、大極殿西側回廊33点〔文154〕、大極殿東回廊5点〔文208〕、大極殿院1点〔宮No.936〕、小安殿3点〔宮No.32・文147-3〕、東面回廊1点〔宮No.936〕、龍尾壇付近15点〔文218〕、顕章堂1点〔宮No.855〕、永寧堂1点〔文157-2〕、康樂堂1点〔宮No.21〕、会昌門西側20点〔文147-1〕、朝堂院南西側6点、内裏内郭廻廊7点〔文109・148〕・3点〔宮No.1490〕、内裏2点〔宮No.14〕・2点〔宮No.857〕、内裏西側3点〔宮No.884〕・8点〔宮No.939〕・3点〔宮No.354〕、中和院1点〔文131-2〕・3点〔宮No.354〕、真言院8点〔文147-4〕・1点〔宮No.617〕、中務省1点〔宮No.750〕・1点〔宮No.1082〕・1点〔宮No.1029〕・1点〔宮No.1177〕・2点〔宮No.1223〕、太政官2点〔文132〕・3点〔文170〕・4点〔宮No.33〕・5点〔宮No.156〕・5点<sup>註9</sup>、民部省7点〔文149〕、内酒殿<sup>註10</sup>99点、西雅院1点〔宮No.8〕・1点〔宮No.171〕、西院2点〔文157-1〕、大膳職東辺3点〔文157-7〕、漆室<sup>註11</sup>23点、右近衛府西辺5点〔宮No.1151〕、造酒司2点〔宮No.3・4〕、南辺1点〔文131-4〕・南辺6点〔文203〕二条大路北側溝<sup>註12</sup>13点<sup>註13</sup>・37点で出土した。

以上のことから、宮域中心部では大極殿地域・朝堂院地域・応天門周辺、内裏地域では内裏から中和院地域・真言院地域、南東官衙群では中務省・太政官・民部省・西雅院・西院・大膳職、西部官衙群では漆室・造酒司・御井、宮域周囲では南限（式町・弾正台の南側）・東限（大膳職・

大炊寮の東側)・西限(右近衛府・右兵衛府・馬寮の西側)などで、既存施設の整備・修造、又は当該期に新たな造営や整地などが行われたことが確認できた。

史料によると、当該期には平安宮内の施設は荒廃していたが、保元二年(1157)に藤原信西(通憲)による修造・再建が行われたことが知られる〔『兵範記』・『二條院御即位記』・『保元三年番記録』〕。この際には「大極殿。小安殿。八省院。諸門回廊。青龍白虎楼并朱雀門。皆以修造。大極殿鴟尾。会昌門外東西瓦垣。任舊跡被修築。」とあり、これらの諸施設の修造が行われたと記されており、これを裏付けている。また、この記載以外に内裏地区・南東官衙地区などの建物の修造、さらに南面・東面・西面の垣の修築が行われたことが推測できる。

鎌倉時代以降 調査区で検出した築地上面及び東側は土壌90・98などによって削平を受け、東側では大規模な土壌が数回に渡って掘削され、鎌倉時代に最終的に瓦・礫等を入れて埋められる。築地はその時点までに廃絶したと推定できる。出土瓦も鎌倉時代以降の瓦は1点だけであり、鎌倉時代には建物や築地も廃絶していた可能性が高い。

平安宮内で鎌倉時代以降の遺構がこれまで検出されている地域は、中務省で鎌倉時代の包含層〔宮No.455〕、右馬寮で鎌倉時代土壌〔宮No.429〕、御井で平安時代後期～鎌倉時代の瓦敷き遺構〔宮No.69〕である。また、鎌倉時代の瓦が出土した地点は、西院1点〔本調査〕・二条大路北側溝2<sup>註14</sup>点だけである。以上のことから、鎌倉時代以降の整備又は造営が確認できる場所は中務省など極わずかであり、現状では広範囲にわたる官衙での整備や瓦の補修などは行われていないことがわかる。

一方史料によると、内裏は承久元年(1219)に焼亡して安貞元年(1227)再建中に焼亡、神祇官は安元三年(1177)太郎焼亡の後に再建され、寿永元年(1182)に儀式が営まれている。右近衛府は健保五年(1217)、左近衛府・左兵衛府は承久二年(1220)、外記庁等は文永三年(1266)、民部省文庫は嘉禄二年(1226)までは存続していた。宮大垣は修造機関(修理左右宮城使)の活動から鎌倉時代中期まで存続していた。さらに、太政官庁・神祇官庁・真言院は室町時代まで存続したと推定されている。<sup>註15</sup>ところが検出された遺構の状況と出土瓦の様相からは、宮内の官衙が存続しているかどうかは疑問とせざるを得ない。特に、太政官・真言院などでは数十回の調査が実施されており、遺構は削平されていたとしても、瓦の補修が全く行われていないとは考えがたい。いずれにしても、鎌倉時代から室町時代の遺構の検出例は少なく、鎌倉時代以降の内野の利用状況については、不明な点が多い。

江戸時代以降 江戸時代からは遺構の数が増大し、これ以降かなりの密度で構築物が造られている。特にゴミ捨て穴と考えられる土壌や、柱穴が多い。この状況は、周辺調査で見られる様子と同様であり、当該期には所司代屋敷が営まれていたと推定できる。

## (2) 検出遺構について

西院西面築地について 今回の調査では、調査区中央部で南北方向築地の基底部を検出した。築地上面及び東側は削平を受けているため、基底幅・犬行などの造営時の正確な数値は不明な点が多い。両側溝幅は各約1.0m(3.5尺)で、両溝肩口間が4.5m(15尺)である。『延喜式』の規

格では十丈大路の場合「自垣半至溝邊。各八尺（約2.4m）、垣基三尺（約0.9m）、犬行五尺（約1.5m）、溝廣各四尺（約1.2m）」、四丈小路の場合「自垣半至溝邊。各五尺五寸（約1.65m）、垣基二尺五寸（約0.75m）、犬行三尺（約0.9m）、溝廣各三尺（約0.9m）」とある。これを参考にすると、今回検出した築地の数値は大路規模よりやや小さいが、ほぼ大路規模で造られていたことが明らかとなった。築地基底幅を大路規模（6尺）と推定すると、犬行幅四尺五寸、溝幅三尺五寸と復元できる。

これまで宮内官衙で周囲築地関連遺構が発見された主要な例を挙げておく。太政官西面築地は、築地と両側溝を検出し、内溝幅2.1m・深0.6m、外溝幅1.4～2.2m・深0.6mで、内外溝間は4.2～4.5mである〔宮No33〕。太政官北面築地は、築地・外溝・路面を検出し、外溝幅0.9m・深0.2mで、築地北半幅推定2.1mである〔宮No937〕。中務省西面築地は、築地と両側溝を検出し、築地基底幅が2.1m、両犬行が0.8m、内溝幅1.7m以上・深0.7m、外溝幅1.5m・深0.7mである〔宮No1268〕。中務省東面築地では、築地と両側溝を検出し、内溝幅2.9m・深0.4m、外溝幅1.1m・深0.15mで、内外溝肩口間3.6mである〔宮No1521〕。民部省南面築地では築地基底部・外溝を検出し、築地基底幅3m、犬行0.9m、外溝幅3m・深0.15mである〔文149〕。民部省南面・西面築地では築地基底部・外溝を検出し、築地基底幅4.2m、犬行0.9m、西内溝幅1.4m・深0.4m、南内溝幅3.4m・深0.4m、西外溝幅2.0～2.6mである〔宮No471〕。

今回検出した築地はこれらとほぼ同様の規模を呈し、築地は基本的に大路規模で造られていることが明らかとなった。

西院・主水司・醬司の区画について（図43）今回検出した西面築地（築地150）の中心を溝70・溝100肩部間の中心とすると、座標は $X = -109, 256.4$ 、 $Y = -22, 917$ となる。この位置は、壬生大路東築地延長上の座標 $X = -109, 264.38$ 、 $Y = -22, 917.54$ とほぼ一致する。さらに、中務省東側築地〔宮No1521〕の中心座標は $X = 109, 216$ ・ $Y = 22, 947.5$ であり、この位置は、壬生大路西築地延長上に相当する。また、両築地間の距離は約30.5mとなる。このことから、美福門から北側に延びる平安宮南西官衙中心の宮内道路は、平安京の壬生大路の延長上に計画され、大路規模で造られていたことが明らかとなった。

醬司東面築地では内溝（SX1）を検出しており〔宮No.5〕、この溝の約2.5m東に東面築地心が想定されており、この位置と西面築地（築地150）との距離は約120m（四十丈）となる。『據諸図所考定宮城図』によると、この区画は方四十丈（約120m）とあり、この記述を裏付けている。

#### 引用・参考文献

註1 平安宮内の調査については、京都市埋蔵文化財研究所編『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊、（同研究所、1995年）を参考にした。調査地番号は〔宮No.〕、文献番号は〔文〕と表す。



註2 梶川敏夫「平安宮主水司跡」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成8年度（京都市文化市民局 1997年）

註3 山田和邦「平安宮主水司・醫院跡出土の土器・陶器」『平安京出土土器の研究』古代學研究所研究報告第4輯（古代學協會 1994年）。

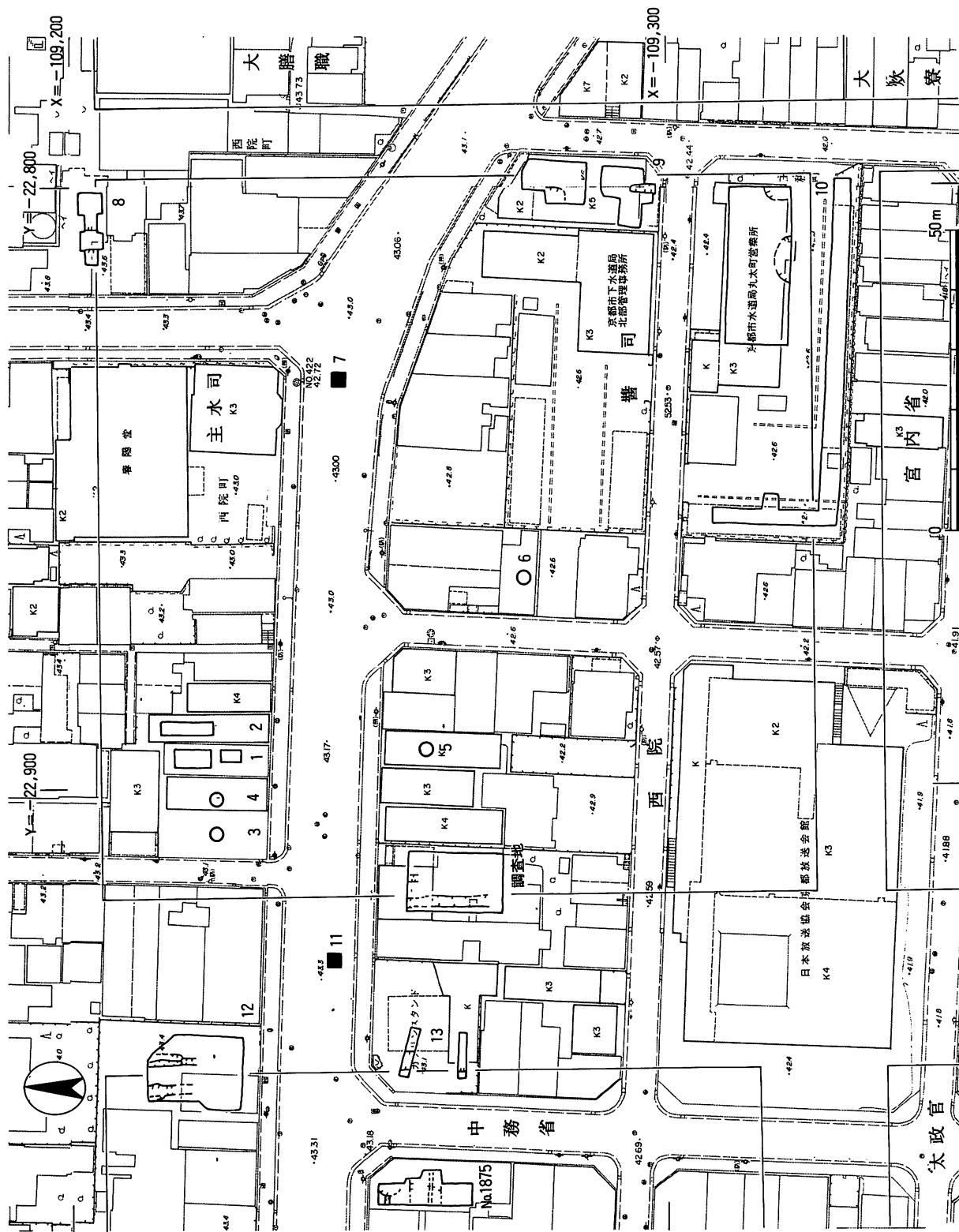


図43 西院・主水司・醫院遺構配置図（1：1,000）

- 註4 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（京都市埋蔵文化財研究所、1996年）。
- 註5 瓦類の類例は奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会埋蔵文化財センター編『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』（奈良国立文化財研究所 1996年）・平安博物館編『平安京古瓦図録』（雄山閣 1977年）・京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』（京都市埋蔵文化財研究所 1996年）などを参考にした。また『平安京古瓦図録』は『平古』、『木村捷三郎収集瓦図録』は『木村』と略し、図版番号を付した。
- 註6 近藤章子「平安宮太政官跡」『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度（京都市文化市民局、1999年）。
- 註7 辻 裕司・丸川義広・大立目一「平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（京都市埋蔵文化財研究所、1997年）。
- 註8 小檜山一良・小松武彦・平田泰・長戸満男「平安宮左馬寮一朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（京都市埋蔵文化財研究所、1999年）。
- 註9 吉本健吾「平安宮太政官跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』（京都市埋蔵文化財研究所 1997年）。
- 註10 註8と同じ。
- 註11 長戸満男「平安宮正親司・漆室跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（京都市埋蔵文化財研究所、2000年）。
- 註12 平良泰久・石井清司・杉本宏・常磐井智行「平安京跡（二条大路）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1980第3分冊（京都府教育委員会、1980年）。
- 註13 福島考行・引原茂治「平安京跡二条大路発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第91冊』（京都府埋蔵文化財調査研究センター、2000年）。
- 註14 註13と同じ。
- 註15 山田邦和「中世都市京都の成立－工人町の発達と中世都市－」『古代都市の構造と展開』古代都城制研究集会第3回報告集（奈良国立文化財研究所 1998年）。

## V 栢ノ杜遺跡

### 1 調査経過

栢ノ杜遺跡は、京都市伏見区醍醐柏森町、醍醐南端山に所在している。醍醐寺旧境内では、南西角近くに位置しており、1973年度に実施された発掘調査の成果によって、現在は醍醐寺境内「栢杜遺跡<sup>註1</sup>」として国の史跡に指定されている。

しかし、史跡に指定された範囲は1973年度の調査で発見された八角円堂・方形堂（丈六堂）及びそれらに伴う園池跡を中心とした限定されたものであった<sup>註2</sup>。その後史跡隣接地において試掘調査等の小規模調査が行われたが、文献史料から知られている三重塔はまだ未確認であり、その他に想定できる施設や寺域の範囲等も明らかではなく、遺跡の全体像を知るには至っていなかった。このため昨年度から、遺跡の未知の部分把握するために、未調査区において遺跡の遺存状況並びに範囲を確認するための発掘調査を行うこととなった。

2001年度に実施した発掘調査<sup>註4</sup>では、史跡の南西隣接地において、寺院の基盤になると見られる整地土層と、その上面から成立している平安時代末期から鎌倉時代の土壌等の遺構、および寺域西限と言える整地土層西端の段差部を、3箇所の調査区において南北ライン状に検出し、遺跡南西部域の様相の一端を把握することができた。

今年度は、昨年度の調査成果とその成果を加えて作成した遺跡復元図（試案）を踏まえて、推定寺域内で未調査区として残る北西部域と南東部域を対象として遺跡確認調査を実施することとなった。北西部域では、寺域の西端および西限部の遺跡の様相を把握すること、南東部域では、三重塔跡を含めた寺院内部施設の存在の有無を明らかにすることが、具体的な調査課題である。

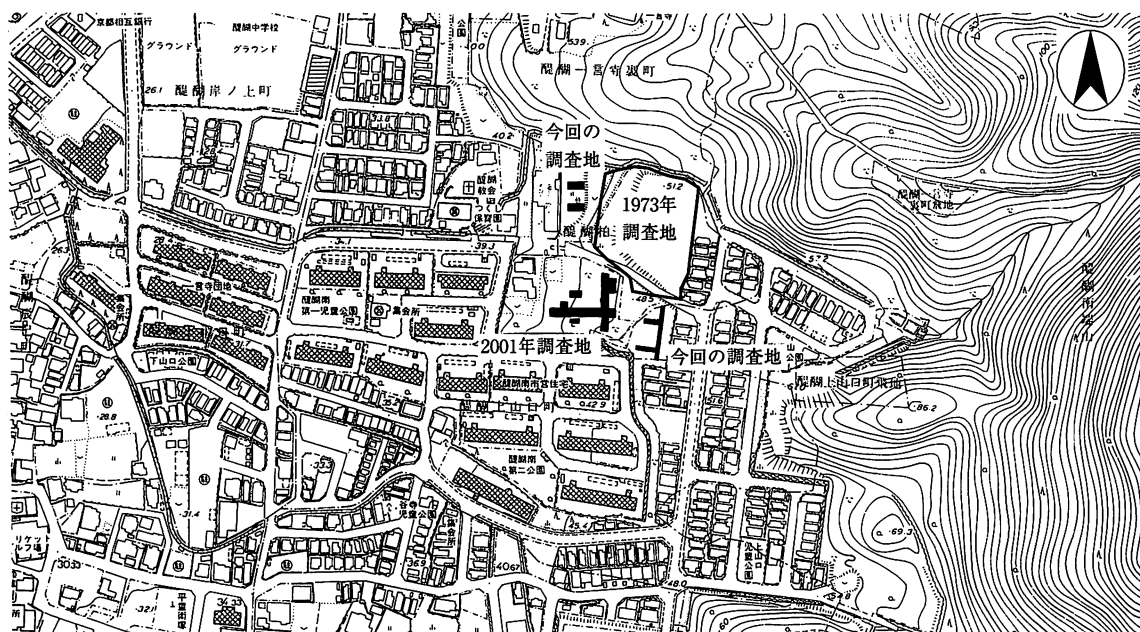


図44 調査地位置図（1：5,000）

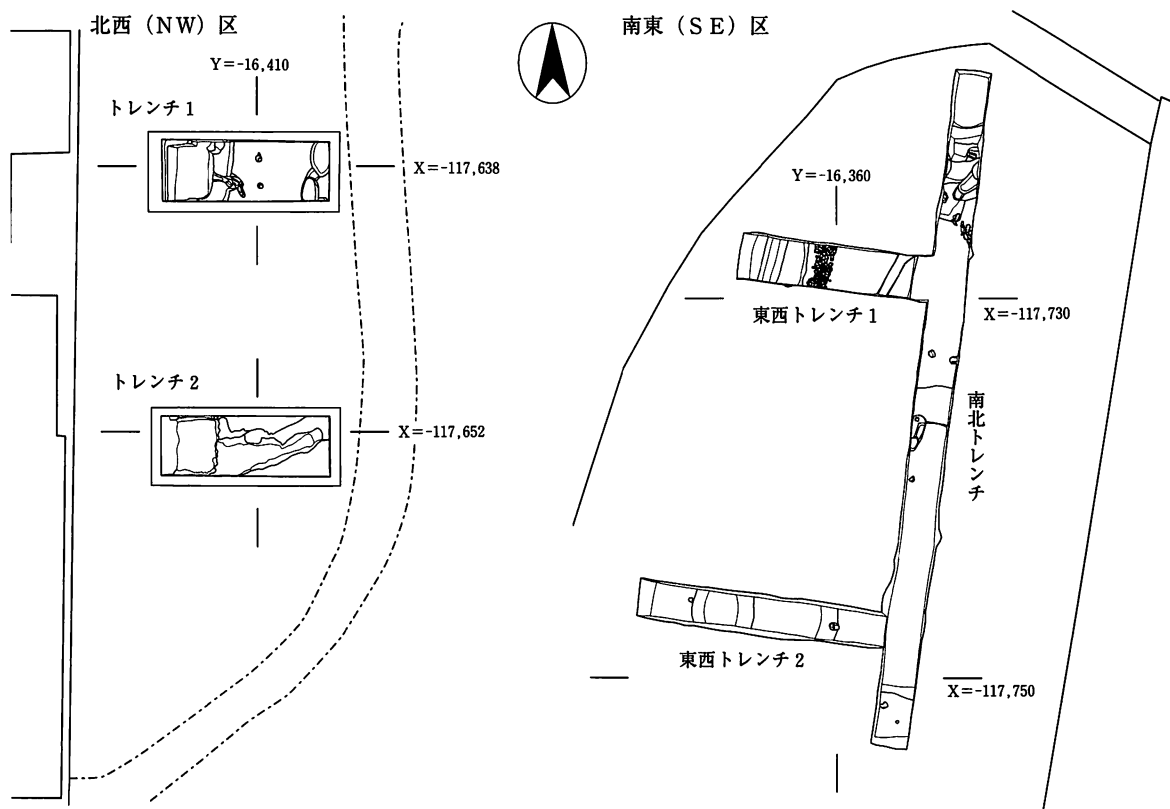


図45 調査区配置図 (1 : 400)

調査では、予算や期間等の条件から全面的な発掘調査を行うことが難しいため、一定幅のトレンチ調査区を設定する方法をとった。実際には、北西部域では南北4m×東西10mのトレンチ調査区を、10m間隔で2箇所(北側をトレンチ1、南側をトレンチ2)設定した。南西部域では東西2m×南北35.7mの長い南北トレンチ、および同トレンチ北部で直交する形で西方へ延ばした南北2.5m×東西10mの東西トレンチ1、南部で同様に西方へ延ばした南北2m×東西13.2mの東西トレンチ2の、計3条のトレンチ調査区を設定して調査を実施している。実際の発掘調査は、2002年10月21日から開始し、同年12月25日には終了している。

今回の確認調査では、北西部域の両調査区で寺域の西限およびその西側に並走する南北溝状遺構、また南側のトレンチ2では東方の史跡内の園池跡へ接続すると見られる東西溝状遺構等を検出している。南東部域の調査区では、東西トレンチ1において、14世紀後半から15世紀初頭頃には埋没したとみられる南北方向の石垣、犬走りおよび並走する南北溝状遺構など、寺院内建物の基壇とその関連施設と見られる遺構等を検出している。また狭小な調査区にもかかわらず、南西部域の東西トレンチ1などからは、軒瓦を含む多数の瓦類が出土している。

南東部域の調査では三重塔に関する断定的情報を得ることはできなかった。しかし、両地域ともに当初の調査課題はほぼ達成することができた。三重塔に関しても瓦類の出土状況などから、基壇上面の調査を東方へ拡張することによってその実体が把握できる可能性の高いことが理解できた。

以下では、今年度の確認調査による成果の概要を報告する。

## 2 地層と遺構

北西部域の調査対象地全体を北西（NW）区、また南東部域は南東（SE）区と呼称する。

北西区は、遺跡内では史跡となっている東側高みより相対的に4～5mほど低い地域に位置しており、現在は民有の耕作地となっている。目的としている遺構面は、両トレンチともに稲作田の耕作土層（天土）および基礎土層（床土）あわせて0.3mほどの耕作土関係の土層を掘り下げた直下で、ほぼ水平面に近い状態で検出された。検出した遺構面は、耕作地化の際に床土の水平面を確保するための基礎工事により、平坦に削平を受けていると見られる。遺構面のベース土層は、灰褐色系の色調を持った礫を多く含んだ泥砂土層であり、この土層は地山土層（自然堆積土層）である。しかし、北側のトレンチ1側では、部分的に暗褐色泥砂土が多く混入しており、整地作業による移動を受けた地山土層が残存しているものと見られる。

両トレンチにおいて、連続する南北溝状遺構1を検出した。成立時の西肩は検出できなかったが、トレンチ1の北壁部では一時期には東西幅約3m、深さ0.8m以上を測る規模があり、埋没直前段階で、幅2.3mほどに狭まっていたものと理解できた。同遺構の東肩部をつなぐラインは、2001年度の調査によって南西部域で検出した寺域西限の南北段差部肩ラインに、南北方向で連続する。この点も踏まえて今回検出した南北溝状遺構1の東肩ラインは、遺跡北西部域における寺域西限ラインと理解して良いものと考えられる。

南北溝状遺構1は、南側北側ともに調査区外へも延びている。同遺構は、北方で寺域北辺を西流する谷川に接続するかあるいは折れ曲がって連続すると見られ、南半では方形堂の東西中軸の延長ラインの少し北側で、折れ曲がって西流する可能性が高いだろう。

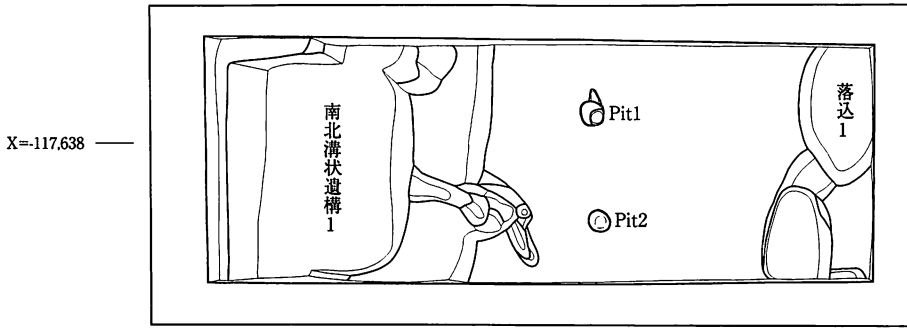
寺域の北辺を西流する現谷川は、現在は調査地の西側隣接地北辺を1宅地分だけそのまま西流し、そこで折れ曲がって方形堂東西中軸ラインの延長線の近くで、湾曲して曲がり再び西流していく。南北方向部分は、南北溝状遺構1より30～40m程西へ移動しているが、現状でも、遺跡が持っていた平面構造を踏襲している様に見える。これは、遺跡が成立する以前から存在していた自然流路としての谷川が、寺院の築造にあたってその一部が改変されて関連施設として取り込まれ、寺院廃絶後も大きくは変化することなく、現在にまで近似した形で残ってきたものと理解される。

トレンチ1では、上述の南北溝状遺構1の東肩から東1.5mほどの位置で、南北方向に並ぶ柱穴と見られるピットを2基検出している。並びの方向は、同東肩ラインにほぼ平行する。掘形の径は、ともに0.3m程である。残存部分は、ごく浅く柱あたりも不明瞭で、柱穴と断定するには検出状況が良いとは言い難い。しかし、検出位置及び並びやその方向等から見ると、東肩との間に犬走りを伴う堀跡または築地（心）の柱穴跡の可能性は十分にあるだろう。

トレンチ2でも、北壁際で上述したピットの並びの南北ライン上で、径0.2mほどのくぼみ1を検出している。残存状況は、トレンチ1の両ピットよりも悪く、ベース土層が礫を多く含んだ砂質分の多い泥砂土であるために、並びの面からは柱穴掘形残欠の可能性もあることを考慮して

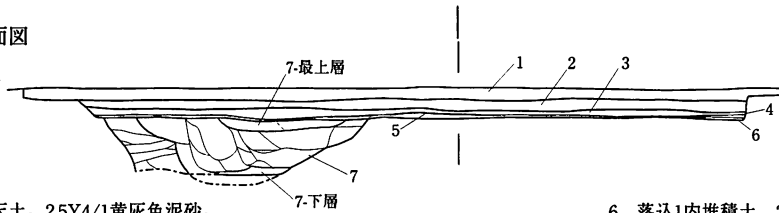
NW区トレンチ 1  
平面図

Y=-16.410



北壁断面図

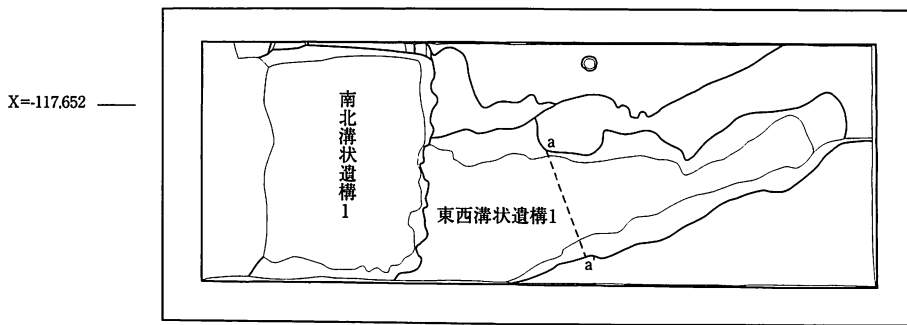
H=43.00m



- |  |                         |
|--|-------------------------|
| 1 天土。2.5Y4/1黄灰色泥砂。                     | 6 落込1内堆積土。2.5Y3/1黒褐色泥砂。 |
| 2 床土。7.5YR5/8明褐色~7.5YR7/2砂泥礫混。         | 7 南北溝状遺構 1 内堆積土。        |
| 3 床土下層。7.5YR5/1褐灰色泥砂、7.5YR5/8明褐色泥砂礫混在。 | 7-最上層 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂礫混。  |
| 4 10YR5/1褐灰色泥砂礫混。                      | 7-下層 7.5Y5/2灰オリーブ色砂泥礫混。 |
| 5 5BG5/1青灰色泥砂 + 7.5YR7/1褐灰色泥砂礫混。       |                         |

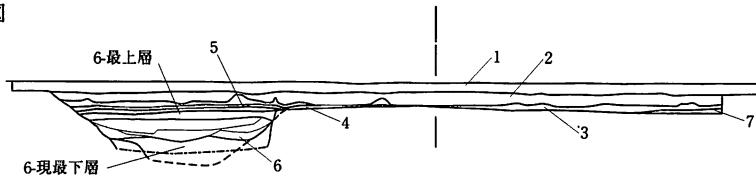
NW区トレンチ 2  
平面図

Y=-16.410



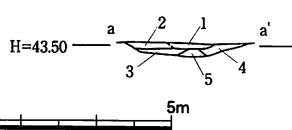
北壁断面図

H=43.00m



- |  |                         |
|--|-------------------------|
| 1 天土。2.5Y4/1黄灰色泥砂。                     | 6 南北溝状遺構。               |
| 2 床土。7.5YR5/8明褐色~7.5YR7/2砂泥礫混。         | 6-最上層 2.5Y6/3にぶい黄色泥砂礫混。 |
| 3 床土下層。7.5YR5/1褐灰色泥砂、7.5YR5/8明褐色泥砂礫混在。 | 6-現最下層 10G6/1緑灰色泥砂礫混。   |
| 4 10YR5/1褐灰色泥砂礫混。                      | 7 4と類似土。                |
| 5 7.5YR4/2褐灰色砂泥礫混。南北溝状遺構埋土の一部か。        |                         |

東西溝状遺構 1 断面図



- |                               |
|-------------------------------|
| 1 10BG6/1青灰色泥砂。               |
| 2 7.5Y6/1灰色砂泥礫混。              |
| 3 7.5Y5/1灰色砂泥礫混。              |
| 4 10Y6/1灰色砂泥 + 5BG6/1青灰色砂泥礫混。 |
| 5 5Y5/1灰色砂泥礫混。                |

図46 北西 (NW) 区平面図・断面図・遺構断面図 (1 : 100)

おくべきだろう。

トレンチ2において、東北東から西南西方向に流れ、南北溝状遺構1に合流している東西溝状遺構1を検出した。同溝状遺構は、合流部近くで幅2mほど、深さ0.4mほどを測る。底部が東北東へ向けて徐々に浅くなるが、これは地勢に沿う流れを確保するためだけではなく、同遺構の本来的な成立面が、耕作地化の過程で、東側の高みがいくぶんか削平を受けたことによって、相対的により浅くなったのであろう。東北東方向への延長ラインから見れば、1973年度調査で検出されている園池から西方へ流れている遣水（水逃し）に連続する溝である可能性が高い。

上述したNW区のトレンチ1・2で検出した南北溝状遺構1、東西溝状遺構1、ピット1・2等の遺構は、少数ではあるが構内堆積土上層などから出土した遺物の年代観から、埋没年代の上限は14世紀代～15世紀代前半の室町時代前期頃と推定される。史跡内の遺構との位置を含めた関連性や、埋没推定年代等から見て、栢ノ杜遺跡を構成する遺構と判断される。なお耕作地化は、天土・床土等の出土遺物から早くても江戸時代以降であり、現在も耕作されている稲作田の形成は近代に入って以降と見るのが妥当であろう。

南東（SE）区は、遺跡推定地内では相対的に高みとなる東辺側に位置しており、現在は竹林として利用されている民有地である。竹藪の地表面を観察すると、塔跡などの寺院内施設の推定地点付近が、不自然に盛り上がった高みとなっていることが判る。このような現存する微地形を考慮し、推定塔跡の中心を含むかたちで調査区を設定したいと昨年来考えていた。しかし、東側宅地の町内会からの要望により、調査対象地の東辺から南辺にかけて3～4m幅で竹林を残さなければならない結果となった。このため最目標とした地点を含む形での、調査区設定はなしえなかったが、南西区の調査でも遺跡の理解に重要な多くの成果をあげることができた。

この地区の栢ノ杜遺跡の遺構面検出に至るまでの基本層序は、大きくは3群にまとめて見ることができ。本書に掲載した土層断面図では1層とした主に現表土を形成するA群、その直下の標準土色帖による色名では褐色（一般的には淡黄色）系の色調を共有している2～5、12-1～3層をまとめたB群、それらの下の明褐色（一般的には茶色）の色調と泥砂土とした土質が、ほぼ共通する13～17層をまとめたC群の計3群である。礫や粗砂等の含み方で群内の土層をさらに分層している。



図47 SE区東西トレンチ1（西から）

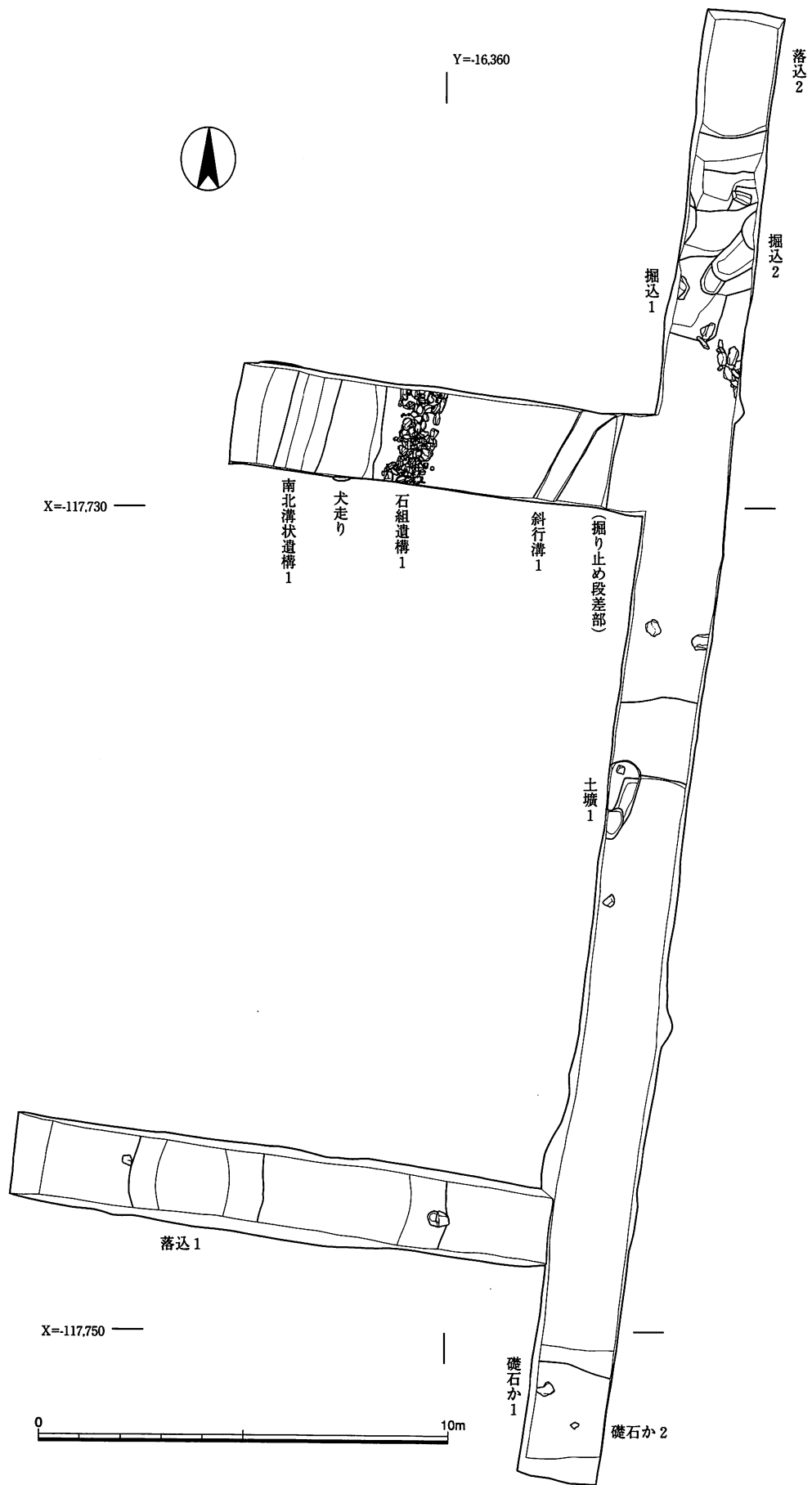
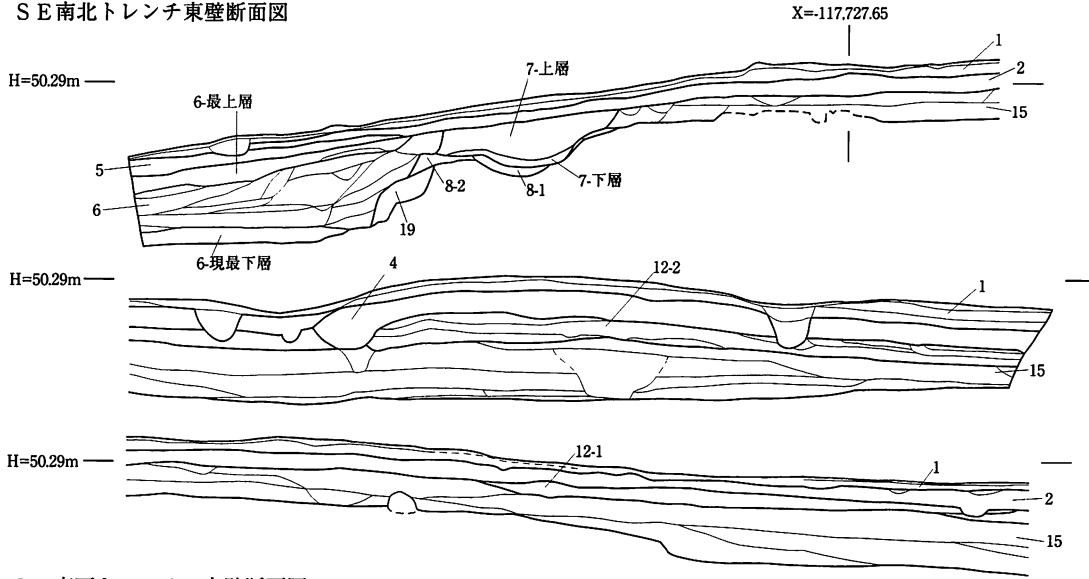


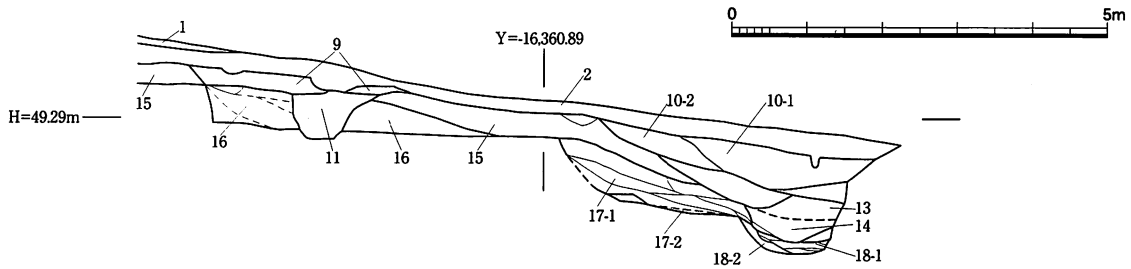
図48 南東 (SE) 区平面図 (1 : 150)



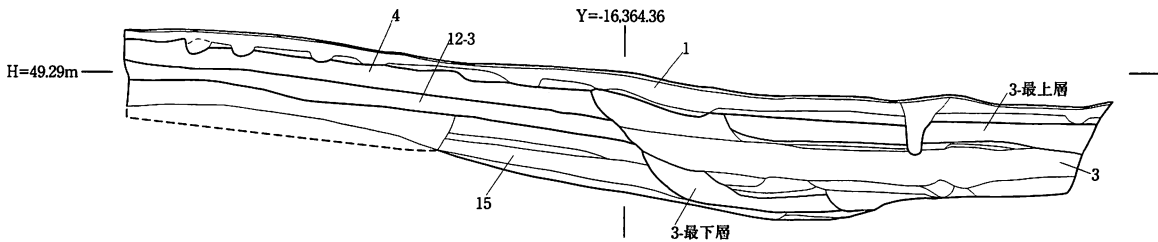
S E 南北トレンチ東壁断面図



S E 東西トレンチ 1 南壁断面図



S E 東西トレンチ 2 南壁断面図



- 1 表土層。7.5YR5/6明褐色泥砂層、他。竹の根の入り方で2～3層に分層。
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥層。
- 3 落ち込み 1
- 3-最上層 7.5YR4/6褐色砂泥土。
- 3-最下層 7.5YR4/4褐色泥砂土、他。
- 4 7.5YR4/6褐色泥砂層
- 5 10YR4/2灰黄褐色砂泥層。
- 6 落ち込み 2。
- 6-最上層 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂。
- 6-現最下層 10BG6/1青灰色粘土、他。
- 7 落ち込み 3。
- 7-上層 7.5YR4/3褐色砂泥土。
- 7-下層 10YR6/6明褐色砂泥土。
- 8 掘り込み 2。
- 8-1 7.5YR5/6明褐色泥砂土。
- 8-2 8-1に類似土。
- 9 7.5YR5/4にぶい褐色～5/6明褐色泥砂層。
- 10-1 10YR3/2黒褐色～7.5YR5/6明褐色泥砂砂礫混。
- 10-2 7.5YR4/3褐色～7.5YR3/2黒褐色泥砂砂礫混。

- 11 斜行溝。7.5YR4/3褐色～7.5YR5/6明褐色泥砂礫混。
- 12-1 7.5YR4/3褐色泥砂礫混。
- 12-2 10YR4/3褐色泥砂層礫混。部分的な黒褐色泥砂層含む。
- 12-3 10YR4/4褐色泥砂層礫混。
- 13 7.5YR5/4にぶい褐色～5/6明褐色泥砂 (7.5YR2/1黒色に変色部分あり)、他。
- 14 7.5YR4/6褐色泥砂大礫混層。
- 15 7.5YR5/6明褐色泥砂礫混、他。粒子や礫の大小等で分層しているが類似土。一般的には茶色。
- 16 7.5YR4/6褐色泥砂礫混。一般には茶色。
- 17-1 7.5YR5/4にぶい褐色～5/6明褐色泥砂、砂礫、他類似土多い。一般的には茶色。
- 17-2 7.5YR4/4褐色泥砂。一般的には暗褐色。
- 18 南北溝状遺構内堆積土。
- 18-1 10YR5/4にぶい黄褐色～5/6黄褐色砂泥土、礫混、他。
- 18-2 10YR6/3にぶい黄褐色～6/6明褐色泥砂、灰色味強い。
- 19 10YR6/4にぶい黄褐色粘質土層 (地山)。

図49 南東 (SE) 区断面図 (1 : 100)

各群の積み上げあるいは堆積年代は、出土遺物等からの情報も加えた理解では、A群は竹林の造成土を中心とする現代の土層群、B群は近世から現代までの時間幅の内で断続的に積み上げられた土層群であり、最上面は昭和時代にまで時間幅を持っているとみている。遺構面は、C群を排土すると検出される。同遺構面で成立している遺構は、14世紀代の室町時代初頭の頃までは機能していたようであり、C群の性格は室町時代初期以降と見られ、堆積後に上層部などでは人の手が幾度も入り、二次的、三次的移動を受けているものと見られる。C群を完掘して遺構面を検出している東西トレンチ1では、C群の厚さが0.7m程もあり、全体としてはかなりふ厚い堆積層である。C群の本来的な堆積に関しては遺跡の主要部分を埋めつくしている土石流であった可能性が高い。上面は近世以降にまで時間幅を持っているものと考えられる。

東西トレンチ2でB群の4層上面で成立している落込1は、近代にまで残っていた段差部分の可能性はある。南北トレンチ北辺部で検出している落込2は、北側に一定の幅をもった谷川状の流路の一部であると見られる。遺跡の東側高みには、昭和時代の宅地造成時に埋められた溜池が存在していたことが、1974年の概報に掲載されている地図などによって知ることができる。落込2とした遺構は、西方の低地耕作田への放水路であった可能性を考えている。

東西トレンチ1の東半部で検出している斜行溝は、C群下層の16層上面で成立しているともみられるが、上部が一段広がっている形で成立していたと解され、実際の成立面は、ここではC群上層となる15層上面から成立しているものと理解してよいだろう。段下りの部分に堆積している9層と構内堆積土11は、掘り下げや埋め戻しなどによって幾度かは移動を受けているようだが、C群と土質・色調ともによく類似した土である。大礫の入る様相もほとんど変わらないが、小片化したものを含めた瓦類が大量に含まれている点が最も大きな違いである。この溝は、方向からは南北トレンチ北部に延びるが、底部残欠かともみられる8-1層とした浅い掘込2を検出しているものの、上部を落込3に南側は掘込1に切られており断定的理解は難しい。

斜行溝の成立年代に関しては、9層や15層から瓦類以外に少数ではあるが国産施釉陶器片が出



図51 SE区南北トレンチ南部（北北西から）

図50 SE区南北トレンチ北部落込2（北から）

土しており、年代は遡っても江戸時代後期頃以降であり、近代以降と見るのが妥当である。斜行溝の成立年代も近代以降と考えられる。なお、溝内や9層から多量に出土している瓦類は、ほぼすべてが平安時代後期から鎌倉時代に比定出来るものであり、遺跡に直接関連するものと見られる。しかし、小片が多い点などからみると、二次以上の移動を受けた後に、単純にこの溝に埋没したものかあるいは暗渠の材料として埋設されたものであろう。

平安時代末期以降の遺構面は、東西トレンチ1では東辺部をのぞく西壁までの全域で検出している。同遺構面では、西壁から東約4mの位置で、高さ0.8m程の南北方向で西面する石垣跡、それに伴う幅1.5m程の幅のある犬走りとみられる平坦面、その西側に両遺構に並走する幅1.2m以上深さ0.5m程を測る南北溝状遺構1などを検出している。

石垣跡は、表の石積部分の大半は失なわれており、最下段の石が少数残されているだけであり、全体的には裏込め石が露呈している状態で残存していた。石垣跡より上面の残存遺構の様相がほとんど明らかとはなっていない。しかし、伴う犬走りや溝状遺構など関連施設を含めた規模や様相からは、かなり重要な寺院内の建物施設が存在していたものと推測され、この石垣跡はそれらの建物施設の基壇の一部と見てよいであろう。

成立年代に関しては、整理途中でもあり、関連出土遺物もほとんどなく、詳細な推定は難しいが、南北溝状遺構1の構内埋土である18-2層や、それらに直接堆積する14層下層から、多くの瓦類とともに土師器鉢や皿が若干出土しており、それらの年代観から、13世紀の鎌倉時代には機能しており、14世紀代～15世紀代初頭の室町時代初頭頃には埋没したものと理解される。石垣やそれに伴う犬走り溝状遺構などは、遺跡を構成する遺構群の一部と見てよいだろう。

南北トレンチ南半部から東西トレンチ2でも、東西トレンチ1の石垣上面の遺構面に連続するとみられる遺構面を検出している。C群土層の下層部を残した部分もあり、不明確な部分も含むが、南北トレンチ南端部で礎石を2基検出している。調査区も狭く並びなども確認できていないので、断定的なことは言えないが、寺院敷地南辺部に関連施設が存在していた可能性を示すものと見ておきたい。

なお、南北トレンチ北部は、落込2とした谷川状の遺構によって遺構面は削除されており、また東西トレンチ1の西半部でも、落込1によって関連施設を含めて削除されているものとみられる。しかし、調査を中断した東西トレンチ2の東辺以東から南北トレンチ北半部またその東側末調査区には、現状から見ても建物跡等の遺構が残存している可能性があり、次年度の調査が期待される。

### 3 遺物

#### (1) 遺物の概要

今回の調査では、南東(SE)区の東西トレンチ1を中心にして出土した瓦類がコンテナで33箱分、土器・陶磁器類は全体的に少なく、あわせてもコンテナ1箱分程度しか出土していない。

土器・陶磁器類は、少数ずつではあるがNW区・SE区の各調査区から出土している。時期別

に見ると、遺跡の存在していた時期以前のものは、SE区東西トレンチ1から出土している平安時代初頭頃に比定できる須恵器杯Bが1点のみである。遺跡の存続期間中に位置づけられるものは、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器など各種のものが見られるが、各調査区で数点ずつとあわせても多くはない。最も数多く出土しているのは、近世以後の染付を中心とする国産施釉陶磁器である。

瓦類は、新しい土層・遺構への混入品を含めて出土品の大半が、平安時代末期から鎌倉時代頃に位置づけられる遺跡に直接関連した資料である。SE区東西トレンチ1の斜行溝や同南北トレンチ掘込1などの近代以降とみている遺構への埋設物とされた瓦類が多数を占めている。これら新しい時期の遺構等から出土している瓦類は、小片化したものが主で、原位置を失った後もさらに二次的移動を受けていることは明らかであろう。しかし、これらも大きく動いたという印象は受けない。SE区東西トレンチ1の南北溝状遺構1の溝内堆積土上面に直接堆積している14層からも数多く瓦類が出土している。これらは、比較的破片も大きいものが主で、接合できる例も少なくない。土層の流れの方向等も踏まえると、東方の近い地点の高い側から、若干の距離を一次的に移動して同トレンチ西辺のこの地点に堆積したものとみられる。

以下では、図、写真を掲載した遺物の概説を主に記す。

## (2) 土器・陶磁器類 (図52、図版20)

須恵器鉢(1)は、NW区1トレンチ南北溝状遺構1内堆積土から出土している。小片ではあるが仕上がりや胎土などから東播磨系とみられる。平安時代末期から鎌倉時代の広い時代幅のうちには収まるだろう。

須恵器鉢(2)の体部片と山茶碗(3)の底部片は、NW区1トレンチ褐黄色泥砂礫混層から出土している。須恵器鉢(2)は、1と同様に東播磨系である。鎌倉時代から室町時代初期の資料とみておく。山茶碗(3)は、高台を含めた形態的特徴、細かく良好で白色味の強い胎土、硬質観のある焼き上がり等から美濃産の山茶碗とみられる。14世紀代の室町時代初期頃の資料であろう。

瓦器碗(4)の口縁部は、NW区1トレンチ4層から出土している。輸入青磁碗(5)の体部片は、NW区1トレンチの南北溝状遺構1内堆積土最上層から出土している。瓦器碗(4)は、外面にヘラミガキが行われていない点などから13世紀代の鎌倉時代頃の資料とみておきたい。輸入青磁碗(5)は、内面の一部に劃花文が認められる点や釉調等から見ると、京域内ではかなり一般的に出土が見られる鎌倉時代前半代の龍泉窯系の青磁碗と考えられる。

土師器鉢(6)は、SE区東西トレンチ1の南北溝状遺構1の溝内堆積土18-2層から出土した。破片が1箇所からまとまったかたちで出土しており、接合するとほぼ完形に復した。体部外面に粘土紐の継ぎ目痕を数条残す、いわゆる製塩土器風の小振りな鉢である。胎土は、京域主流の土師器食器に共通しており、同じ生産地の製品であろう。この資料の特徴は、体部下端付近に強いリング状の圧痕がめぐる点である。またリング状痕以下の底部外面も比較的平滑で型にあたっていたとみられる。小型で深みのある土器等の上で製作したか、その上に生乾きの状態で置き乾燥

が行われた結果、圧痕が付いたものとも考えられる。京域出土資料と比較検討して、13世紀代の鎌倉時代に比定できる資料である。

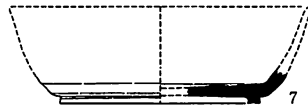
須恵器杯B（7）の底部片は、SE区東西トレンチ1の16層から出土している。貼り付け高台が体部の立ち上がり近くに付き、この形式の杯としては新相を呈している。8世紀末～9世紀初頭の長岡京期から平安時代初頭を中心とした京都I期中に属する資料とみておく。須恵器甕（8）の体部片は、SE区東西トレンチ1の14層から出土している。平安時代末期から鎌倉時代の資料とみておく。須恵器鉢（9）の体部片は、SE区東西トレンチ1の15層から出土している。東播磨系の鉢であり、鎌倉時代頃の資料とはみられるだろう。滑石羽釜片（10）は、SE区南北トレンチの壁面清掃の際に出土している。出土土層の特定が難しいが1～2層であろう。平安時代末期から鎌倉時代初頭頃の搬入品とみられるが、再加工して転用しているようであり、転用品としては鎌倉時代頃と推定すべきだろう。

土師器皿類（11～13）は、SE区東西トレンチ2の北壁際の15層から出土している。京域主流に属する土師器皿であり、11・12は皿N大、13は皿N小である。口縁外面のナデによる凹みが二段か一段か決し難いあいまいなものとなっているが、全形はV期的様相を保持している。京都V期新からVI期古の幅でみておき、12世紀後半代に位置する資料と理解しておく。

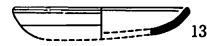
天目茶碗（14）は、11～13の土師器皿と同じSE区東西トレンチ2の15層の同じ地点から出土している。胎土がやや粗い黒っぽい灰褐色を呈し、釉色は黒褐色で、釉調は内面がいわゆる禾目風を呈している。中国からの輸入品とみられるが、いわゆる建盞とは異なり、福建省の別の窯場の製品と思われる。年代は、同じ地点で出土した古相の土師器皿より少し新しい鎌倉時代の資料と推測しておきたい。この時期にはまだあまり普及が進んでいない飲茶具である輸入の天目茶碗が、遺跡内から出土している点には注目しておきたい。

SE区出土

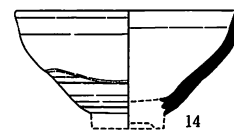
須恵器杯B



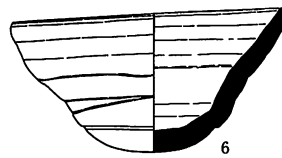
土師器皿N



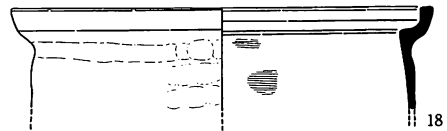
輸入鉄釉天目茶碗



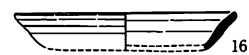
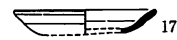
土師器鉢



瓦器鍋



土師器皿N



NW区出土

須恵器鉢

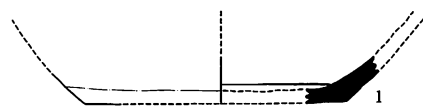


図52 SE区・NW区出土土器・陶磁器実測図（1：4）

土師器皿類(15~17)は、15・16がSE区東西トレンチ1の14層下層から、17がSE区東西トレンチ2の15層から出土している。出土地点が異なるが、近い型式の土師器皿であり、まとめて記す。体部外面のナデによる凹みが、一段化して以降さらに体部の形態変化が進行し、法量も小型化が進んでおり、京都Ⅶ期でも後半のⅦ期中から新段階に位置する資料とみられる。実年代的には、14世紀前半代の土師器皿類と考えている。

瓦器鍋(18)は、SE区東西トレンチ1の14層から出土している。受け部の退化が進んでおり、京都Ⅶ期のうちでも、共伴している15・16の土師器皿Nと同様にⅦ期中から新の幅には収まる資料と見ておきたい。年代は、14世紀前半代に比定しておく。

### (3) 瓦類(図53、図版21)

概要 瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。大半は丸瓦・平瓦が占めるが、軒瓦もある程度の量が同時に出土している。ここでは情報量の多い軒瓦に焦点をしばってその概要を記す。軒瓦は52点出土し、軒丸瓦4種19点・型式不明13点、軒平瓦4種16点・型式不明4点である。軒瓦の時期は、平安時代後期3点、鎌倉時代35点、時期不明17点である。なお瓦類と関連する資料に瓦を留める釘類が瓦とともに数点が出土している。すべて鉄製の角釘であり2点だけだが、瓦の釘穴に錆びて付着している資料も見られる。以下、時代別に主要な軒瓦を報告する。<sup>註5</sup>

平安時代後期 軒丸瓦21-7は、SE区東西トレンチ1西辺部14層から出土した。右回り巴紋で、尾は長く互いに接する。瓦当部側面下半横ナデ・裏面オサエ後ナデ。1点出土。1973年調査c類と同範である。

軒丸瓦6は、SE区東西トレンチ1西辺部14層から出土した。単蓮華紋である。蓮弁は幅広く中凹みである。間弁有り。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。瓦当部側面上半縦ナデ・裏面ナデ、丸瓦凸面縦ナデ・凹面ナデである。山城産。1点出土。

軒平瓦21-5は、SE区東西トレンチ1西辺部東西溝状遺構1構内堆積土18-2層から出土した。剣頭紋である。紋様は陽刻でU字形である。段顎。瓦当部成形は半折曲技法である。瓦当部凹面端部横ケズリ、顎部凸面横ナデ・裏面オサエ、平瓦凹面布目(糸切り痕跡)・凸面ナデである。山城産。1973年調査k類と同範である。1点出土。

軒丸瓦21-9は、NW区で出土した唯一の軒丸瓦であり、NW区トレンチ1の4層から出土した。右回り巴紋であるが文様の中心部付近が残るだけで、他の詳細は判らない。SE区で出土している21-5~7と同様に八角円堂に使用されていたものであろう。

鎌倉時代 軒丸瓦21-3は、SE区東西トレンチ1東部11層の斜行溝内から出土した。右回り巴紋で、尾は長く接しない。珠紋帯の内外に圈線が廻る。瓦当部側面下半横ナデ・裏面ナデ。1973年調査m類と同範である。他地点からのものを含めて類品があわせて10点出土している。

軒丸瓦21-8は、SE区南北トレンチ1北部掘込1上層から出土した。右回り巴紋で、尾は長く接しない。瓦当部側面下半横ナデ・裏面ナデ。1973年調査P35軒丸瓦と同範である。7点出土。

軒平瓦21-4は、SE区東西トレンチ1西辺部南北溝状遺構1構内堆積土18-2層から出土した。外向唐草紋である。中心飾りは対向C字形で、唐草紋は両側に7転する。段顎。瓦当部成形は瓦

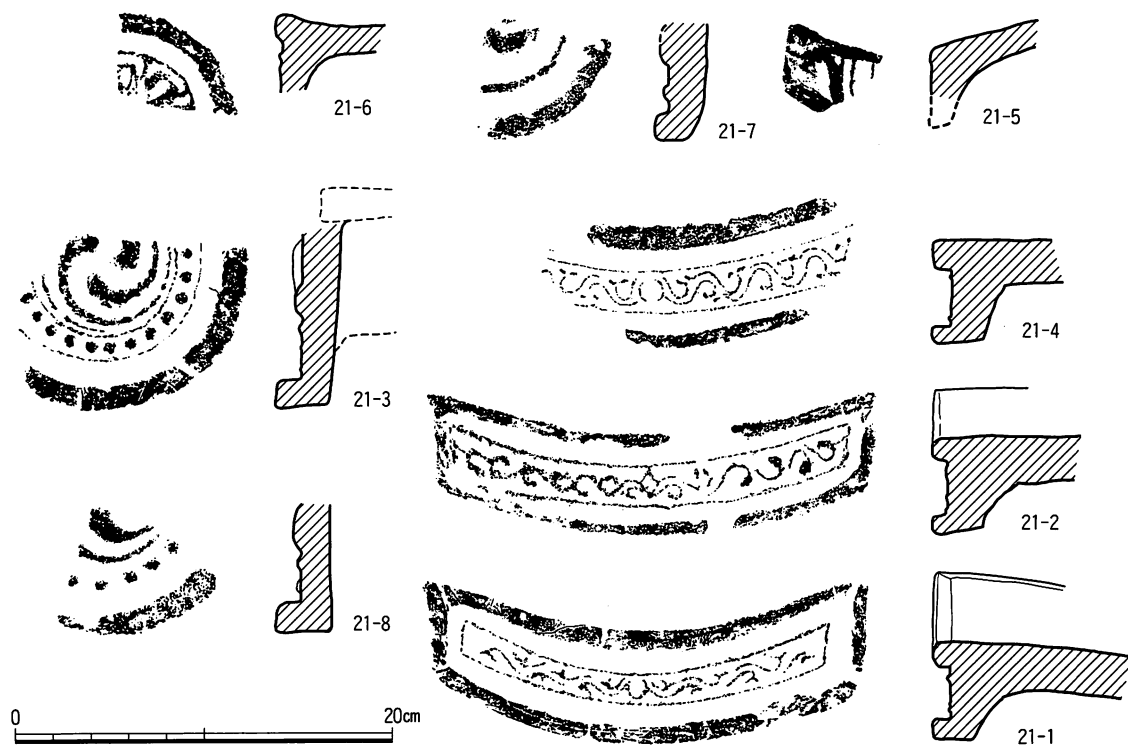


図53 SE区出土軒丸・軒平瓦拓本・実測図（1：4）

当部貼り付けである。瓦当部凹面端部横ケズリ、凸面・裏面横ナデ、平瓦凹面布目・凸面縦ナデである。頸部に凹型調整台の痕跡有り。1973年調査C類と同紋で、中心飾りの巻が弱く、唐草紋の単位が短い。他をあわせて5点出土している。

軒平瓦21-1は、SE区東西トレンチ西辺部14層下層から出土した。外向唐草紋である。中心飾りは上向C字形で、唐草紋は両側に6転する。段頸。瓦当部成形は顎貼り付けである。瓦当部凹面端部横ケズリ、凸面・裏面横ナデ、平瓦凹面布目で後ろ側をナデ・凸面縦ナデ、側面縦ナデである。頸部に凹型調整台の痕跡有り。1973年調査C類と同紋であるが、軒平瓦4よりさらに簡略化する。東福寺に同紋例（No.57）、橘寺に同紋例（川原寺報告書No.66）がある。1点出土。

軒平瓦21-2は、SE区東西トレンチ台上部15層下層から出土した。外向唐草紋である。中心飾りは菱形で、唐草紋は右側6転・左側7転である。段頸。瓦当部成形は不明である。瓦当部凹面端部横ケズリ、凸面・裏面横ナデ、平瓦凹面布目で後ろ側をナデ・凸面縦ナデ、側面縦ナデである。頸部に凹型調整台の痕跡がある。東福寺No.に同範例あり、他地点をあわせて9点出土している。瓦類の大半が、SE区東西トレンチ1及び南北トレンチ北部から出土しており、軒瓦類もそのほとんどがそこから出土したものである。21-5～7のように、創建期に建立された八角円堂に関連しているものとみられるものも含まれる。しかし、それらは小片化したものが多く、二次以上の移動を受けたもののようなものである。NW区で出土している21-9なども同様に理解されるものである。SE区のなかでも東西トレンチ1から出土しているものは、大きい破片のものも多く、軒瓦類を見ても、八角円堂より遅れて建てられた今回の調査区北隣りの方形堂関係の軒瓦類とは、同紋のものも多いが、同範のものは少なく、後出する新相の別範のものが中心を占めている。大

和の既編年から見ると、鎌倉時代と見なければならぬものも含まれている。これらの点からは、東西トレンチ1を中心に出土している軒瓦類は方形堂とは異なる堂宇(おそらく三重塔であろう)に関係するものと見るのが妥当であろう。

#### 4 遺跡復元概念図について (図54)

1973年度の既調査成果と2001年度の新調査成果を加えて、1/500の地図上で栢ノ杜遺跡の復元を試み、2001年度の発掘調査概報に、紙面上の都合からスケールを調整した1/850の遺跡復元概念図を掲載した。この復元図に今年度実施した遺跡確認調査によって得られた成果を盛り込み、必要な点を修正し復元図を作成した。またそのなかに八角円堂、方形堂、未確認の三重塔という主要堂宇が、西面して南北方向に等間隔で一列に並ぶとの想定をもとにして、三重塔の中心である心礎の推定位置を入れておいた。以下では、今年度版復元図の作図上での問題点と完成した復元図から読みとれる問題点や今後の調査への課題などを記しておく。

作図は、同縮尺とした今年度の各調査区の遺構平面図を、国土座標第VI座標系での絶対位置を測量しているポイントを用いて、昨年度の1/500の復元図上に図化することから始めた。そのうえで昨年度の南西部の3箇所の調査区で検出している寺域西端(段差肩部)と、今年度の北西区の2トレンチで検出している寺域西端(南北溝状遺構東肩)を直線ラインで結んだ。検出している5箇所の寺域西端部は、ほぼ南北方向の直線ライン上に列ぶ。このラインを寺域西限ラインと理解してよいだろう。さらに北西区トレンチ1で検出している柱穴とみている2基のピットで設定した南北ラインを、その方向で南への延長ラインを設定した。限定的な情報によるが、堀跡等の寺域西端部施設の復元ラインとなる。このラインは、南西部では寺域西端となる段差部肩部から東1m程の位置を走る。このラインは、第VI座標系の南北軸であるY軸ラインにほとんど重なっており、方向はほぼ真北を向くと言えるだろう。

両ラインを比較すると、寺域西限ラインのほうが北で西へ若干振るが、図上で見ても施設復元ラインと大きくずれるものではなく、実体的情報である検出遺構間の距離も考慮すると、若干の振りは施工誤差範囲と理解してよいと考えている。本書で提示した復元図上では、南西部の既検出の西端ラインを基線にして、Y軸に重ねて北西区へ延長したラインを、寺域の復元西限ラインとして、破線で表示している。この寺域の復元西限ラインの直線性は、実体が若干西へ振っていたとしても、昨年段階で予測したごとく、寺域や堂宇築造に際して、基本的割り付けが前提的に設定されていたと解してよい物証とできるだろう。

既発見堂宇の位置から考え、この寺域西縁部ライン上に門が存在していたと推測できる。推定存在位置は、方形堂の東西方向中軸ラインの西延長部と、復元西限ラインの交点を中心とする付近がやはり最も有力な候補地となるだろう。この付近は、現状では史跡内を通る西方低地への小坂道となっているが、その南隣の空地での発掘調査は可能である。寺院西縁部の様相をより実体的に把握するために、小規模ではあっても確認調査がぜひ必要であろう。

このほぼ確定的認識を得られた寺域西限ラインと、昨年度の復元図に図化した八角円堂と方形



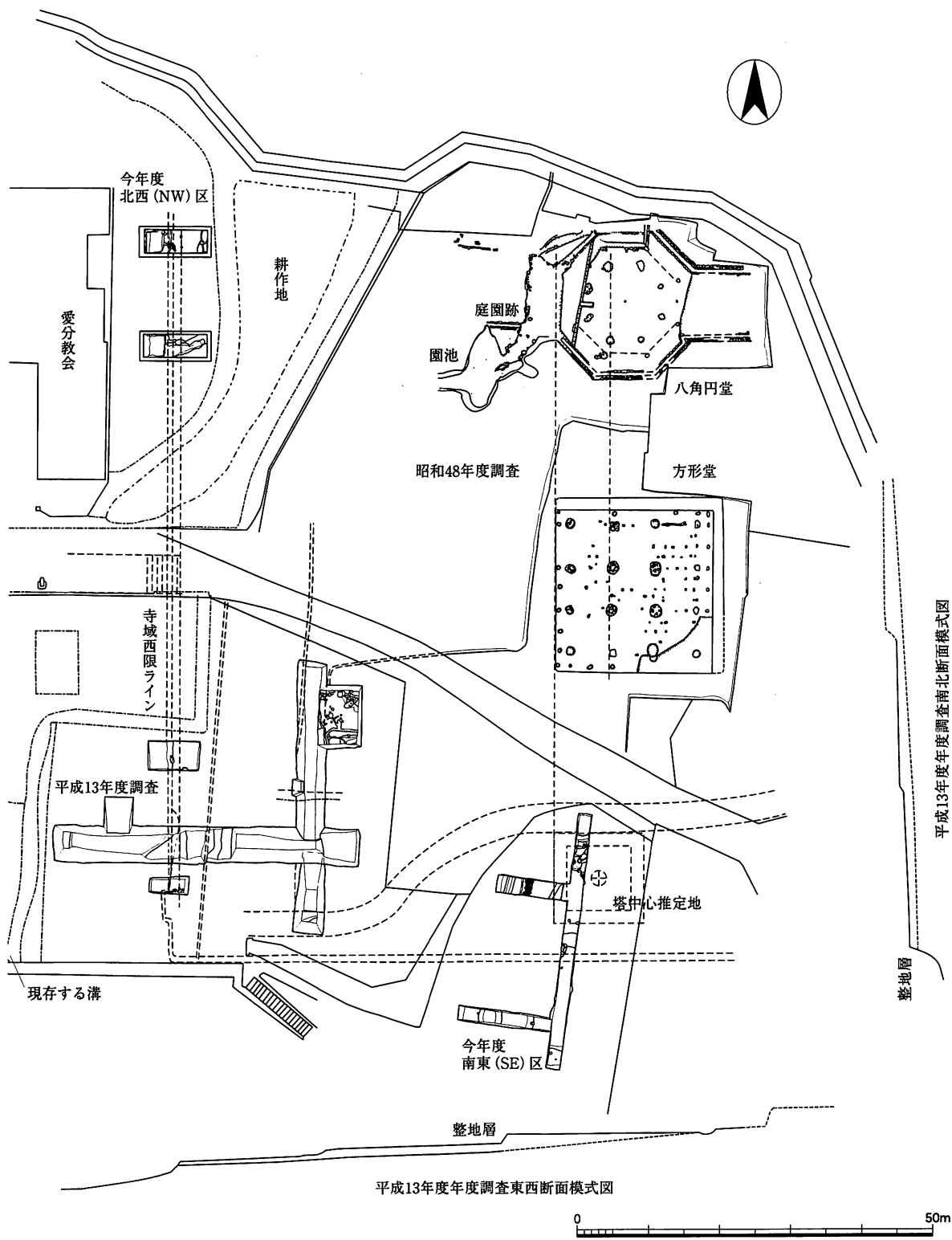


図54 栢ノ杜遺跡復元概念図 (1 : 850)

堂の西側を結ぶ直線ラインを比較すると、両建物の西側ラインは北方での東への振りがかなり大きいことは一見して分かる。図上での計測では、東へ5度以上振れている。

この問題は、昨年度の概報に記したように、1973年度調査の遺跡平面図のポイントに第Ⅵ座標系の絶対座標がなく、また現地のポイントも史跡の覆土によって隠されてしまっているため再測量ができず、そのため復元図への図化を別の手掛かりによって行ったためにずれが生じたものと考えられる。このような認識のもとに、建物の割り付け軸と寺域割り付け軸が共通したものであると想定し、両建物の西辺を結ぶラインを方形堂西南角を基点にして、寺域西限ラインの方位にあわせて平行にさせて、建物位置の復元を行った。

建築学的には基本的な関係であるだろうから問題にすべきでもないことではあろうが、発掘調査における遺構記録としての平面図上での問題であり、不確定な要素を含む西側ラインだけで話を進めることには少々問題が生じると思うので、建物の割り付け軸を具体的に表している柱筋ラインと、用いている西側ラインの関連に対する認識を昨年度記さなかったのでここで簡略的に記しておく。方形堂の南北柱筋は、西側ラインとは図上で点検しても基本的に平行しているとみてよいだろう。八角円堂の柱筋に関しては、八角を2つの方向の十字的組み合わせと見て、方形の1辺を柱筋として南北方向の柱筋と西側ラインを比べると、図化されている西側ラインの方が北で若干東へ振っているようにみえる。しかし、これは遺構の残存状態が影響していると考えられる。これは、八角円堂の内側の西から2列目の南北柱筋が方形堂の西から2列目の南北柱筋と、南北の一線上を通ると理解される点からも、本来は平行するライン上に設定されたものと見るべきだろう。また八角円堂の西側雨落溝の西肩ラインを、残存する両角を連ねるかたちで復元すると、方形堂西側正面ラインの北延長ラインにほぼ重なることも判る。このラインは、先に記した方形堂の南北柱筋ともほとんど平行している。今後このラインを、方形堂西側ラインとして話を進める。復元図にも点線で入れておいた。

このような点検作業から、両建物は共通する割り付け軸の上に建築されたものであると見てよいと考えられる。この建物側の割り付け軸の南北ラインが、寺域西限ラインと5度以上振れて設定されたと考える方がかなり無理が大きいと思われる。地域割り付け軸と建物割り付け軸は、方位が共通したものと見る方が妥当性が高いだろう。しかし、これが絶対位置の記録の上で確認できたならば、実証が得られた事になるが、現時点では推論の域を出るものではない。

八角円堂の建物としての中心点と方形堂の同中心点を復元的に設定して、両点を西側ラインと比べると、方形堂側の中心点の方が東へ実数値にして数十cm程距離があることが判る。この実態は、両建物が形状・規模ともに異なっている点から見れば、規模の大きい側の方形堂の中心点が辺部から大きい距離を持つことを示しているだけだが、逆に見ると西側ラインをそろえた結果生じたと理解できる。

方形堂の南側未調査地を今年度SE区として発掘調査を行い、遺構・遺物の節で記したように広い意味で建物基壇とみられる遺構とそれに伴う犬走りや溝など、南北方向に延びる遺構や同じ調査区では多数の瓦類が出土している。遺構・遺物の出土状況とともに、東側隣接地に未発見の堂

宇が存在していることを示しているが、今回の調査ではその建物跡を確認するには至らなかった。栢ノ杜遺跡の場合、文献資料から残る主要な堂宇は三重塔だけであり、調査区東側隣接地に存在している可能性が高い堂宇跡は、三重塔跡と考えて良いだろう。

復元図作成過程での検討と今回の調査成果からは、三重塔は方形堂の南側に位置し、北側の二堂と西側ラインをそろえて、等間隔で建立されていたとの推論も、実態である可能性がかなり高くなった。この推論をもとに今後の確認調査の課題をより具体化する意味で、各種のデータを利用して三重塔の中心である塔心礎の中心点を推定し、復元図上に示しておく。

塔の中心点の推定においては、八角円堂と方形堂の東西方向中軸線間と等距離の、平行する東西ライン上に塔の中心点が位置すると考えて、モデルとした三重塔の中心点をそのライン上に乗せ、その西辺を方形堂西側ラインの南延長線にあわせる方法で行った。塔の西辺は、塔という特殊性を考慮して、塔の基壇西辺ラインを用いた。

なお、昨年度の寺域復元図に、推定の南限ラインを入れたが、今回のSE区の調査ではその推定南限ラインより南側で、礎石と見られる遺構を検出している。これらは、寺院に関連した施設が南辺部に存在している可能性を示唆する遺構ではある。しかし、推定南限ラインは、主要堂宇が存在する主要地の寺域南限ラインである可能性も残るので、今回は昨年度に入れた位置を変更しなかった。

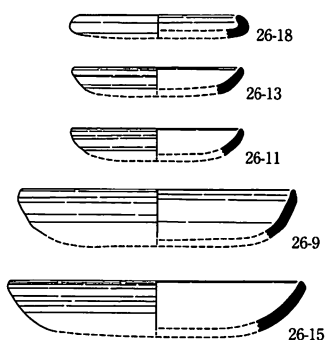
## 5 遺跡の成立から終焉

遺跡内から出土する遺物類は、その遺跡を利用した人々が、遺跡内において生活あるいは寺院址であれば仏事に使用した器物を加えた道具類である。なかでも遺存率がよく、各時代を通じてほとんどの層・遺構から、継続的に出土が見られる土器・陶磁器類の時間軸上での盛衰は、人々が関係したその遺跡の成立、継続、終焉という、遺跡の歴史全般を直裁に示し得る、唯一の基礎的な考古資料と言っても過言ではないだろう。

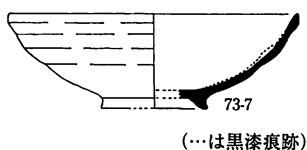
当栢ノ杜遺跡の場合も、その視点からの土器・陶磁器出土資料の整理が必要であると考えている。しかし、確認調査での出土量は少なく、1973年度の調査での出土資料の実見が今のところ難しい。このように、既出土土器・陶磁器全体を整理したうえで上述の視点での分析と結論を出すことが実質的に不可能である。このような状況下であり、今年度整理済みと既報告資料を対象にして、ここでは遺跡の成立から終焉を、土器・陶磁器資料からどのように見ることができるかの予察を記しておく。図55土器実測図は、上から下へ年代順に並べている。以下では流れに沿って説明を進める。<sup>註6</sup>

2001年度分として掲載している土師器皿類は、寺域南西部の整地層上面から成立している遺構からまとまって出土している。26-18は土師器皿Ac、26-11・13は皿N小、26-9・15は皿N大である。これらの土師器皿類は、その型式的特徴から京都V期新～VI期古の幅で理解しているものであり、12世紀後半代に比定できる。同時代に比定できる遺物は、同土師器と共伴出土している輸入白磁皿、また1973年度概報に掲載されている輸入白磁椀、同壺類などがある。幾つか出土し

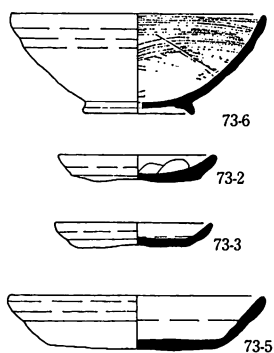
2001年度出土土師器皿



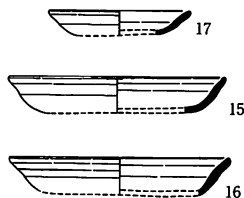
1973年度出土瓦器碗



1973年度出土瓦器碗・土師器皿



2002年度出土 土師器皿



1973年度出土 土師器皿

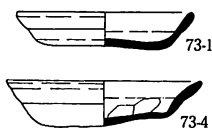


図55 栢ノ杜遺跡出土遺物実測図  
(1:4)

ている滑石の羽釜も、この時期に比定できる遺物である。

これら12世紀後半代頃に比定できる遺物は、土器の年代観から見ても、文献史料から知られる栢ノ杜遺跡の成立年代が、妥当な理解であることを示すものである。また話がここの主題から若干外れるが、2001年度出土土師器皿類は、寺域の南西端近くの整地層上面から成立している遺構から出土している点からは、整地層を用いた寺域の形成が創建期頃にはほぼ全域で行われたことを示す資料である。

73-7の1973年度出土瓦器碗は、内面に黒漆が付着しているのでヘラミガキの状態が分からない点は致し方ないとしても、外面にヘラミガキがまったく無かったのかという点に関しては、法量や高台の形状から見て結論を下すには実物の点検が必要であろう。古相を示す法量や高台の形状から、2001年度出土土師器皿類と同時代の12世紀後半代に位置するとみておく。

1973年度出土の73-2・3は、土師器皿N小であり、同73-5は、土師器皿N大である。大小ともに口縁部は、一段凹ナデとなっており、法量・形態等も考慮すると、京都VI期中～新の幅には収まるとみられ、13世紀前半代頃に位置けられるだろう。73-6の瓦器碗は、外面のヘラミガキは喪失しているとみられるが、内面のヘラミガキはまだ比較的ていねいなようであり、土師器皿類とほぼ同時代の資料としてよいだろう。ここでは図示しなかったが、他に同時期と見られるものに劃花文の龍泉窯系輸入青磁碗片、輸入天目茶碗、須恵器鉢片なども出土している。

13世紀後半代に比定できる土器類は、今のところ確認できていないが、本書に掲載している製塩土器風の土師器鉢は、13世紀では前半代に限定することが難しく、後半代に位置付けられる可能性がある資料の1つである。

今年度の調査で出土している17は土師器皿N小、15・16は土師器皿N大である。本書で先に記しているごとく、京都VII期中～新の幅でみておくべきであり、14世紀前半代頃の資料と理解している。ほかに同時期の遺物には、

瓦器鍋や須恵器鉢片などが見られる。

1973年度出土の73-1・4は土師器皿Nであり、両者ともに大に属するとみられる。体部から口縁部の断面形状や全形の特徴等からは、73-4は京都Ⅷ期古（14世紀後葉）に属するとみられるが、法量的には同Ⅷ期中（15世紀初頭）にまで幅をもたせて見る必要があるだろう。73-1は、図を見る限りでは、非京域主流の可能性はあるが、同一基準で見れば、京都Ⅷ期中～新（15世紀前葉）の幅には収まる資料である。しかし、断定的見解をもつには、実物を点検する必要がある。73-4の土師器皿Nと重複する14世紀後半代頃に比定できる遺物は、ほかに美濃産の山茶碗、瀬戸美濃系の灰釉陶器花瓶かなどが見られる。

このように栢ノ杜遺跡内から出土している土器・陶磁器類を見ていくと、少数見られる平安時代前期以前の資料をおけば、9世紀後半～12世紀前半頃に位置付けられるものは皆無と言える状態に近く、12世紀後半代（平安時代末期から鎌倉時代初頭頃）に入ると、土器・陶磁器類の出土が見られるようになり、出土量が明確に増加していくと言えるだろう。これは栢ノ杜遺跡の成立と発展に伴い、人々が遺跡へ定着し使用が本格化したことを反映していると理解される。

遺跡成立以後では、13世紀後半代に資料がやや薄くなる点をのぞけば、13世紀前半代（鎌倉時代）以降からはほぼ14世紀後葉から15世紀前葉頃（室町時代前期前半）までは、土器・陶磁器の出土が継続したものであることが理解できる。しかし京都Ⅷ期中頃の15世紀に入る室町時代前期後半頃以降には、土器・陶磁器だけでなく、遺物全般にわたり出土が見られなくなる。

このような土器・陶磁器類の出土状況は、平安時代末期に成立した栢ノ杜遺跡が、鎌倉時代から14世紀代の室町時代前期前半頃までは、全容を保ちながら継続するが、室町時代前期の14世紀代末頃から15世紀代に入る頃直後には、ほぼ完全に廃絶してしまうことによると考えられる。

1973年度分を含めて、栢ノ杜遺跡内から出土しているすべての土器・陶磁器類を、量的測面も含めて整理できれば、存続期間中の細かな盛衰についても把握できるものと考えているが、本書の概報という性格からも、既調査成果を含めた発掘調査資料の総合的整理は報告書にゆずりたい。

## 6 まとめ

今年度の遺跡確認調査は、遺跡の推定範囲内では北西部と南東部となる両地域において、それぞれの調査目的に沿ったトレンチ調査区を設定して、発掘調査を実施した。両地区ともに新知見を含む多くの調査成果を得ている。

北西部では、2箇所のトレンチ調査において連続する南北方向の比較的規模の大きな南北溝状遺構1を検出し、その東肩部が、遺跡西限となることが明らかとなった。北側のトレンチ1では、西縁部の施設等の柱穴とみられる南北に並ぶピットを2基検出しており、寺域西縁部に堀または築地が存在していた可能性の高いことが明らかとなった。南側のトレンチ2では、東方の史跡内園池に連なるとみられる東西溝状遺構1を検出している。同遺構は、寺域西限ラインを走る南北溝状遺構に合流しており、園池の水逃がし用の遺水と理解してよいだろう。

この結果、寺域内西辺部は、南半と北半で大きく様相が異なっていることが判明したが、寺域

西限ラインは第Ⅵ座標系の南北軸であるY軸とほぼ重なり、ほぼ真北方向を持ったラインであることが明らかとなった。このような西限ラインのあり方は、寺域設定に際して割り付け軸線が存在しており、施行もそれに沿って行われたことを示していると理解される。

南西部では、東西トレンチ1において南北方向の石垣基壇及びそれに伴う犬走りと並走する南北溝状遺構を検出した。それらの遺構上面に堆積している土層からは多量の瓦類が出土している。両資料の検出状況から、東側隣地に寺院内の残る主要堂宇の一棟である三重塔跡が存在していたことがほぼ明らかとなった。しかし、調査区が、近隣住民の要望を受け入れた影響で、若干西へ寄りすぎたためか、三重塔跡を確認するには至らなかった。

このように北西部では、ほぼ調査目的を達成することができたが、方形堂の東西中軸線の延長ラインと寺域西限ラインの交点付近に存在が予測される門が、新たな調査課題として鮮明に浮かび上がってきている。今後の西辺部での調査の第一課題とする必要があるだろう。

南西部では、今年度の調査で検出できなかった三重塔跡の確認が、今後の発掘調査での大きな宿題となった。また今年度の調査によって検出している基壇、犬走り、溝状遺構の南北への拡がりを目指し、その全体像を把握すること、および南辺部に想定される施設の実態を解明することも、南西部における今後の発掘調査での重要な課題となるだろう。

#### 引用・参考文献

註1 『京都市遺跡地図台帳』京都市文化市民局 1996年。

註2 杉山信三他『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1974年。以下1973年度の調査についてはこの文献による。

註3 中島俊司編著『醍醐寺雑事記』総本山醍醐寺、1973年。

註4 小森俊寛「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年。以下2001年度調査についてはこの文献による。

註5 軒瓦の類例は、註2・長谷川行孝「瓦類」『東福寺防災施設工事・発掘調査報告書』東福寺 1990年・奈良国立文化財研究所編『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第九冊 同研究所 1960年を参考にし、分類記号を付した。

註6 図55の土器番号は註2・註4の挿図土器番号に準ずる。

# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしなしいせきはつちようさがいほう							
書名	京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	出口 勲、百瀬正恒、田中利津子、上村和直、小森俊寛							
編集機関	働京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1 TEL075-415-0521							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-0925 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488 TEL075-222-3108							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山科本願寺南殿跡	京都市山科区音羽伊勢宿町38-1 他	26100		34度58分53秒	135度49分34秒	2001/11/12～ 2002/1/25	501㎡	個人住宅
長岡京跡東院推定地	京都市南区久世殿城町600-1	26100		34度56分52秒	135度43分12秒	2002/1/28～ 3/6	160㎡	範囲確認調査
方広寺大仏殿跡	京都市東山区大和大路通正面茶屋町(豊国神社境内)	26100		34度53分53秒	135度40分32秒	2002/7/22～ 8/9	79㎡	範囲確認調査
平安宮西院跡	京都市上京区下立売通千本東入ル中務町928番地他1筆	26100		35度53分16秒	135度44分56秒	2002/10/21～ 12/2	160㎡	個人住宅兼集合住宅建設
栢ノ杜遺跡	京都市伏見区醍醐南森町29番地、醍醐南端山20-2	26100		34度56分19秒	135度49分13.5秒	2002/10/21～ 12/25	206.8㎡	範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山科本願寺南殿跡	寺院跡	室町時代	土塁・堀・暗渠・建物・土塙・溝	土師器・瓦器・焼締陶器		南殿北東隅の土塁・堀を検出した。		
長岡京跡東院推定地	官殿跡	長岡京期	築地・溝・土塙	土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器		東院東限築地を検出した。		
方広寺大仏殿跡	寺院跡	安土桃山時代・江戸時代・明治時代	基壇盛土・地覆石抜き取り跡・土塙	土師器・瓦類・土製品人形・国産施釉陶器		大仏殿基壇西辺部を検出した。		
平安宮西院跡	官殿跡	古墳時代・平安時代・鎌倉時代～室町時代・江戸時代	築地・土塙・柱穴・井戸・土取穴	土師器・須恵器・緑釉陶器・軒瓦		西院西面築地を検出し、変遷が明らかとなった。		
栢ノ杜遺跡	寺院跡	平安後期～鎌倉時代 桃山・江戸時代	整地層	土師器・輸入陶磁器・瓦・近世陶磁器		寺城西辺施設を検出した。		

版 圖





1 3トレンチ全景（北から）



2 5トレンチ全景（西から）



1 1トレンチ全景（北西から）



2 2トレンチ全景（西から）



1 5トレンチ 堀1 完掘状況 (北から)



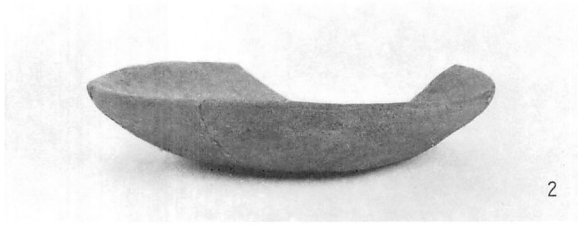
2 5トレンチ 堀1 断面の状況 (北壁 南西から)



1 3トレンチ 暗渠4・溝8 (南西から)



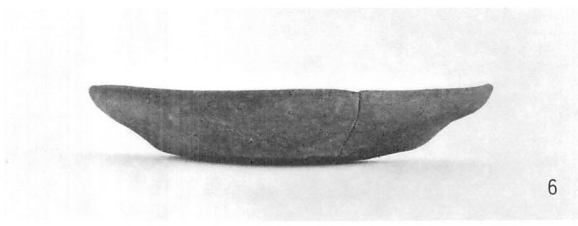
2 3トレンチ 建物5・柵6 (西から)



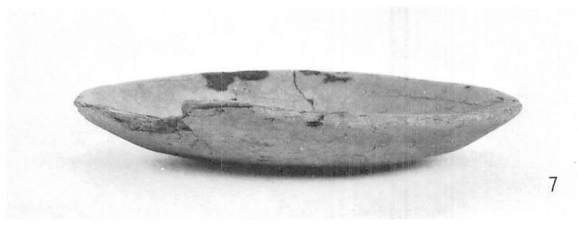
2



5



6



7



10



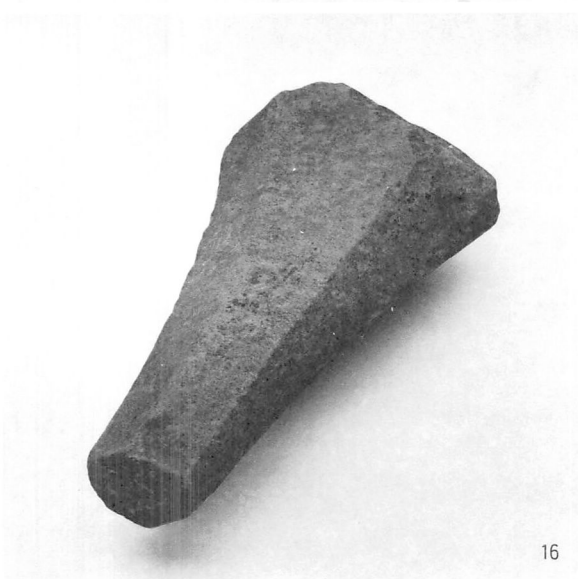
8



4



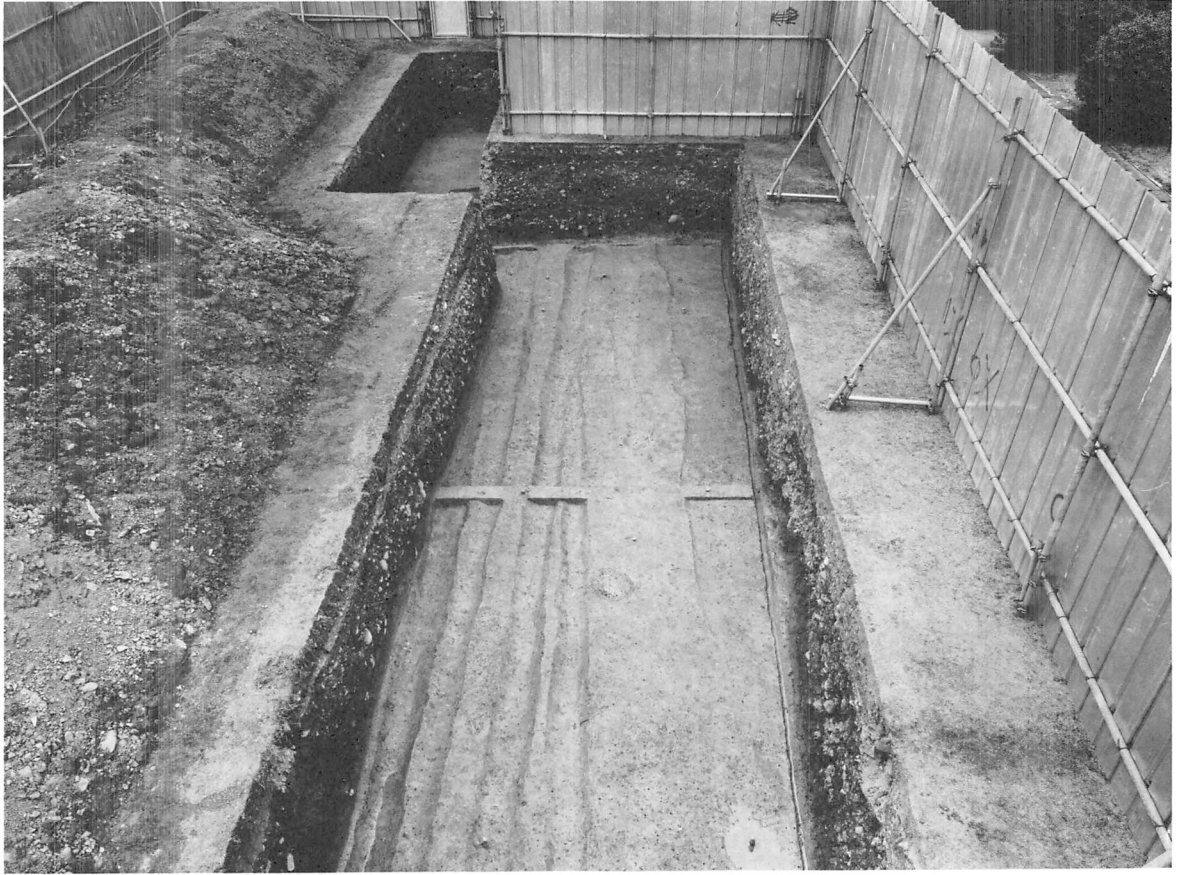
15



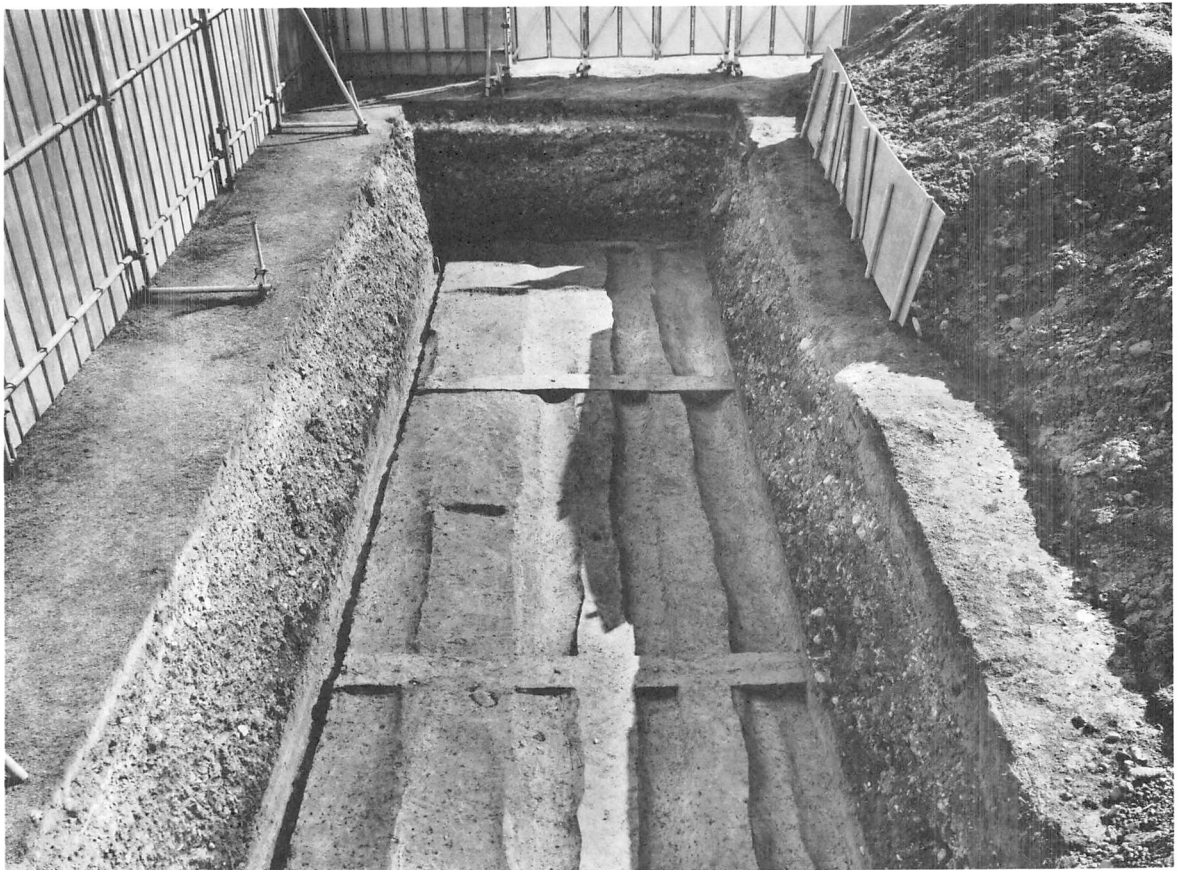
16



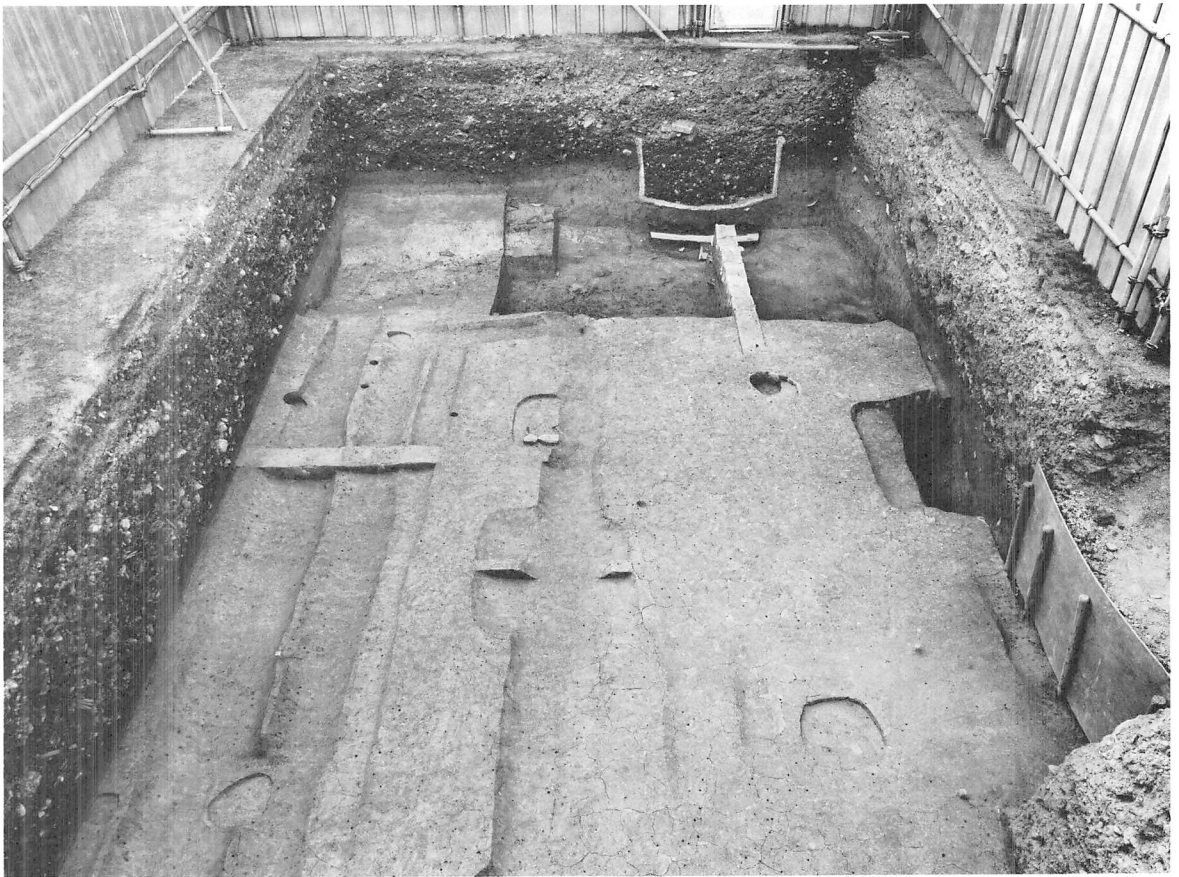
14



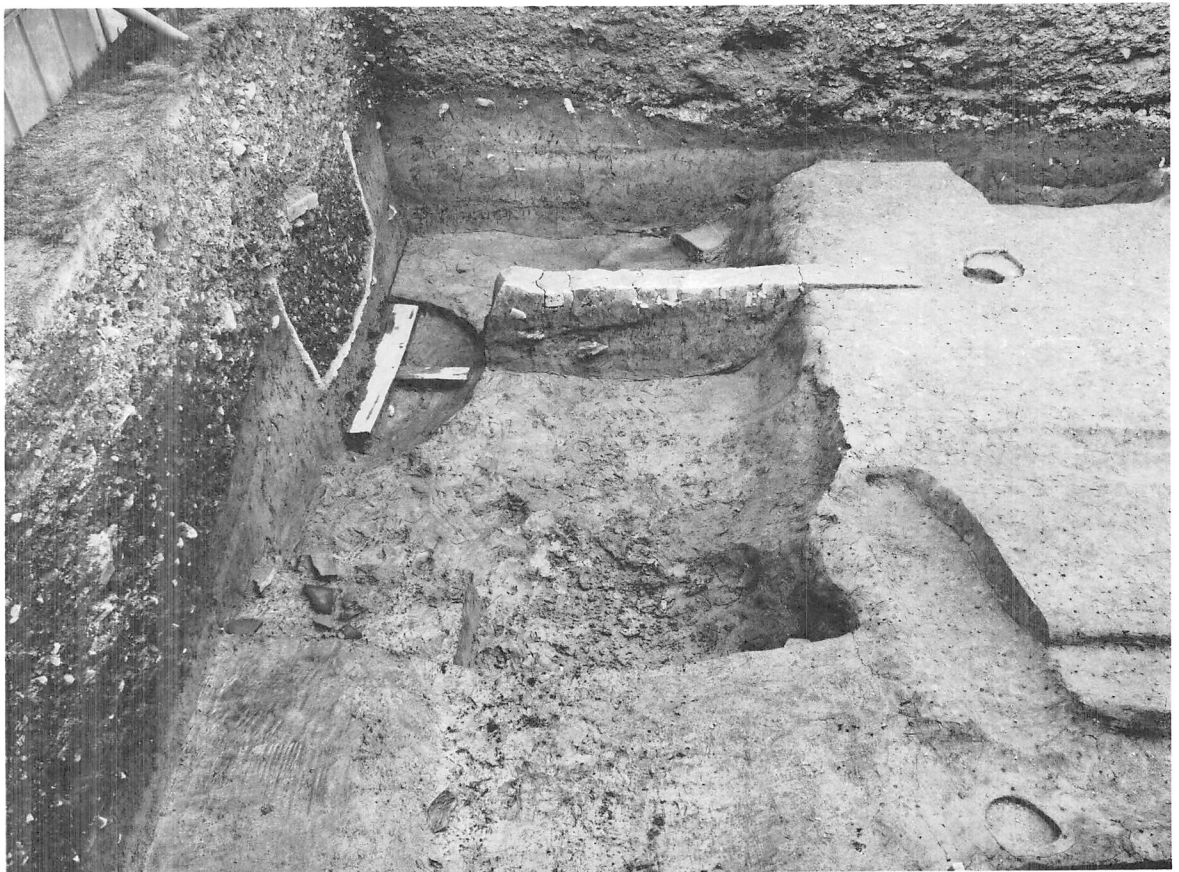
1 西区 近世耕作溝群全景（東から）



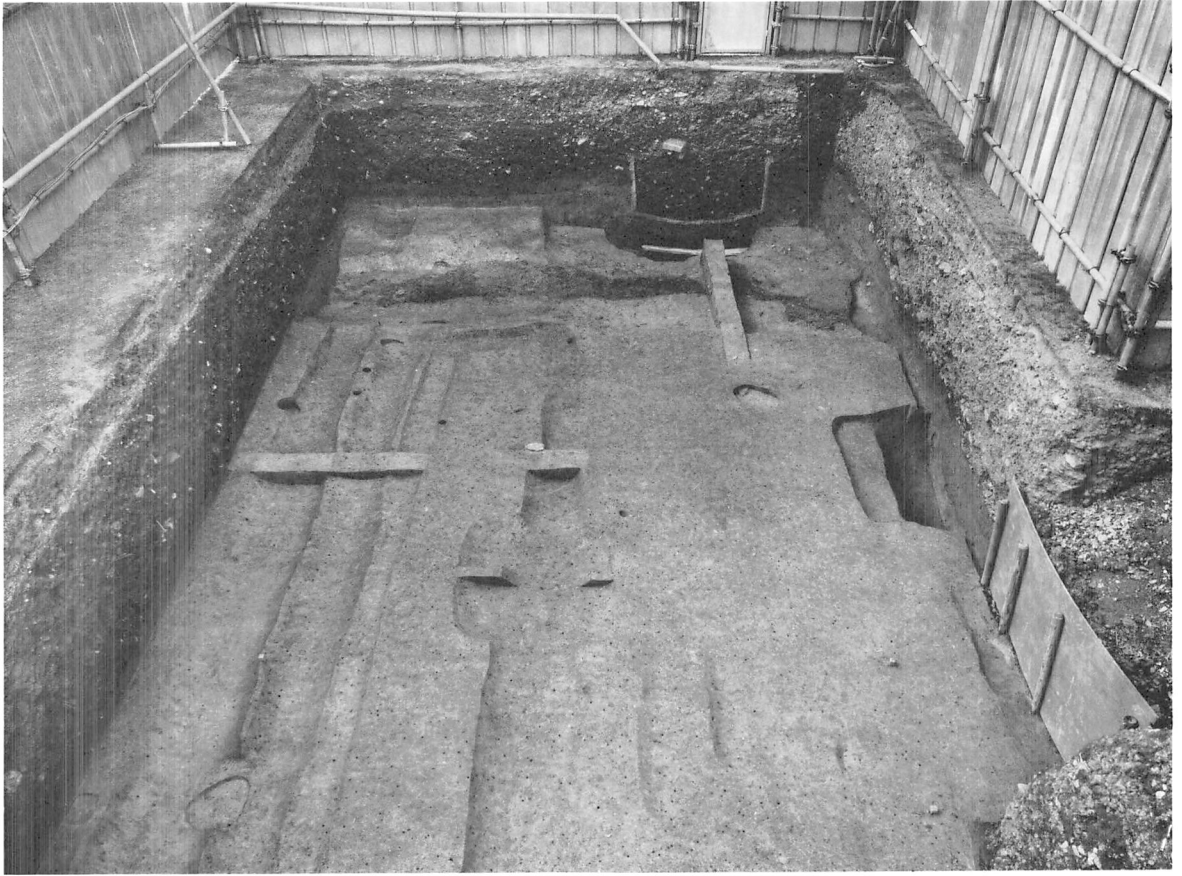
2 東区 近世耕作溝群全景（西から）



1 西拡張区 長岡京期全景 1期 (東から)



2 西拡張区 SD50全景 1期 (南から)



1 西拡張区 長岡京期全景 2期(東から)



2 西拡張区 SD50全景 2期(南から)

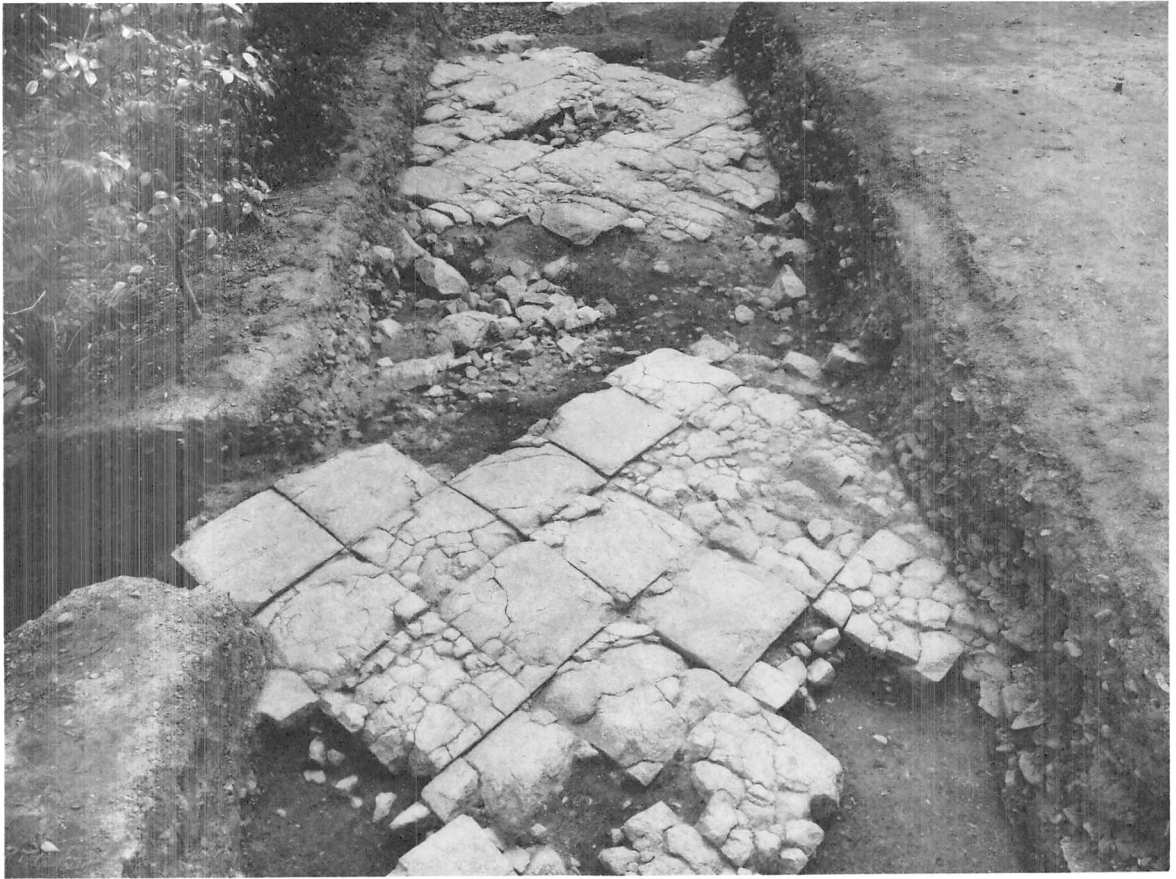




1 調査区全景（東から）



2 調査区全景（西から）



1 2000年度調査1区 石敷き (北から)



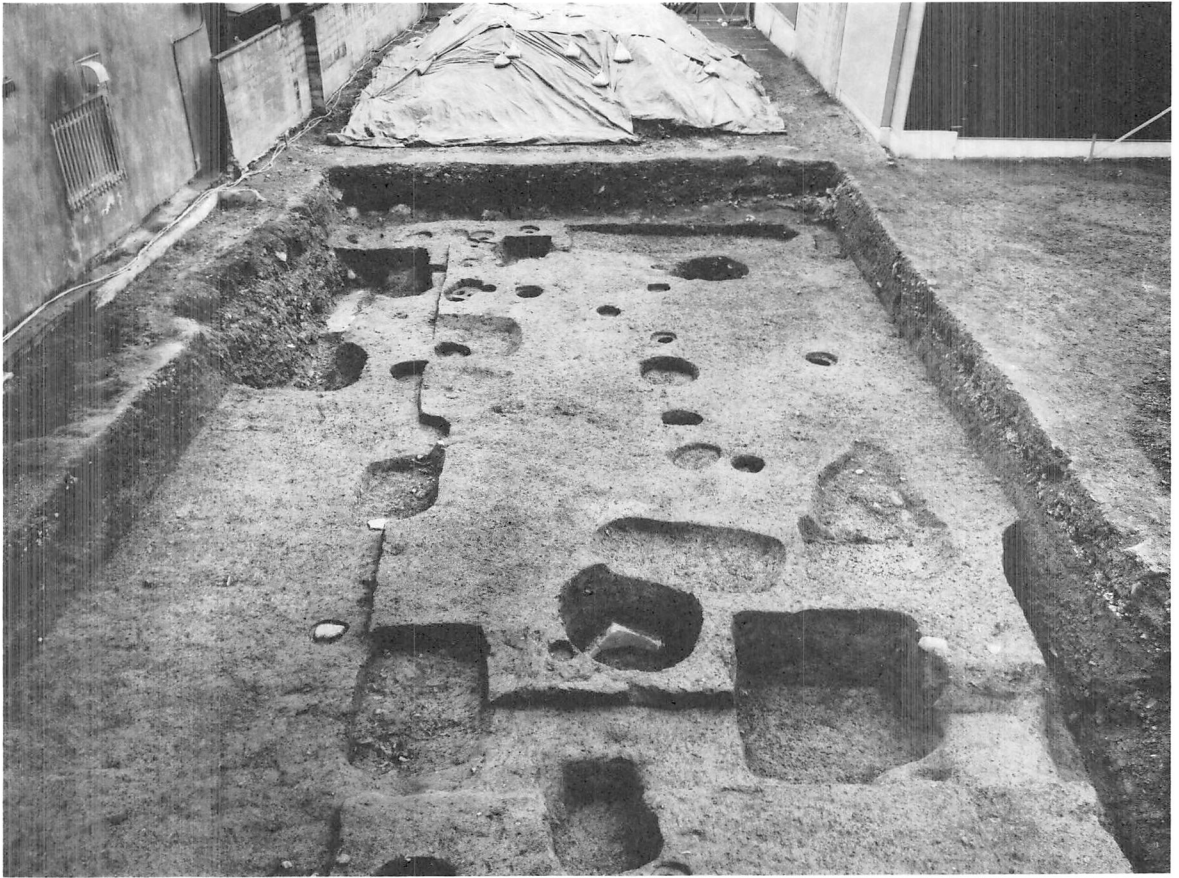
2 2000年度調査1区 根固め検出状況 (東から)



1 2000年度調査2区 大仏台座検出状況（西から）



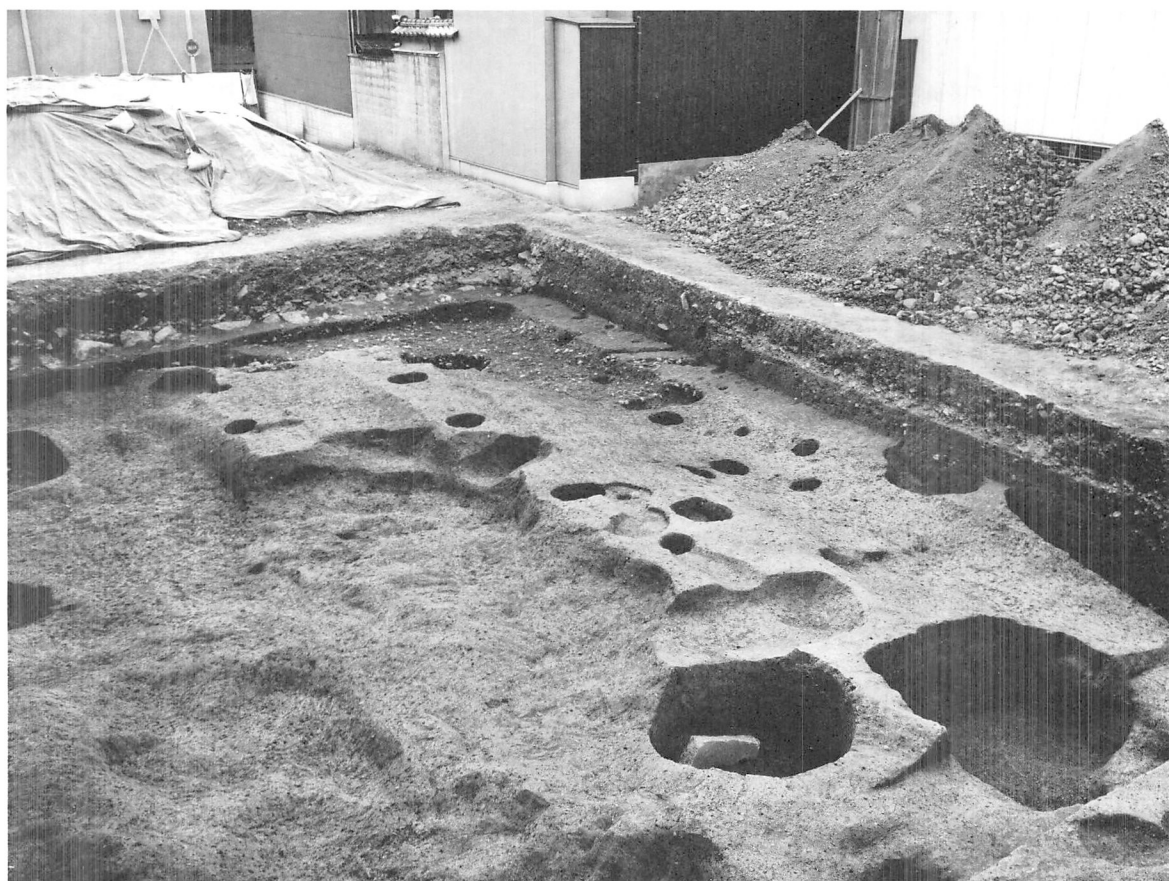
2 2000年度調査4区 基壇南端部・地覆石検出状況（南から）



1 第1面全景（北から）



2 第2面全景（北から）



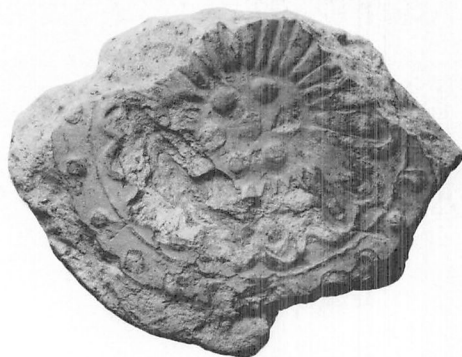
1 築地150 (北東から)



2 調査区北壁断面 (南東から)



1



4



2



5



3



7



9



10



11



16



15



18



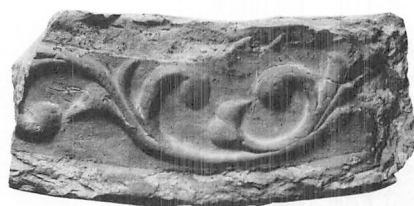
22



20



23



24

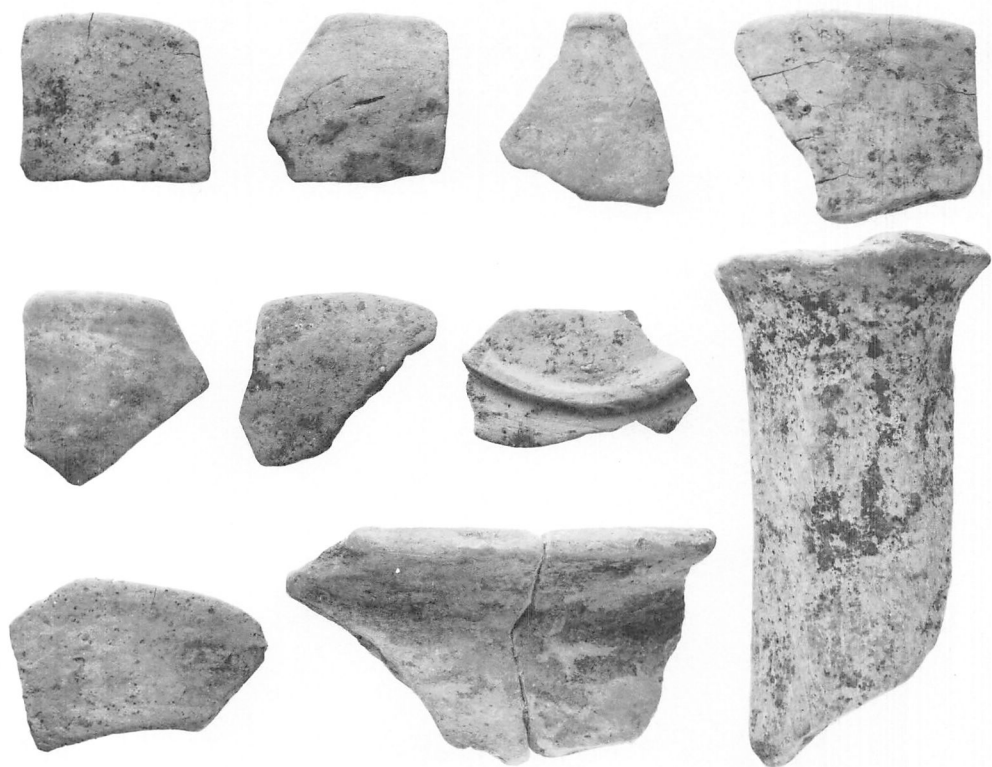


17



29

出土軒瓦



1 溝70出土土師器



2 溝70出土須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器

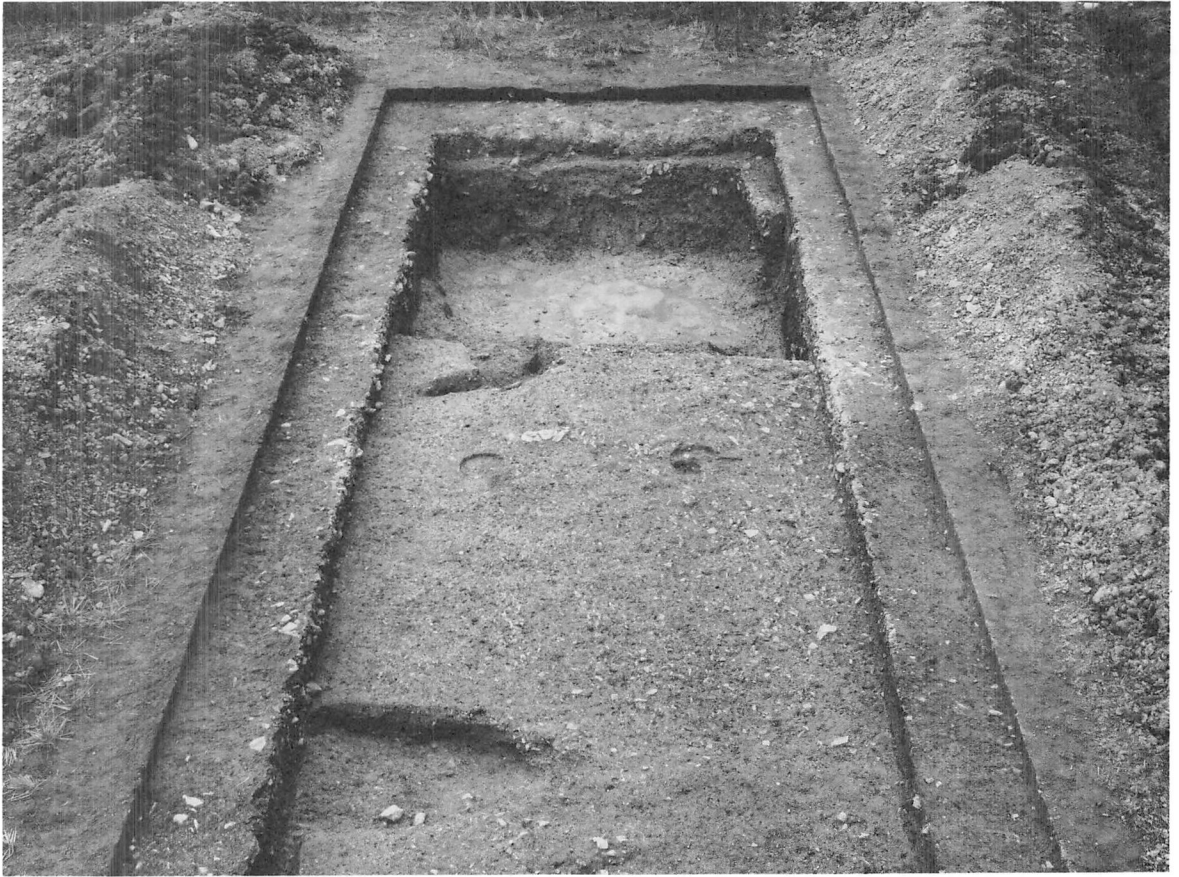




1 NW区全景（東から）



2 SE区全景（北から）



1 NW区トレンチ1 (東から)



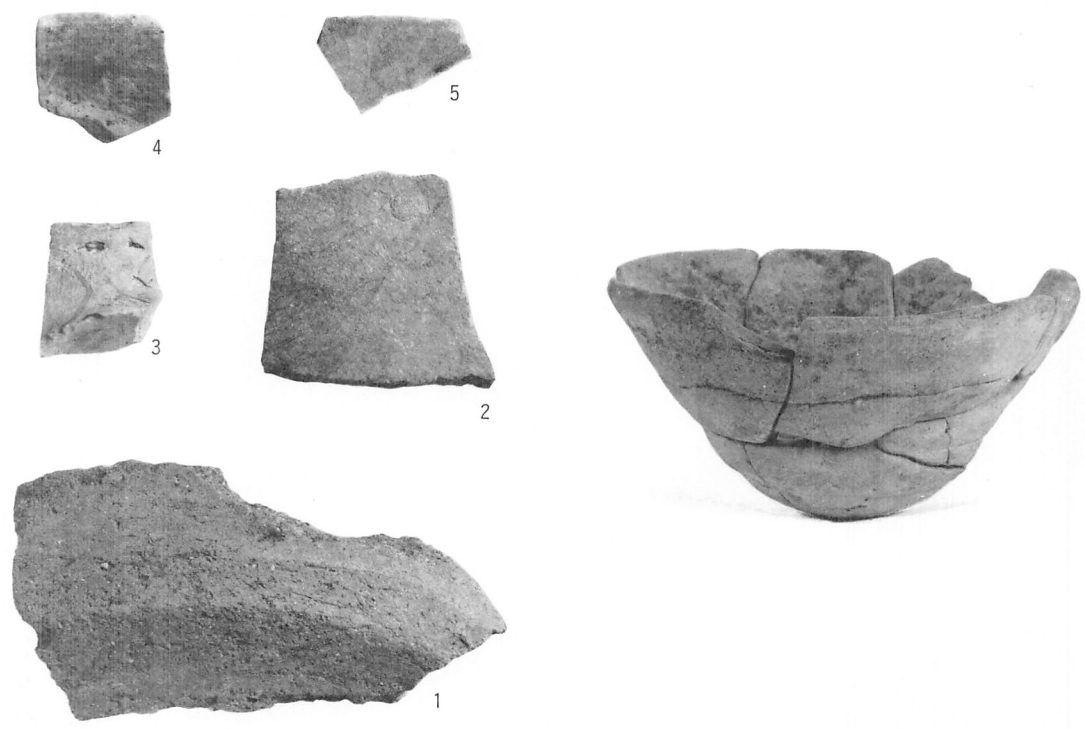
2 NW区トレンチ2 (東から)



1 SE区東西トレンチ1 (西北西から)



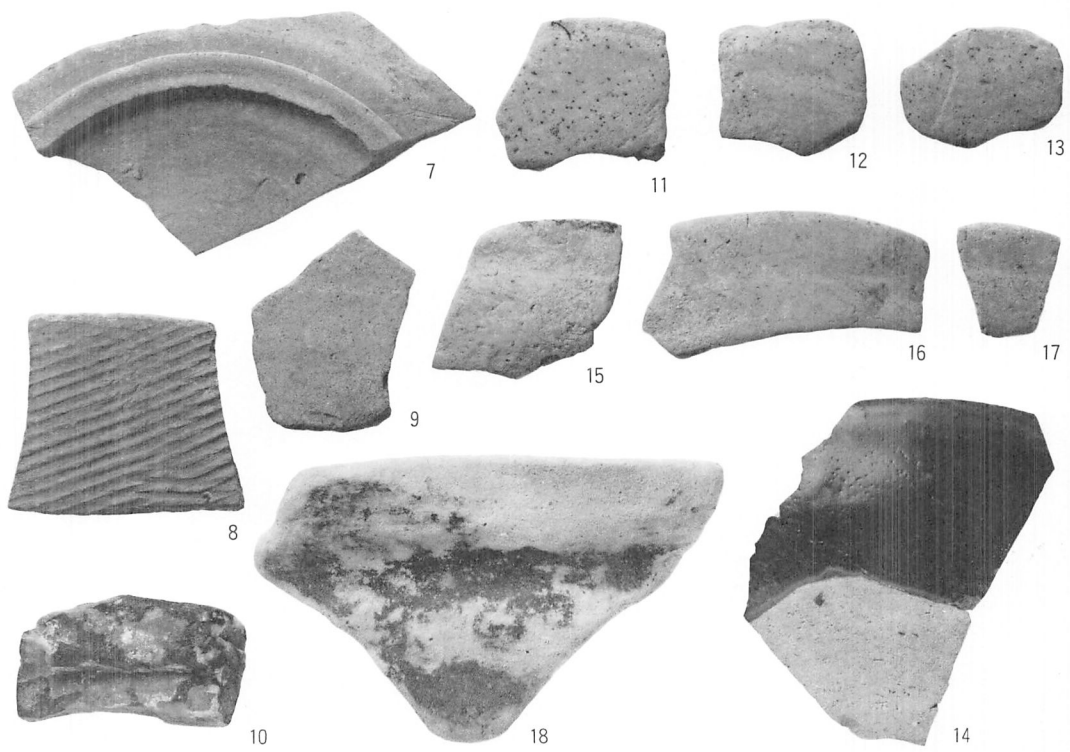
2 SE区南北トレンチ (北から)



6

1 NW区出土土器

2 SE区出土土器



3 SE区出土土器



6



3



7



9



5



8



4



1



2

# 京都市内遺跡発掘調査概報

平成14年度

発行日 2003年3月31日  
発行 京都市文化市民局  
住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488  
編集 叻京都市埋蔵文化財研究所  
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1  
TEL (075) 415-0521  
印刷 真陽社